



インド洋のクレオール民話

—セーシェルとレユニオン—

編訳・小田淳一

絵・小田賢

インド洋のクレオール民話
—セーシェルとレユニオン—

編訳・小田淳一

絵・小田賢

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

本書の刊行は JSPS 科研費 19KT0025 の助成を受けた
ものです。

The publication of this book was supported by JSPS
KAKENHI 19KT0025.

はじめに

本書はインド洋西域島嶼地域で筆者が採取したセーシェル・クレオール語とレユニオン・クレオール語による民話のうち、既に刊行した二つの地域の民話集¹に未集録の物語を訳出したものである。また2014年以降に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から刊行しているインド洋西域島嶼世界民話集シリーズの第九巻目に相当する。二つの地域とそれぞれのクレオール語についての詳細は既刊の民話集を参照されたい。

本書に集録したセーシェル民話はセーシェル国立文書館所蔵のタイプ稿第一巻 (*Samuel Accouche: Creole stories from various contributors. Vol. I*, 参照番号: F/2.193) の後半に収められている十八編である。このタイプ稿 (全二巻) についてはセーシェル共和国観光・文化省から許諾を得て既に第一巻の六十編²を訳出しており、本書所収の訳と合わせると第一巻全八十四編のうち七十八編を訳したことになり、外国語に訳されたセーシェル民話の数としては恐らく最も多いものと思われる。なお、本書で訳出しなかった六編は以下のようなテキストである。

1. セーシェル国立文書館から入手したコピーが不鮮明で殆ど判読ができなかったもの。

¹ 小田淳一 (編訳) 『セーシェルの民話I』 (2014), 『セーシェルの民話II』 (2015), 『レユニオンの民話』 (2020)。いずれも東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所刊。

² 『セーシェルの民話I』三十二編, 『セーシェルの民話II』二十八編。

2. 明らかに「民話」とは異なるジャンルのもの（例えば、十九世紀フランスの小説家アルフォンス・ドーデが書いた短編をそのままセーシェル・クレオール語に訳したテキスト）。
3. 他の民話と比較してかなり長く、内容的に粗悪なもの（極端な場合は粗筋の羅列のみ）。

本書には、既刊のセーシェル民話集と同様、セーシェルとは異なる国や地域のよく知られた民話をセーシェル・クレオール語に訳したものが何編か含まれているが、それは他地域の民話がセーシェルに伝播した痕跡といったものではなく、アクーシュがインタビューした人々の個人的な嗜好を表しているに過ぎないだろう。また、既刊のセーシェル民話にしばしば登場するトリックスターのチジャンや様々な動物たちは本書では殆ど見当たらず、その点でセーシェルらしさに些か欠ける嫌いがあるが、それは訳出した民話がタイプ稿第一巻の最後の方に収められていること（つまりアクーシュによる何らかの分類の結果）と関係している可能性がある。

既刊のセーシェル民話集の解説でも述べたが、タイプ稿テキストはアクーシュがインタビューした録音をほぼそのままタイプ打ちした原稿であると思われ、多くのミスタイプや正書法の不統一があり、さらには編集の手がまったく加えられていないために稚拙な表現が散見される。この同じタイプ稿を参照して刊行したドイツの言語学者アンヌグレ・ポレや米国の民俗学者リー・ハリングの民話集³は編集してはあるものの、収められた

³ Samuel Accouche and Annegret Bollée eds., *Ti anan en foi en Soungoula: Creole stories from the Seychelles*, H. O. Hövelborn, 1976; Lee Haring, *Indian Ocean folktales: Madagascar, Comoros, Mauritius, Réunion, Seychelles*, National Folklore Support Centre, 2002.

物語の数は僅かであり、彼らは様々な瑕疵のあるこのタイプ稿に多くの時間を費やすことを断念したのであろう。セーシェル共和国観光・文化省が筆者にタイプ稿の翻訳をすぐ許諾してくれた理由のひとつはひょっとしたらそれかも知れない。

本書が訳出したレユニオン民話は専門的な語り部であるアンヌ・シェネ (Anne Cheynet) 氏の四編とジャン＝ピエール・アカパンディエ (Jean-Pierre Accapandé) 氏の一編⁴で、それらはいずれも筆者が既に採録していたが、種々の理由から既刊の民話集には含まれなかったものである。

アンヌ・シェネ氏は一九三八年生まれで、民話の語り部以外にも作家や詩人として半世紀に亘って活動し、「レユニオン文学」の草分け的存在と評されており、近年では音楽や演劇などにも

⁴ この「秘密のコーヒー」は十九世紀始めにサイクロンと疫病によって絶滅したとされるコーヒーの物語である。この品種は日本の企業とフランスの研究所が共同で復刻し、現在では「ブルボン・ポワンテュ」の名で知られている。数少ない生産量の約八割が日本に輸出され、年に一回特設サイトで保証書を付けて販売されている。二〇二二年は天候不順のために販売が中止されたが、次回の販売価格は最近の円安状況を考えると百五十グラム当たり二万円ほどになるかも知れない。このコーヒーにまつわる歴史的に興味深い一種の対称性がある。レユニオンでコーヒー栽培がほぼ壊滅した時期と前後して起こったハイチ革命（一七九一～一八〇四）によって当地のサトウキビ畑が焼失し、長らくフランスに砂糖を供給していたハイチはその後コーヒー栽培に転じた。そしてレユニオンでは絶滅したコーヒーの代わりにサトウキビが栽培され、ハイチに代わるフランス本土への砂糖の供給地として、現在まで二百年以上続く典型的なモノカルチャーが始まったのである。

積極的にコミットしている。本書に集録した彼女の民話は二〇一六年から翌年にかけて行われた口演に基づいており、彼女自身が翻刻を担当してくれた。それらの物語は彼女の言わば十八番のレパートリーで、同じ物語の語りがインターネット上でも公開されている。

ジャン＝ピエール・アカバンディエ氏は一九七九年に音楽家の一族に生まれ、十歳から伝統楽器の演奏を始め⁵、十七歳からは楽器の製作にも携わり、今では十種類以上の楽器の製作者として多くのセミナーで講師を務めている。民話の語り部としては高校で課程修了証を取得した後、さらに幾つかの民話団体の研修を受講している。二十歳過ぎに地元の劇団に座付き音楽家兼俳優として入団し、現在はアンヌ・シェネ氏と共同で脚本の執筆や演出も手掛けている。彼自身によるとセネガルとマダガスカルという二系統の祖先の音楽文化を継承することに専心し、取り分け、グリオ（西アフリカの世襲制の伝承音楽家）の影響を受けている。

これまで述べてきたことから自明であるが、本書に収められたセーシェル民話とレユニオン民話は発話状況が全く異なっている。セーシェル民話は、恐らくはアークシュひとりの前に

⁵ アカバンディエ氏は優れたマルチプレーヤーであり、日本に招聘した際には御茶ノ水駅近くの楽器店で、自分のライブで使うために幾つかのルーパー（リアルタイムの多重録音が可能で録音したフレーズをループ再生できるエフェクタ）の機能を確認するために、渋る店長を説得して店頭で並べられていたエレキ・ギターを借りて色々試奏し、日本製のコンパクトな機種を購入して持ち帰った。

して、必ずしも語りの専門家ではない協力者がテープレコーダに向かって語ったものであろう。一方、シェネ氏とアカパンディエ氏によるレユニオン民話は、民話口演の実践が盛んなレユニオン島でよく行われている、語り部宅での私的な「民話の会」で収録されたものである⁶。民話関連団体がチケットを販売して実施する大規模な会も勿論あるが、私的な民話の会の方は、比較的人数の少ない聴き手（その殆どが専門の語り部である）を前に、練達の語り部が広範な知識を物語に織り込み、話芸の技巧を凝らして、しばしば饒舌過ぎるまでの口演を披露するという、まさに語り部と聴き手の共存性が顕現される饗宴である。参加人数が多い会では、みんなで持ち寄った料理や酒を楽しみながら、しばしばマロヤ（レユニオン島の民俗音楽）が幕間に演奏される中を深夜まで語りが続く。

本書は、原語テキストと日本語訳テキストを対訳形式で集録した既刊のインド洋西域島嶼世界民話集⁷とは異なり、日本語訳のみを収録している。その理由は、前述した通り、セーシェル民話のタイプ稿にはミスタイプが非常に多く、それらを本書に集録するための修正作業に要する時間数を見積もったところ、科研費の助成を受けられる研究期間内に本書を刊行することが

⁶ シェネ氏の四編のうち『《十八池》の人魚』は彼女の自宅で、「ババ・レガ」はアカパンディエ氏宅で、またアカパンディエ氏の「秘密のコーヒー」はシェネ氏宅で行われた「民話の会」で語られたものである。

⁷ 例外はモーリシャスのボージプリー語民話であり、デーヴァナーガリー（インドの文字）の転写が煩雑なために一部のテキストのみを原語で表記した。

困難であるとの判断に至ったからである。しかし、日本語訳に限定したことで、既刊の対訳形式による民話集の日本語訳が、対置された原語テキストに忠実であろうとする余り生硬な表現が多くなってしまったのとは異なり、原語テキストの存在というある種の束縛を逃れたことで、幾らかは読みやすい日本語となったのは望外の僥倖と言えよう。

本書の表紙デザインは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・広報企画担当の本田直美研究員、また表紙絵及び本文中の挿絵は日本画家の小田賢氏（創画会会友）によるものである。最後に、両氏に加えて、遅々として進まない筆者の訳業を翹望してくれた西東京の友人たちに謝意を表したい。

Ho an'ny angovo amin'ny Hideo Fukazawa

インド洋のクレオル民話
—セーシェルとレユニオン—

目次

1. ピエール殿	1
2. 不幸と死	8
3. 不幸の男	12
4. サンドリヨン (シンデレラ)	22
5. 自分の血と結婚した王子	30
6. 不愉快な鏡	36
7. 悪妻	40
8. ジャンヌと地獄の薔薇	43
9. 三つの願い事	53
10. 魔法の蛇	57
11. 愚かなジャンの物語	65
12. 未亡人と二人の娘	69
13. 母の愛	72
14. 隅っこの爺さん	75
15. 聖処女	77
16. 不思議な髪の毛	80

17. 山賊のジャン	83
18. 長靴をはいた猫	87
19. 《十八池》の人魚 (アンヌ・シェネ)	92
20. 老いた魔法使い (アンヌ・シェネ)	106
21. キアセク (アンヌ・シェネ)	120
22. ババ・レガ (アンヌ・シェネ)	132
23. 秘密のコーヒー (ジャン＝ピエール・アカバンディエ)	148

1. ピエール殿

昔々、ピエール殿と呼ばれる金持ちの男がいた。

ある日、彼は腰を下ろして思った：

『目の前の町を見るのもう飽きたな。旅にでも出かけるべきだろう』。

ピエール殿は身の回りのものを整えて、二週間分の旅行の準備を始めた。

翌日彼は森の中を旅人のように歩み始めた。彼は山を這い登った。その山はここマヘ〔セーシェル共和国の首都ヴィクトリアがある島。島名はマスカレーニュ諸島の総督を務めたベルトラン＝フランソワ・マエ・ドゥ・ラ・ブルドネに由来する〕にあるような山のひとつに似ていた。山頂で彼は世界中のあらゆる場所を見ることができ、彼は思った：

『ああ、私がいつもいる村では、こういうものはまるで見たことがなかった』。

彼は今までまったく見たことのない風景を味わい尽くし、望みを果たすと山を下って旅を続け、さらにあちこちを見続けた。彼はかれこれ半マイルほど歩いてから思った：

『ここにはどんな人々が生活しているのだろう』。

そこで彼はその近くに引っ越した。

彼は葉っぱでできた家を見つけた。戸口には女性が座っており、パンを作るのに使われるキャッサバをおろしたものを売っていた。ピエール殿が「こんにちは」と言い、女性が「こんにちは」と答えた。ピエール殿は「ごきげんいかがかな」と尋ねた。女性は答えた時に驚いたように震えていた。

さて、ピエール殿はどこに来たと思うかな。実は、彼は
大泥棒の家に来てしまったのだ。その家には九人が住んで
いた。女とその夫、そして七人の子供たちだ。六人の息子
と娘が一人。娘は六番目で末っ子は七歳だった。

ピエール殿は娘のことをすぐに好きになった。彼が娘を
愛したのは、その美しさのせいではなく貧しさゆえだった。

父親と兄弟たちが泥棒に出かけている間に妻が村に行く
と人々は観光客たちの話をして、彼らが金をたくさん持っ
ているとの噂をしていた。彼女がピエール殿の服を見た時、
上から下までマドラ【マヨット島（コモロ諸島のひとつで
フランスの海外県）の高級ブランド】だったので、夫と五
人の兄弟にすぐ家に戻るように頼んだ。彼女は彼らがピエ
ール殿の服を手に入れたら、夫が二度と盗みをしなくなる
と思っていた。ところがピエール殿はそんなこととは露知
らず、娘と末っ子を相手に長いおしゃべりをしていた。

妻は台所に行ってコーヒーを淹れた。彼女は娘とピエー
ール殿のために二杯淹れてから、ピエール殿のカップに毒を
入れた。彼女がカップを持って来た時、娘はピエール殿に
言った：

「コーヒーを飲まないように。あなたのカップには毒が入
ってます。

ー 馬鹿なことを言うんじゃない。誰も僕のような男を殺
しはしない。僕は誰に対しても悪いことなんかをしていな
いし、それどころか世間ではいいことをしている」。

娘は彼のカップを取ってコーヒーを捨てた。それから自
分のカップを取ってピエール殿と分け合い、彼らは半分ず
つ飲んだ。

妻は食事を作る時にもピエール殿の皿に毒を入れた。娘はピエール殿に言った：

「料理を食べないで。あなたの食事には毒が入ってます。

－ そういう否定的な考えを持つのはよくないよ」。

娘は彼の皿を取り上げて捨て、それから自分の食事をピエール殿と分け合った。

そうこうしている間に二時頃になり、娘はピエール殿に言った：

「もうすぐ父と兄たちが帰って来てあなたを殺すでしょう。

－ ああ、馬鹿なことを言うんじゃない。誰も僕を殺そうなんてしない。でもとにかく君の言うことを聞いてすぐに出発しよう。君のことを愛しているからね。でも死ぬのは怖くないよ」。

ピエール殿は母親に、いつになるかはわからないがそのうち戻って来ると言った。末っ子は大きな目で自分の両手を見つめ、それから姉を見た。

ピエール殿は出発し、一マイルほど歩いた頃に娘の父親と兄たちが家に戻った。父親は家に着くと尋ねた：

「例の旅人は来たかい。

－ この前、観光客と呼ばれている旅行好きの金持ちがいて話したでしょ。そのうちのひとりが今日来たわ。あいつが着ていた服をいただいたら盗みを止めるのに十分なほどよ。

－ そいつはいまどこにいる」。

末っ子が言った：

「姉さんが逃したよ」。

すると妻が言った：

「いま行けば追いつけるわ。」

そこで夫は五人の息子たちと一緒に、大きな棒を持って走って追いかけた。母親はすりこぎ棒を半分に切ってひとつを末っ子に渡し、娘に言った：

「お前も償いをするんだよ。」

その間にピエール殿は川に着いていた。彼が立って向こう側を眺めていた時、背後に足音が聞こえた。確かめるために後ろを振り向くと、ひとりの男がシャツのカラーを背中に垂らして息を切らしながら走って来るのを見た。ピエール殿は男に何があったのかを尋ねると男が言った：

「何があったのかどころじゃない。来て見なさいよ。あんたは私を転ばせたんだよ。」

ピエール殿はどうして彼が転んだのかを尋ねようとしたが男は言った：

「私の前を歩いてくれ、何も言わないで。」

可哀想なピエール殿は男の方に戻らざるを得なかった。男は彼の前を歩いているピエール殿を見て、飛び掛かろうとした。ところがピエール殿が剣を帯びていたので男はやめておいた。

彼らが家に着くと妻がすりこぎ棒を掴んだが、夫がそれを制して言った：

「いや聞くんた。まずはこいつをどうするか決めよう。」

それと同時にピエール殿は剣を抜いて言った：

「この剣で私は七万人を殺したのだ。」

彼は妻と夫と五人の息子を切り殺した。娘と末っ子は生かしておいた。彼は家も切り刻んだ。

ピエール殿は娘に尋ねた：

「お嬢さん、私がしたことを気に入りましたか。

－ 私のことをお嬢さんなんて呼ばないで。ジャンヌと呼んで。

－ 有難うジャンヌ。私のことはピエール殿と呼んで下さい。さてこうなったからには私と一緒に来て下さい。あなたのご両親は死んでしまった。彼らは余りにも生き急いだのだ。彼らはすべてを永遠に失ったが、あなたと弟は幸せになるだろう。

－ 弟も殺して下さい。あなたを傷つけるかも知れません。

－ 馬鹿を言うてはいけない。彼のような小さな子供は幸せに育つのだ。彼にどんな悪いことができるだろう。

－ あの子を殺して下さい」。

しかしピエール殿は子供たちを愛していたので、彼女の頼みを聞き入れなかった。彼はジャンヌに言った：

「さあ、歩こう」。

彼は少年の手を取って村に向かって歩いた。川の近くに着くとピエール殿はジャンヌに言った：

「ちょっと水浴びをしよう。

－ 私は泳げないのでここに座ってあなたを見えています」。

そこでピエール殿は少年に三ルピーを渡し、三人分の食事と冷えた水を三本買いに行かせた。ピエール殿は服を脱いで水に飛び込んだ。少し経って少年が戻って来てピエール殿に言った：

「買って来たよ。

- ひと皿取りなさい。ジャンヌも。少し食べなくてはね。
- 私はあなたを待つわ。それから一緒に食べましょう」。

少年は食事を終えるとピエール殿の服を取って言った：
「さあ、ピエール殿、水から上がってここに来て下さい。あなたが僕の家族に今日したことを、僕にもするのでしょうか」。

ピエール殿が水から出てきた時、少年はすでに剣を取っており、ジャンヌがピエール殿に来ないように言ったが時既に遅く少年はピエール殿を四つに切り刻み、彼は死んだ。

少年は残りの二人分の皿も取って食べ、二本の水を飲み干したが、それでも十分ではないようで、川まで行って身を屈めて水を飲んだ。そのうちに身体が重くなった、と思った瞬間に川に落ちてしまい、流れが彼をさらっていった。

ジャンヌはピエール殿のことを思って悲嘆にくれ、ピエール殿の亡骸の側に四日間、ただ座っていた。無数の蠅が彼女の回りを飛び回るのを気にも留めずに。

四日目にひとりの老人が彼女の前に現れて尋ねた：

「あんたはここで何をしているんだい。

- 弟が殺した愛する人の亡骸を見守っているのです」。

老人は遺骸の四つの部分を集め、ピエール殿の手を取って言った：

「ピエール殿、起きなさい」。

ピエール殿は起き上がって、自分の顔を手で撫でてからジャンヌに尋ねた：

「誰が僕を目覚めさせてくれたんだい」。

ジャンヌは振りむいて老人を紹介しようとしたが、どこを探しても誰も見つからなかった。ピエール殿は尋ねた：「弟はどこにいる？」

— あの子はご飯を全部食べてしまって、水を飲みに行った時に川に落ちてしまったの」。

ピエール殿は川に飛び込んで水浴びをしてから服を着てジャンヌに言った：

「君の家族は金を儲けるのに急ぎ過ぎて、今やすべてを失ってしまった。命さえもね」。

ピエール殿はジャンヌを連れて村に行き、そこで結婚して死ぬ日まで幸せに暮らした。

2. 不幸と死

昔々、ミゼール^{「不幸」_の意}という名の男がいた。

ある日、ミゼールが家にいると、夜になろうとする時に、二人の老人がやって来た。彼らはミゼールに寝る場所を乞うた。翌朝になって彼らはミゼールに、宿る場所とおいしい食事に感謝した。その二人は神様と聖ペトロだった。神様はミゼールに言った：

「お前は私たちを歓待してくれたので、三つの願い事を叶えてあげよう」。

そこでミゼールは何を願おうか考え始めた。ミゼールは散々考えた。そしてようやく神様に言った：

「棒を一本下さい。それで泥棒たちを叩けるように。あいつらは私のリンゴを盗むのです」。

神様がミゼールに棒を与えると、聖ペトロがミゼールに尋ねた：

「富を願わないのか。馬鹿なことを言うんじゃない。

— 私は年寄りです。もうすぐ死ぬでしょう。富があっても何をするというのですか」。

神様がミゼールに願い事はあと二つ残っている、と言うと彼は言った：

「神様、私に椅子をひとつ下さい。家には椅子がひとつしかないのです、誰かが座るための椅子を。誰かがそのひとつの椅子に座ってしまうと、私とその誰かに立ってくれるよう頼まないといは彼らは立ってくれないのです」。

神様がミゼールに椅子を与えると、聖ペトロが言った：

「富を願いなさい、愚か者よ。

－ 先ほど、私はもうすぐ死んでしまう年寄りだと言ったでしょう。あなたは私に富で何をしろというのですか」。

神様がミゼールに言った：

「急ぎなさい、お前には求めるべき最後の願い事が残っている。

－ 神様、私を百年間生かして下さい」。

神様は彼に言った：

「お前に二百年与えよう。富を望まなかったからだ」。

神様と聖ペトロは天国に戻りミゼールは地上に留まった。

ある日、神様が書物を開くと、明日がちょうど二百年目でミゼールの命が尽きる日だった。神様はモール^{〔死〕}を呼んで言った：

「モールよ、地上に行ってミゼールを探しなさい。私のところまで連れて来なさい」。

モールは地上のミゼールのところに降りて言った：

「ミゼールよ、神様があなたを連れて来るよう私をここに遣わした」。

ミゼールはモールに椅子をすすめて言った：

「友よ、少しの間座ってくれたまえ。鞆を作るから」。

哀れなモールは座ったが、彼は何が起こるのかを知らなかった。ミゼールは長い棒を取って来てモールを叩き始めた。モールはとても怖くなって神様のところに急いで戻り、言った：

「神様、私にはミゼールはだめです。ご自分でミゼールを連れに行ってください。奴は私を殺そうとしています」。

ー 私はミゼールをすぐに見つけ出すようにとお前に言ったのだ」。

モールは仕方なくまた出かけた。彼は地上のミゼールのところに着いて言った：

「神様は私に、あなたを連れてくるよう再度遣わされた。

ー そうですか、スーツケースを準備するのではばらく座っていて下さい。

ー 座りませんよ。荷物の用意を急いで下さい。すぐに出られるように」。

ミゼールは椅子と棒を持った。彼が神様のところに昇ると神様が言った：

「ミゼールよ、お前の時は終わりを迎えたのだ」。

神様はミゼールに、モールについていくように命じた。モールとミゼールは小さな道を進み、大きな炎までやって来た。ルシファー【悪魔サタンの天使としての呼称】が大きな炎から出て来て言った：

「この火の中で座っているのに疲れたよ」。

ミゼールが言った：

「そうかい、疲れたのなら私の椅子に少し座ってもいいよ」。

ルシファーは飛びながら出て来て、ミゼールの椅子に座った。ミゼールは長い棒を持ってルシファーを叩き始めた。ルシファーはモールに叫んだ：

「ミゼールを連れていってくれ。こいつを私の地獄に置きたくなかない」。

モールはミゼールを連れて神様のところに戻った。神様はミゼールに言った：

「ミゼールよ、お前はまだここにいるのか。ルシファーがお前を地獄に居させたくないならば、私も天国に居て欲しくない」。

神様はモールに言った：

「モールよ、ミゼールを連れて、お前が地上で彼を見つけたところに連れ戻しなさい」。

そういうわけで、今日まで我々みんながミゼール（不幸）を至る所で見ることになってしまい、彼は我々を長い棒で叩き続けるのだ。

3. 不幸の男

昔々、ひとりの男がいた。彼には畑の石の数ほどたくさんの子供がいた。彼は終わりのない一日のように背丈があり、「洞窟のサラダ」〔軟白栽培されたチヨリ〕のような顔をしていた。子供たちみんなが彼にさらなる苦痛を与えていた。彼は食べ物を口に入れることさえ減多になく、力の限り働いているのに子供たちを養うことができなかった。それでみんなが彼のことを「不幸の男」と呼んでいた。

ある日、聖ジョルジュ〔聖ゲオルギオス。祝日は四月二十三日で主に農民の守護聖人〕の祝日の頃、風の吹くなか彼はエンドウ豆を庭に植えた。するとエンドウ豆は伸び始め、余りに速く伸びて天国まで届いた。不幸の男は妻に言った：

「おい、このエンドウ豆を登って天国に行って神様に会ってくる。子供たちを食べさせられないので助けてくれないか頼んでみるよ」。

不幸の男は出発し、枝から枝へと登って天国に着き、門の前まで行った。すると声が尋ねた：

「誰だい？」

— 聖ペトロ様、私は不幸の男です。私には畑の石ほど多くの子供がいます。一日中働いているのですが、彼らを養うことができません。

— お前は私に何をしてほしいのだ。ひとまず神様にお目通りさせてあげよう」。

聖ペトロは神様に言った：

「主よ、この者は不幸の男です。彼の子供たちを養うお助けを乞いにやって来ました。

— ほら、このテーブルを彼に与えよ。必要になったらこう唱えるだけだ『テーブルよ、テーブル。食べ物を出せ』。

不幸の男はそのテーブルを持って、礼儀正しくお礼を述べてから帰途についた。彼はテーブルを担いで豆の木を降りて行くことができなかったので、かなりの遠回りをして降りた。道中で力を相当使ったので彼はお腹が空いてしまった：

『これはテーブルを試すのにいい頃合いだな』。

彼はテーブルを木陰の草に覆われたきれいな場所に置いて唱えた：

「テーブルよ、テーブル。食べ物を出せ」。

すると何が起こったか？ テーブルの上はこんがり焼けたり燻されたりしたあらゆるもので埋め尽くされた。そこにあったのは、ローストした子豚、ガチョウの串焼き、羊や兎の煮込み。こんな豪華な晚餐なら不幸だなんて決して言えない。不幸の男は目の前で起こったことを信じられなかったが、自分の舌で信じることができた。彼は時間をかけてもぐもぐと食べた。食べながら彼は食べ物を飲物で流し込んだ。ボトルも十分にあったのだ。

彼は顎鬚をぬぐい、知っている食後の祈りを唱えてからテーブルを肩に担ぎ上げてまた歩き始めた。自分が戻った時に家族が喜ぶさまを思い浮かべながら、不幸の男は天使の一団に導かれているかのように、心軽やかに道を進めた。

ところが、天国まで登ってから下る道のりは長い。だからそのうちに夜になってしまった。不幸の男は遠くに一軒の家を見つけたが、その家の門の上には宿と書いてあった。その宿はよさそうに思えたので不幸の男は入った：

「寝る場所とこのテーブルを置く場所があるかい？」

－ ここはあなたにも、そのお持ちのテーブルにもいいところですよ。さあさあ入ってお座り下さい。

－ 言うておくけど私は食べるものはいらない。今まで食べたことがないほどの夕飯を食べたところだから。寝るためのベッドさえあればいい。

－ あなたにはいい部屋といいベッドがありますよ。そのテーブルは私らに預けて下されば、そこの隅にでも置いておきますから。

－ いいけど、絶対にそのテーブルに

『テーブルよ、テーブル。食べ物を出せ』

と言わないようにな。

－ ああ、あなた様がそんなことを気にかけておられるにしても、まったく心配ありませんよ」。

不幸の男は部屋まで上がり、あつという間に眠りについた。階下では彼の鐘のような鼾が聞こえた。宿の女中は好奇心にかられて主人のところに走り寄って言った：

「ご主人様、あの男が話していたテーブルに、言うてはいけないという言葉を試してみましょうよ」。

女中が「テーブルよ、テーブル。食べ物を出せ」と言い終わらないうちに、テーブルの上には王侯の食事と言えるようなあらゆる種類の料理が並んだ。宿の主人と女中は半

ルビー硬貨みたいに大きく眼を剥いた^{「恐らく五ルビー硬貨の間違い。半ルビー硬貨は存在せず、五ルビー硬貨は半径が三センチある」}。彼らは料理から立ち上る湯気で、餌をもらう猫がよだれを垂らすように、口中につばが湧いてきた。

宿の主人は言った：

「こんなテーブルがあればうちの宿にとっては大助かりだ。これはとんでもない天の恵みで、もう肉を買う必要もないし料理を作る必要もないぞ。そのテーブルに似たやつを探して来て隅に置いておくんだ。お前の姉さんでも知り合いでも誰のでもいいから。それと取り替えて、あの男には違うテーブルを渡すんだ」。

翌朝、不幸の男はうきうきしながら中庭に降りて来た。おまけに笑ってもいた。宿の主人が尋ねた：

「どうでした、よい夜を過ごせましたか？

－ 申し分なかったよ、あなたもよい夜を過ごせただろう。ところで私のテーブルはどこだい？

－ そこにありますよ。

－ ではさようなら」。

不幸の男は背中にテーブルを背負って自宅への道を歩き始めた。彼は遠くに妻の姿を見つけると、背筋を伸ばして大きく両腕を振った：

「よお、これでもう幸せになったぞ。子供たちみんなを養える。このテーブルを見てくれ」。

彼は子供たち全員を呼んでから唱えた：

「テーブルよ、テーブル。食べ物を出せ」。

ところが不幸の男が何回唱えても、テーブルの上には何も現れなかった。妻は言った：

「あんた、私をからかっているの？」

ー いや違う、泊まっていた宿の奴らがテーブルを取り替えたんだ。あいつらに『テーブルよ、テーブル。食べ物を出せ』と言わないように言っておいたんだけど。

ー おやおや、それでこうなったのね、哀れなあんた。あんたみたいな馬鹿を見たことがないわ。首を絞めたいほどだよ。それでどうするんだい？

ー また天国に行ってくるよ。神様が優しければ、俺に他の何かを下さるだろう」。

不幸の男はエンドウ豆の樹を通して天国に戻った。彼は聖ペトロが番をしている門に着いた：

「(コンコン)

ー 誰だい、またか。

ー 偉大なる聖ペトロ様、不幸の男です。また来ました。

ー お前はまた何か欲しいのか。神様はお前にあのテーブルをお与えになったではないか？

ー 聖ペトロ様、宿で盗まれました。私は彼らに『テーブルよ、テーブル。食べ物を出せ』と言わないように言ったのですが。それで彼らは間違いなくそう言って、それから私のテーブルを別のテーブルと取り替えたのです。

ー お前は私に、神様にまた取り次いでほしいのだな」。

聖ペトロは神様に言った：

「主よ、不幸の男がまたやって来ました。あのテーブルを盗まれたので、何か他のものが欲しいとか。

ー 他のものか、宜しい。このロバを与えよ。こう唱えればよい『ロバよ、ロバ。まき散らせ』と」。

不幸の男は神様にお礼を述べてからロバを連れて下った。途中で不幸の男は疲れてしまい、とある場所で立ち止まって唱えてみた：

「ロバよ、ロバ。まき散らせ」。

そう言った途端、ロバは尻尾をピンと立てて、金貨や銀貨をたくさん振りまいた。不幸の男は疲れなんか吹き飛んでしまい、全部かき集めてポケットを一杯にしてからまた道を進んだ。

ほどなく彼は前回泊まった宿に着いた。一晩泊まるしかなかったので中に入った：

「寝る部屋とこのロバを置く場所があるかい？」

- もちろんありますよ、さあ入ってお座り下さい。
- 今日はまだ食事をしていないんだ。

彼は食堂に案内されて食事が与えられた。ロバは馬小屋に連れて行かれた。宿に残しておくのは心配だったからだ。不幸の男は言った：

「絶対に

『ロバよ、ロバ。まき散らせ』

と言ってはだめだからな。

- ああ、心配には及びませんよ、お客さん」。

女中が蝋燭を持って不幸の男を部屋まで案内し、急いで降りて来た。彼女は降りてくるとすぐに主人に言った：

「ご主人様、あの言葉をこのロバに唱えるのを早く試してみなければ」。

主人はもちろん同意したので女中はすぐさま言った：

「ロバよ、ロバ。まき散らせ」。

ロバは尻尾を立て、金貨と銀貨が滝のように流れ落ちた。主人は星の中に埋もれているような気になった。彼は箒でロバの尻を拭いて一銭も残さずにすべて集めた。当然、女中と主人は例のテーブルの時のように、そのロバを他の似たようなロバに代えたが、それが余りにも似ていたので不幸の男が気づくのは到底無理だった。

翌朝、不幸の男はロバを連れて家に戻った。彼は妻と子供たち全員に叫んだ：

「おい、おい。今度こそ俺たちと子供たちにもう怖いもんなんかないぞ。神様が俺にこのロバを下さった。とっとと箒を持ってきてロバの足の間を掃くんだ。何が落ちてくるのかはお楽しみだぞ」。

妻が門の裏から箒を掴んでくると夫は唱えた：

「ロバよ、ロバ。まき散らせ」。

ところがその時ロバは尻尾を立てず、金貨も銀貨も放らず、同じ所に落ちたのはまったく別のものだった。不幸の男はロバの前で立ち尽くし、両腕は絶望の余り垂れていた：「俺は宿で寝る必要があったのだ。絶対に奴らが俺のロバを盗んで他のロバに代えたのに違いない。『ロバよ、ロバ。まき散らせ』と言ってはだめだと言っておいたのに。

－ 生きている者みんなの命にかけて、哀れなお前さん、一体どうしたらそんな馬鹿なことができるんだい？ 意味がわからないよ。

－ ちょっと待ってくれ、お前。神様はお優しい方だからきっと別のものを与えて下さるよ」。

不幸の男はエンドウ豆の樹に戻り、また枝から枝へと登り天国に着いた：

「(コンコン) 不幸の男です。

－ お前はまだ何か欲しいのか？ テーブルをもらったし、ロバも与えたではないか、それでお前は...

－ 聖ペトロ様、奴らは私のテーブルを盗んだ時のようにロバも盗んだのです。私が彼らにこう言ってはいけないと...」。

聖ペトロは最後まで聞かなかった。彼は神様のところに行った：

「主よ、あの男に何を与えましょうか？ とんでもない愚か者ですが、畑の石のように多くの子供がいます。

－ この棒を与えなさい。こう唱えればよい『棒よ、棒。荒びよ』。

不幸の男は聖ペトロに礼を述べ、棒を肩に担いで出発した。夜になって、彼は一泊する宿の近くに着いた：

「俺とこの棒のために場所はあるかい？

－ はいはい、入ってお坐りなさい、お客さん」。

宿の者たちは彼を坐らせ、食事を出し、棒は隅に置いた。

「ところでいいかい、この棒に

『棒よ、棒。荒びよ』

とは言わないでくれよ。

－ それはもう、お客さん、心配しないで下さい」。

この時、女中は興奮の余り不幸の男を部屋まで案内できなかったので、宿の主人が代わりに階上まで案内せざるを得なかった。女中は待ちかねてじりじりしていた。炭火で

焼かれている鳥のように小躍りまでしていた。彼女は主人が降りて来るのを待てずに、隅に置いてあった棒の方に向かって行き唱えた：

「棒よ、棒。荒びよ」。

舞踏会が始まり、それは見ものだった。棒は起き上がって突然まっすぐに立ち、女中の方に飛んで行き着地した：「ゴンッ」。

棒は雨が落ちるような速さで女中を叩き始めた。もし女中にできたならば、彼女は棒の攻撃から隠れるために地面の下に潜り込んだに違いない。

そこに突然宿の主人も姿を見せたが、彼もまた報いを受けることになった。彼はこちらに飛び、あちらに飛び、後ろに飛び、テーブルや腰掛けの上や下を逃げようとしたが、棒は彼が行くところについて回った。棒は彼の背中や腹、頭と至るところを叩いた。その騒ぎたるや凄まじく、棒と宿の主人が立てる物音は余りに騒々しかったので、寝ていた不幸の男を起こすほどだった。

「あんたの棒を止めてくれ。私らを叩くのをやめさせてくれ、悪かった。もう盗まないから。そいつを止めてくれ、お願いだ。あんたにテーブルとロバを返すから。そう、旦那さん、許してくれ、許してくれ、もうやらないから、お許しを」。

不幸の男は棒とテーブルとロバを取り戻して家路についた。彼は大勢の子供たちを養うことができ、彼らが独り立ちするまで必要とするものすべてを与えた。

彼が死んだ時、神様は彼を連れにやって来られ、テーブルとロバと棒と共に天国に連れて行かれた。彼は自分の古女房も一緒に連れて行ってほしいと頼んだので、神様は妻も連れて行かれた。彼らは、ラジオ・セーシェルでこの番組を聴くことができるすべての人たちと一緒に、この物語を聴いていることだろう。

4. サンドリヨン（シンデレラ）

昔々、男がいて彼の妻が亡くなり、彼女に似た優しく美しい娘を残した。

時が過ぎてこの男は再婚した。後妻はこの世に存在したどんな女よりも性悪の女だった。彼女は結婚した時、既に二人の娘がいたが、その二人もまたひどく傲慢でひどく意地悪だった。男と結婚した当初、この性悪女は夫に善良だと信じ込ませ、彼の娘も優しく扱った。その娘はサンドリヨン（灰かぶり）という名前だった。

ある日のこと、サンドリヨンのパパが仕事で遠くに出かけることになり、彼が出発した途端、妻と二人の意地悪な娘たちはサンドリヨンに悪辣さを見せ始めた。彼女らはサンドリヨンにあらゆる汚れ仕事を押しつけ、彼女は毎日叩かれた：

「洗濯の時間だよ。

－ 早くやりな、怠け者なんだから。ほらドレスを用意してちょうだい。

－ 今度は台所を磨いて鍋を洗って庭を掃くんだよ。

－ ぐうたらな老いぼれ猫みたいにいつまで座っているんだい、川に水を汲みに行ってきたな。

－ お前は本当に何もしないね、食器を早く洗って食事を作るんだよ」。

夜になるとサンドリヨンは、ゴミ捨て場の横の倉庫で妻らの中に寝かされた。二人の娘たちは羽毛のベッドで寝て、綺麗な鏡台に映る自分たちに見とれていた。彼女たち

は自分たちを美人だと思っていた。意地悪な二人の娘たちは綺麗な服も持っていて、いつもそれを着ていた。

ある日、サンドリヨンの家から程遠くない宮殿に住んでいた王子が、舞踏会を二日間開くことを決めた。舞踏会の前日にサンドリヨンは一日中、洗濯と縫物をして、二人の性悪な娘の髪に飾りと宝石をつけ、彼女たちをありとあらゆる方法で世話をして、舞踏会に行く準備ができるよう整えた。サンドリヨンは悲し気に言った：

「私も舞踏会に行きたい」。

ママと二人の性悪娘は笑った：

「ハハハ、お前は下の台所に行きな、サンドリヨン」。

そして継母は彼女を残して門を閉め、二人の娘と馬車に乗り込んだ。

サンドリヨンはひとりになり、火のそばに坐って両の目に涙を流しながら悲しい歌を歌った：

♪ 姉妹たちは舞踏会に行った

サテンと絹のドレスを着て

私は汚れた服とエプロンを着て

ひとりきりで火のそばにいる

炎が上がって落ちる

影が壁で踊っている

煙が渦を巻いてワルツを踊っている

でも私は舞踏会に行けない ♪

突然、サンドリヨン^は羽音と鈴に似た奇妙な音を聞いて、自分の前に後見役^[marraine は通常は洗礼の際の代母を意味するが、ここでは社交界にデビューさせる後見役の意]の妖精が立っているのを見た。妖精は言った：

「舞踏会に行きたいかい、お嬢さん。じゃあ私の言う通りにしなさい。庭でカボチャを探してきて、門の端にそれを置いて切りなさい」。

サンドリヨンは後見役が言った通りにした。

「いい子ね。次に、ネズミ捕りにネズミが一匹、六匹の小さなハツカネズミが罠にかかっている、桶の後ろにはトカゲが六匹いる。急いで行って彼らを抑えてカボチャの中に入れなさい」。

再びサンドリヨンは後見役が言った通りにした。そして後見役が魔法の杖でそれらに触れると、一台の馬車と御者、六頭の馬と六人の騎士に変わった。妖精はサンドリヨンに言った：

「馬車がお前を舞踏会に連れて行ってくれる。ただしお前は深夜十二時丁度に戻らなければいけないよ」。

彼女が魔法の杖でサンドリヨンに触れると、サンドリヨンの古い服は綺麗な絹のドレスに変わり、頭には冠が載り、足には小さなガラスのスリッパを履いていた。サンドリヨンは馬車に飛び乗り、御者は鞭を鳴らし、馬は馬車を牽いで動き出した。

宮殿に着いた時サンドリヨンは外に飛び出して大理石の外付き階段を駆け上がり宮殿の中に入った。彼女の美しさに全員が踊りをやめて見入った。王子は彼女を見ると手を取ってサロンの中央に誘った。彼がサンドリヨンにかけた

言葉は彼女の耳にはまるで音楽のように聞こえ、王子は踊りながら歌った。

王子はサンドリヨンに言った：

「君は舞踏会で一番美しい。僕は今晚ずっと君と踊るよ。君が一番美しいお嬢さんだからね」。

時間は過ぎてゆき、彼らは一緒に踊り続けた。しかし十二時前にサンドリヨンは抜け出して家に帰った。そして十二時の鐘が鳴った瞬間に、彼女の綺麗なドレスは以前のボロ服に戻った。

翌日、サンドリヨンの二人の性悪姉妹は彼女に、また舞踏会に行けるようにもっと優雅な装いにするよう命じた。サンドリヨンが姉妹の髪をくしけずっている間、彼女たちは前夜の舞踏会について話し始めた。ひとりが言った：

「あんたも昨晚の舞踏会にいらした美しい王女様を見るべきだったわ。王子様は夜の間ずっとあの方と踊っていたわ。— そうよ、あの方は舞踏会にいた私たちの誰よりも素敵なお召し物でお綺麗だったわ。サンドリヨンが私たちをそれほど綺麗にはしなかったからね。

— 私一生懸命やってみます。ただそのお美しい方を見ることができればですが。

— あんた何て厚かましいの。そんなこと今まで聞いたことないわ。台所に戻るんだよ」。

継母と性悪姉妹は馬車に乗って舞踏会に行った。サンドリヨンは火の横にひとりでした。サンドリヨンはひとりごとを言った：

「王子様にもう一度会うことができれば。私の後見役がもう一度私を助けに来てくれたら」。

彼女がそう言った時、羽音と鈴の音が聞こえ、目の前に後見役の妖精がいた。妖精が魔法の杖を立てると馬車がサンドリヨンの前に現れた。妖精が魔法の杖をもう一度立ててサンドリヨンに触れると、サンドリヨンの服は宝石を散りばめた夜会服に変わった。サンドリヨンの頭にはダイヤモンドの冠が載り、足はガラスのスリッパを履いていた。サンドリヨンの後見役は笑いながら言った：

「急いで行きなさい。でも真夜中には戻ること」。

馬車はサンドリヨンを乗せて出発した。サンドリヨンは宮殿に着いた。彼女は大理石の外付き階段を登り、望んでいたように王子の両腕の中に飛び込んだ。サンドリヨンは望んでいたようにずっと王子と踊った。サンドリヨンは幸せの余り時間が経つのを忘れ、真夜中の鐘が鳴った時に彼女は飛び上がった：

「ああ」。

彼女は王子から我が身を引き離し、外付き階段をできる限り急いで下った。サンドリヨンは余りに急いでいたので、小さなスリッパの片方が脱げて、外付き階段の上に落ちてしまった。それを拾うために止まることはできなかった。ちょうど真夜中を知らせる鐘が鳴り終わる頃、サンドリヨンは宮殿の柵の外で古い服を着てひとりであった。彼女は家にゆっくりと帰った。もう二度とあの幸せが巡ってはこないと思いつつながら。

ところがその翌日、王子はラッパを持った使者を町中に遣わし、使者はラッパを吹き鳴らしてから叫んだ：

「ガラスのスリッパを片方失くした者はいないか。王子様はその持ち主と結婚される」。

スリッパはピロードの盆に載せて運ばれていた。もちろんすべての娘たちがそのスリッパに自分たちの足を入れようとしたが、彼女たちの足は大き過ぎた。

使者は王宮の貴族と共に書状を携えて、ついにサンドリヨンの家までやって来た。性悪娘たちがそれぞれスリッパを試すことになった。彼女たちは足を押しつぶして小さくしようとした。彼女たちは散々試したがスリッパは二人の足には入らなかった。サンドリヨンはそれを見て言った：

「私も試していいですか？」。

意地悪な妻は叫んだ：

「どうしてそんな厚かましいことができるの？」。

彼女は二人の男に言った：

「この子は料理女ですよ」。

そして怒りながらサンドリヨンを見て言った：

「お前は何て嫉が悪いんだ。とっととお行き」。

使者はスリッパを持って言った：

「お待ちなさい、奥さん。王子様はすべての者がこのスリッパを試さなければならないと言われました」。

そこでサンドリヨンがスリッパを手に取り、足を入れるとびったりと収まった。

二人の性悪娘と母親は驚いて、何も言うことができなかった。彼女たちは開いた口に手を当ててお互いを見るばかり



りだった。サンドリヨンがエプロンのポケットに手を入れてもう片方のスリッパをひっぱり出し、前にも履いたことがあるように、もう片方の足に履いた時、彼女たちは驚きで死にそうだった。

突然、サンドリヨンの後見役の妖精が現れた。彼女が魔法の杖を立てると、瞬きする間にサンドリヨンは舞踏会に行った時の二着のドレスよりもさらに綺麗なドレスを身にまとった。

もちろん彼女は王子と結婚し、そのあと幸せに過ごした。二人の性悪娘とその母親は一体どうなったかというところ... サンドリヨンは結婚する日でさえも彼女たちに優しく接してやったので彼女たちは行いを改め、サンドリヨンと分かり合えるようになった。

5. 自分の血と結婚した王子

昔々、ひとりの王子がいて、大きな城に父親と使用人と一緒に住んでいた。その若者は二十一歳だった。

ある日、パパが言った：

「息子よ、そろそろ結婚する時期だ。お前が気に入って結婚したいような娘を見つけるのだ。

－ 今まで結婚したいと思った娘はいません。食糧を積んだ船を一隻下さい。それで世界中を回り、結婚したいような娘がいるかどうか、もう一度探してきます。

－ それでは一年と一日後に戻りなさい。」

パパは船を彼に与えた。王子は船に乗り込んで出発した。

一年と一日後に王子は戻ってきたが、娘は連れてこなかった。彼は独りで戻ったのだ。彼はパパに言った：

「結婚したいほど気に入った娘はいませんでした。だから私は、自分の純粋な血と結婚することにしました。

－ でもどうやってお前の血と結婚するのだ。そもそも血と結婚することなどできるのか。わしはお前の言いたいことがわからん。

－ 私は自分の純血と結婚するのです。」

王子は自分の家を作って綺麗な部屋を設え、ある日自分の従僕に言った：

「剣を持ってきて私を半分に分けてくれ。切った半分を壺に入れ、もう片方は別の壺に入れなさい。しかし私の血を一滴たりとも地面に落とさないように。二つの壺はしっかりと封をするように。一年と一日後にそれを開けなさい。

よく覚えておくように、きっかり一年と一日後だ」。

従僕は苦しんだ。彼は王子を殺したくなかったのだ。彼は王にそのことを話しに行った。王も大変苦しんだが息子がそれを望んだのだった。

翌日になると王は盛大な宴を設け、すべての者に起こることを見るために来させた。王は宴のあとに息子に別れを告げ、従僕には頼まれた通りに王子を二つに切り、そのあとも言われた通りにするよう命じた。従僕は王子を二つに切ってそれぞれを壺の中に入れた。

一年と一日が過ぎ、従僕はひとつ目の壺を開けに行った。中に入っていた王女が出て来た。二つ目の壺を開けると王子が出て来た。それはまさに切られた王子その人だった。従僕は王に知らせに行った。王は死んだとばかり思っ、長い間見ることのなかった息子に再び会えた喜びで狂わんばかりだった。王子はその王女と結婚した。

ところが従僕が王子を切った際、一滴の血が地面に落ちていたのだった。その一滴の血は一年と一日の間に小さな小さな蛇になった。ある日、王女がたまたまその蛇を見かけて拾い上げた。その小さな蛇は男前の王子に変身した。王女は自分の夫よりもその王子の方を気に入った。

王女と結婚した王子の方は毎日森に狩りに出かけた。彼が出かけるたびに蛇は王子に成りすまし、王子が戻った時には蛇の姿に戻った。毎日がそのように過ぎていったが、本物の王子は蛇のことについてまったく知らなかった。

ある日、王女が夫に言った：

「大きな籠を作って下さい。汚れものを入れるためです」。

王子は大きな籠を作らせて妻に与えた。王女はその籠を自分の部屋に置き、中に蛇を入れて上から洗濯物を被せた。夫が狩りに出かけている時、蛇は王子に成りすました。

ある日、蛇が王女に言った：

「僕はもう蛇のままでは嫌だ。君と二人で一緒に暮らすために人間の姿になりたい。君の夫を殺す必要がある。— どうやればいいのかわかる？ 夫は毎日川に水浴びに行くから彼を見張っていて。樹の上に登るのがいいわ。彼が水を浴びるために池に入った時に、樹から降りてきて刺せばいいのよ」。

夜になって王子が水浴びに行く時、彼は剣を帯びて行った。彼は夜に外出する時にはいつも剣を携えていたからだ。彼の妻が言った：

「どうして剣を持っていくのですか？ そんなものは置いて行けばいいのに。

— どこへ行こうと剣は持っていかなければいけない」。

こうして王子は剣を携えて行った。

彼が水を浴びるために川に降りた時、蛇も降りてきて彼を刺そうとした。しかし彼は剣を取って蛇を三つに切った。三つの部分は川岸の岩穴に落ち、彼はその場から去った。

王子は妻のもとに戻ると言った：

「今日は危うく死ぬところだった。君は剣を持っていかないように言ったが、水に入ろうとしたその時に、蛇が出てきて僕を刺そうとしたんだ。僕は剣を取ってそいつを三つに切ってやった」。

王女が涙を流したので王子は言った：

「泣くことはない、だって僕は死ななかつたんだから」。

王女が泣いたのは夫のためではなく、彼女は蛇のために泣いたのだった。

翌日、王子が狩りに出かけると、王女は従僕と小間使いを引き連れて三つに切られた蛇を探しに行った。彼らは探しに探したが見つからなかった。王女は最後には怒ってしまった。二日目も彼らは探したが見つからなかった。そして三日目に蛇の三つの部分を見つけることができたが、既に腐り始めていた。

王女は蛇の頭を杯の形に、胴体をスプーンの形に、尻尾を枕の形にした。彼女は言った：

「私が蛇でこれを作ったのは夫に思い知らせるためよ」。

夜になると彼女は夫に言った：

「私はあなたが殺した蛇を見つけて、それで三つのものを作りました。三日以内にそれが何かを私に言わなければ、あなたの首を刎ねます」。

夫はそれを軽く受け流すことができなかった。

翌日、彼は森に狩りに出かけた。何も獲れなかった。彼は家から持って来た雑誌の束を持って樹に腰かけて読みだした。すると彼は二羽のツバメを見た。一羽は北に、もう一羽は南にいた。彼が眺めていると鳥たちはシナモン^{シナモンはセイシエル}の枝に止まった。一羽が言った：

「こんにちは、相棒。

- よう、相棒。何か報せはあるかい？
- いや特にない。哀れな青年が座っているのを見かけたが、三日以内に自分の血を見つけないと命を失うんだとき」。

二羽のツバメは去った。青年は二羽のツバメが言ったことについて考えを巡らせた。

翌日、彼はまた同じ時刻にその森に行った。また二匹のツバメが同じ場所に止まっていた。彼らは話していた：

「こんにちは、相棒。

— よう、相棒。何か報せはあるかい？

— いや特にない。哀れな青年が悲しそうに座っているのを見かけたが、二日以内に自分の血を見つけないと命を失うんだとき」。

彼は家に戻った。帰りつくと妻が言った：

「わかっているでしょう。明日が最後の日です。私に蛇が三つの何になったのかを言わなくてはならないのよ」。

翌日夫が起きると妻が言った：

「今日、あなたが私に答えないと死ぬことになります。

— 三時になったら君に言うよ」。

王子は森に出かけたが、狩りをする気にはなれなかった。昨日二羽のツバメを見たのと同じ場所に腰を下ろした。同じ時刻に二羽のツバメがやってきた。彼らは話し始めた：

「こんにちは、相棒。

— よう、相棒。何か報せはあるかい？

— 哀れな青年が悲しそうに座っているのを見かけたが、今日中に自分の血を見つけないと命を失うんだとき。

— 杯の意味は《飲む愛》、匙の意味は《食べる愛》、そして枕の意味は《眠る愛》だ」。

そして二羽のツバメは去った。

王子はすべての答えを頭に入れた。彼が家に戻ると通れる場所がまったくなかった。多くの人がいて、足の踏み場もなかったからだ。王女が彼らを呼び寄せたのだった。

時が来て妻が言った：

「水浴びに行きなさい。そのあとで私に三つの答えを言いなさい」。

王子は水を浴びに行った。水浴びを終えて彼は戻って来た。王女は言った：

「さあ、私に答えを言いなさい。

ー 君は蛇の三つの部分で杯と匙と枕を作った。杯は《飲む愛》を意味し、匙は《食べる愛》を意味するのだ」。

王女は驚いて動けなかった。王子は続けた：

「そして枕は《眠る愛》を意味する」。

王子はそう言い終えると、我慢することができずに妻を殺した。

彼はそのあと再び結婚することはなかった。自分の血に裏切られたのだから。

6. 不愉快な鏡

十年ほど前の話であるが、マヘ島のみんなが知っているヴィクトリア^[セーシェルの首都]と呼ばれる町の近くに村があった。その住人は町までやって来たことがなかった。その村にはひとりの漁師が住んでいて、家族と年老いたパパと一緒に暮らしていた。

ある日、その男はちょっと町まで出かけることにした。出かける時に彼の妻がお金を渡して言った：

「あんた、町に行ったら私に綺麗なドレスと綺麗な靴と綺麗な帽子を買って来てちょうだい」。

彼の娘のひとは緑のハンドバッグ、他の娘は赤いハンドバッグ、さらにもうひとりの娘は青いハンドバッグに綺麗な靴に指輪等々を頼んだ：

「パパ、私たちが頼んだものを買うのを忘れないでね。

－ わかったよ、子供たち」。

妻も彼に言った：

「私へのお土産も忘れないでよ。

－ わかった、お前へのお土産もな」。

男は歩いて町まで降りて行った。哀れな男は町を見たことがなく、人々がやっているすべてのことを観察しながら、あちらこちらを行ったり来たりした。住人たちは微笑を浮かべていたが、それは彼が今まで町を見たことがないとわかったからだ。二人の子供が肉にたかる蠅のように彼のあとをずっとついて来た。それでもそのあとで、男は家族が入り用のものを買うことができた。

しばらく経ってから彼はある店に入り、壁にかかっている丸いものを見つけた。彼はその中で男が自分を眺めているのを見た。彼は口を開けて壁を見つめた。店の主人がやって来て彼に言った：

「壁にかかっているものをお気に召しましたか？ こいつは魔法みたいなものです。お客さん、こっちに来なさい。中に何が見えますか？

- 男がひとり見える。
- 知り合いですか？
- 知っている誰かに似ているようだ。僕の前に立っているけど、やはり見たことはないかな。頭に帽子を被っている。あれ、帽子に触っているぞ。何だか奇妙だな。これ売ってくれるかい？
- もちろんです。三十ルピーです^[セーシェルのルビーは二〇二三年十一月現在約十一円である]。
- ちょっと高いけれど買うよ。
- ではお客さん、紙の箱に入れて差し上げましょう」。

暗くなったので男は家路についた。家に着くと彼は銘々にお土産を渡し、自分用に買った紙箱をテーブルの上に置いた。後ろでは女たちが自分たちへのお土産を見ていた：

「ああ、これ綺麗だわ。

- これ私のね。
- 誰か靴を履くのに手を貸して」。

そして、皆さんが予想している騒ぎを引き起こす箱の番が来た。女たちが自分たちへのお土産に飽きてしまうとママが言った：

「パパへのお土産を見たいわ」。

彼女が箱を開けると、太い女が自分を眺めていた：
「ああ、何てこと。子供たち、こっちに来てこれを見なさい。パパは町に行って他の女をここに連れて来たのよ。太った性悪女を私の代わりに」。

長女が言った：

「ママ、私が見てみるわ」。

彼女が箱の中を見るとそれは太った女ではなく、若いけれど意地悪そうな女だった。残りの娘たちもそれぞれ見たが、その都度パパが連れて来た違う女が見えた。

爺さんがやって来て尋ねた：

「一体あいつは誰を連れて来たんじゃ」。

爺さんは年老いた男を見た：

「ああ、お前たちの父親はわしに愛想を尽かして、他の老人を探してきて面倒を見るのじゃろう。老人二人を養うのは大変だ。みんな貧乏になって死んでしまうだろう」。

みんなが泣き始めた。男が戻って来ると妻は彼に飛びかかった：

「あんたは町に行って他の女を買って来たのね、私と子供たちを捨てるつもりなんでしょう。裁判所に行って、事情を話してあんたを罰してもらおうわ」。

妻は夫の髪を掴んで裁判所まで引きずって行った。法廷で彼女は夫の顔の上に座り、子供たちは父親のお腹の上で泣いていた。

「判事さん、夫は町に行って他の女を買い、私と子供たちを捨てようとしています（泣）。

— 静粛に。その「他の女」とやらはどこにおるのかね？

－ 判事さん、箱の中を見て下さい。

判事は箱の中を覗いて言った：

「女なんか見えやせん。見えるのは別の裁判官だ」。

爺さんが尋ねた：

「それなら、老人は見えませんか？

－ いや、見えるのは法服を来た裁判官だ。私が被っているのに似た帽子を被っておる。こんなことはあり得ない。真剣に罰するべきだ。村に裁判官が二人おるなどあってはならん。私が糊口をしのいでいる状況で、村に二人も裁判官がいたら私は飯の食い上げだ（泣）」。

みんなが泣いている時、ピクニックに来ていた少年がこの騒ぎを聞きつけて、何が起きているのかを見に来た。彼は一体どうなっているのかを尋ねた。裁判官が言った：

「この箱の中を見れば、あの男が私の代わりに連れて来た新しい裁判官が見えるだろう。

－ 裁判官なんて見えませんよ。

－ それでは何が見える？

－ 僕が見えます。

－ お前自身が見える？ では太った女も老人も見えないのか？

－ 見えませんよ。僕が僕を見るのはおかしいことじゃありません。これは鏡です。か・が・み。そう、鏡です。あなたがその中を覗いたらあなた自身が見えるのです」。

7. 悪妻

昔々、悪妻がいた。彼女はみんなと揉め事を起こしていた。夫が「おい、起きて朝食を作ってくれ」と頼むと、彼女はベッドに三日いた。夫が「おい、早く寝ろ」と言うと、彼女は一晩中立っていた。

ある日、夫が言った：

「クレープが食べたいので少し作ってくれないかい？

－ 馬鹿言うんじゃないよ。あんたにクレープなんか勿体ないよ。

－ そうか、僕にクレープなんか勿体ないと言うのなら、作らなくてもいい」。

ところがしばらくして妻は台所に行って、大量のクレープを作り始めた。そのあとで彼女は夫にそれを全部食べさせたので、夫は胃がもたれてしまった。

哀れな夫は悪妻との諍いに嫌気がさしていたがある日、森にイチゴを探しに出かけた。彼は森の奥深くに着いて樹の下に座った。彼が回りを見ていると穴がひとつあった。彼はその穴の方に行って中を覗くと、穴は底無しだった。そこで彼は思った：

『妻にはもううんざりだ。あいつがこの穴に落ちたらさぞ愉快だろう』。

そこで彼は家に戻って妻に言った：

「おい、イチゴを探しに森に行くことはないからな」。

妻がすぐ森まで行こうとしたので夫はさらに叫んだ：

「森まで行ったら、森の奥にある大きな樹の下に座る必要はないからな。

－ 私は森に行って奥にある大きな樹の下に座るからね。

－ いいか、行きたきゃ行けばいいが、端に見える大きな穴を覗くんじゃないぞ。

－ 森に行ってその穴を見てやるわ」。

妻が出かけると夫はその跡をつけた。妻は森の奥にある穴の縁に近寄った。夫は後ろから近づいて妻を穴に突き落とした。妻は底無し穴に落ちてしまい、男は家に戻った。

妻がいなくなって三日経った。四日目に彼は長い縄を持って森に戻り、穴のところまで行って中を覗いた。彼は縄の片方の端を樹に結びつけてから、もう一方の端を穴に投げ込んだ。二、三分してから彼は縄を引き上げた。彼は縄の端に悪魔が掴まっているのを見て驚いた。

哀れな男は怖くなって震え出した。彼が悪魔を穴に突き落とそうとした時、悪魔が言った：

「兄さん、俺はこの穴から出られて本当に嬉しいよ。悪い女がやって来てから余りにも気分が悪いので、俺は地上に留まろうと思って来たんだよ。ところで、俺と一緒に大儲けしないかい。ありとあらゆる町や村に行き、すべての女を苦しめて重い病気にしてやるんだ。そのあとにお前が来て煎じ薬を売り歩いてみんな治るという寸法さ」。

悪魔が先に出発し、すべての女が老若を問わず病気になった。そのあとで男がやって来て、煎じ薬がすべての女を治した。当然、人々はその煎じ薬を得るために大金を払い、男はあっという間にひと財産を儲けた。

ある日、悪魔が男に言った：

「さてと、今度は王の娘を苦しめてやろう。娘が病気になる。とても重い病気だ。でも治してはだめだぞ」。

王の娘が病気になった。王は今まで女たちをすべて治した男を呼ぶために人を遣わし、彼がやって来ると言った：「娘を死なないように治してくれ」。

悪魔もまた男に言った：

「絶対に治してはだめだぞ」。

男はとても困ってしまった。彼は長い間考えた挙句、王の召使たちに会いに行き、彼らを集めて言った：「通りに行って、できるだけ大きな声でこう叫んでくれ。『悪妻が来た、悪妻が来た』と」。

そのあとで男が王宮に行くと思魔が彼に言った：

- 「情けない奴だな。ここに来て何をする気だ？」
- 可哀想な悪魔、うちの悪妻がやって来るんだ。
 - そんなことあり得ないだろう！」。

その時、王の召使たちが外で叫んだ：

「悪妻が来たぞ！」。

悪魔が言った：

「おいおい、俺はあの悪妻が怖い。どこに隠れたらいいか言ってくれ。

- あの穴に戻るしかないだろうな。うちの悪妻は多分もう穴には戻らないからね」。

悪魔は一目散に穴に戻った。彼は底に落ちた時、男の妻が相変わらずそこで歌っているのを見た。男は王の娘を治し、その労に対して多くの褒美をもらった。

8. ジャンヌと地獄の薔薇

昔々、ひとりの男がいた。彼には三人の娘がいた。彼はひどく貧しいという訳ではなく、三人の娘を養うことができた。彼が町に行く度に娘たちが言った：

「パパ、私たちにお土産をお願いね」。

長女が言った：

「私には綺麗なドレス」。

次女が言った：

「私にはクレオルの帽子」。

ところが末娘はいつも珍しいものをパパにねだっていて、その日はこう言った：

「パパ、私には《時間の色をした》ドレスをお願い」。

パパはしばし考えたが何も言わなかった。

夜になって彼は町に着いた。長女のためのドレスを見つけるのにそんなに時間はかからなかった。彼は次女が頼んだ帽子を探して難なくそれを手に入れた。さて彼は、末娘のために《時間の色をした》ドレスを探しに歩き始めた。可哀想な父親はそのドレスを手に入れるのにあちらこちら歩き回った。

町のはずれに、ありとあらゆる古道具を扱う店があった。父親はその店に入ることにした。彼は店の主人に尋ねた：

「この店に《時間の色をした》生地はありますか。私の娘のひとりがそういうドレスを欲しがっているのです」。

主人は店の中をあちらこちら探し、多くの古い箱を引っ張り出した。もうかなり遅い時間になっていた。娘たちは

父親に期待していた。ママは心配していた。彼女らはみんな赤い目をして座っていた。

町では父親が《時間の色をした》ドレスを探していた。店の主人はさんざん探した挙句、ほこりで汚れた古い生地を取り出して勘定台にそれを置いた。父親は小躍りして言った：

「これこそが、娘が私に見つけてくれと頼んだものだ」。彼はそれを三オーヌ^[布地を量る昔の単位。]買った。父親は大層満足し、店を出て家路に着いた。

家に戻ると娘たちが彼を取り囲み、首に抱きついた：「パパのことをみんなで心配していたのよ。遅くなっても帰ってこなかったし」。

パパは座ってから、みんなにそれぞれのお土産を渡して言った：

「子供たち、お前たちのおかげでおかしくなりそうだった。綺麗なドレスも、クレオルの帽子も、探したらすぐに手に入ったけれど、《時間の色をした》ドレスというのを探すのに時間がかかったよ。町にはまったくなかったので、相当歩いて見つけた古道具屋で三オーヌの生地を買って来た」。

長女と次女が言った：

「パパ、ジャンヌったらパパの足の先から頭のとっぺんまで苦勞をかけるんだから。あの子は簡単に見つかるものなんか決して頼まないし。どんなに大変だったかしら」。

また別の日にパパが言った：

「子供たち、町に行ってくる。何が欲しい？」。

長女が言った：

「パパ、私にはエナメルの靴をお願いね」。

次女が言った：

「私は、綺麗な買い物かごが欲しいわ」。

末娘はパパを見て何も言わなかった。パパが言った：

「ジャンヌ、お前は私に何も頼まないのかい？

— 私はね、パパ、地獄色のバラを探して来て」。

次女が飛び上がって言った：

「あんたはいつも変なものを頼んで、パパに迷惑をかけるのね。パパが地獄色のバラなんかを手に入れられるとでも思っているの？」。

パパはジャンヌを見るだけだった。

とにかく哀れな父親は町に降りて行き、長女のためにエナメルの靴を探して手に入れ、次女のために買い物かごを探して手に入れ、今度は地獄色のバラである。彼は座って考え込んだ。彼はどうやってそのバラを手に入れるか思案した：

『取り敢えず森に行くしかないだろう。運がよければ代わりに野生のバラに出くわすかも知れない。それで娘の望みを叶えることができるだろう』。

父親は歩き出した。彼が森に着いた時、何かの香り、奇妙な香りを感じた。彼は思った：

『多分森に咲いている野生の花の香りだろう』。

彼が進めば進むほど、その香りは強くなってきた。彼が頭を上げると目の前に道があったので進んだ。二歩もいかないうちに彼の前に庭園が現れた。その庭園は花で溢れて

いた。みんなに知られているありとあらゆる花がこの庭園に咲いていた。男は思った：

『よし、とにかく地獄色のバラを手に入れなくては』。

彼は探し始めた。しかし探すにはもう遅い時間だった。

その頃彼の家では、上のふたりの娘が末娘のジャンヌをいじめていた。森の中では彼女たちのパパが相変わらず探していた。探せば探すほど、歩けば歩くほど、彼の前に多くの花が現れた。

彼はふと顔を上げた。花の香りにうんざりしていた彼は前方に小さな家を見つけた。彼はその家の方に向かった。彼は喉が渴いてお腹が空いていた。家のそばに着いて彼は声をかけたが誰も応えなかった。彼が家の回りを見ていると、ついにそのバラを見つけた。彼は思った：

『うん、先ほどまで嗅いでいたのと同じ香りだ』。

彼はそのバラをじっと見つめてからゆっくりと近づくと、バラの木の横に小さな獣がいた。その獣が彼に言った：

「だめだ、俺のバラを摘むな」。

哀れな男は何も言えず、恐怖に捉われてがたがた震えていた。しかし勇気を振り絞ってその獣に言った：

「そのバラは私のために取るんじゃない。大事にしている娘のひとりが私にそれを探すように頼んだのだ。それで私はこうして君の家までやって来た。摘んでもいいかだめか言ってくれ。

— ああ、いいよ。悪いようにはしない。その代わりに、お前の娘と結婚させてくれ」。

男は少し考えてからこのチャンスを逃すまいと言った：

「わかった。では娘を君と結婚させよう」。

獣は馬鹿ではなかったので男に言った：

「自分で娘をここに連れて来てくれ。明日までに」。

男は花を摘んで立ち去った。時間が過ぎるうちに、彼は妻と三人の娘にどうやって説明しようかと考えた。彼は疲れ果て、喉が渇いて家に戻った。哀れな男は妻と三人の娘を呼んで言った：

「子供たち、みんなへのお土産だ。ジャンヌ、言ってくれ。いつになったら私に心配をかけるのをやめるんだ？ 今日起こったことを聞いてくれ。お前はこのバラを手に入れてさぞ喜んでいるだろう。でもそれがどれほど高かついたか知らないだろう」。

パパは彼に起こったことを語り始めた。ママは頭に両手を置いて泣き叫び始めた：

「ああ、何てこと。頭がおかしくなりそう」。

長女と次女が言った：

「ジャンヌ、あんたが高価なものを欲しがり過ぎたので、獣なんかと結婚することになったのよ。それって絶対狼に違いないわ」。

ジャンヌもママとパパにかけた心配のことを思って泣き始めた。二人の姉は言った：

「泣きなさいよ、でもあんたは獣と結婚するのよ。自分で何とかすることね」。

パパがジャンヌに言った：

「今日のところはお前を連れては行かない。今晚は私たちと一緒に寝るが、明日になったらお前を連れて行かなければならない」。

ジャンヌの心は重く、眠ろうとしたがだめだった。

翌日になって、パパがジャンヌに言った：

「さあ娘よ、約束は約束だ。ママと姉さんたちにお別れの挨拶をしてきなさい」。

二人の姉はいつもジャンヌを気に入っていたわけではなかったが、妹が獣と結婚するのを想像すると心が痛んだ。

ジャンヌはママと姉たちに挨拶を終えて出発した。二人は黙って思いに耽っていた。パパが先にたち、ジャンヌがあとに続いた。彼らは道を進んだ。獣の家の近くまで来た時にパパが言った：

「ジャンヌ、この綺麗な花を見なさい。ここが例の小さな家だ。あの獣が人間の男だったらお前は幸せだったろうに」。

ジャンヌは答えなかった。彼女は一体どうやって獣と結婚し、暮らしていけるのだろうかと思像した。

彼らは獣の家に着いた。パパはジャンヌに言った：

「私はもう帰る。お前を置いておくが、勇気を持って」。

パパは去る前に獣を見つけようとあちらこちら探した。彼は呼びかけた：

「誰かいるかい？」。

誰も応えなかった。彼はやむなく帰ることにした。

ジャンヌはたったひとりになって心配になってきた。彼女は思った：

『きっと誰かが私のことを見ているわ』。

ジャンヌはお腹が空いてきた：

『家の中に入ってみよう。暗くなってきて誰もいないし、獣もいないから』。

彼女が家の中に入った時、テーブルが見えた。そこには綺麗な白いナプキンが立っていて料理ができていた。皿、スプーン、ナイフ、フォークはあったが人はいなかった。ジャンヌは余りにお腹が空いていたので、考える間もなく座って食べ、満腹になった。回りを見ていると眠気が襲ってきた。ジャンヌが家の中を探すと寝室があった。彼女はベッドに横になって何の不安もなく眠った。さんざん歩いたその疲れで彼女はぐっすりと眠った。

彼女は翌朝七時に起きた。食堂に行くとテーブルに朝食の用意が整っていた。ジャンヌは思った：

『一体誰がこれを用意しているのかしら。誰にも会わないのに』。

それでも彼女は座って朝食を食べた。食べ終わって彼女は外に出て歩き、バラの木の近くまで行った。すると大きな亀の甲羅を背負った獣が現れた。長い尻尾まであった。獣が言った：

「おはよう、ジャンヌ。

— 何が『おはよう』よ。あっちへ行って、醜い獣。何よ、その頭と背中。あっちへ行ってと言ってるのよ」。

可哀想な獣は尻尾を引っ込めてそれを振りながら去って行った。

ジャンヌは毎日、整ったテーブルで、おいしく調理された料理を食べた。ジャンヌは毎日獣を見るたびに段々と獣に慣れてきた。

ある日、彼女が獣の横を通り過ぎる時に獣が言った：

「ジャンヌ、僕のこと気に入ったかい？」。

ジャンヌは戻って獣に足蹴りを食らわせた。獣は逃げて隠れてしまった。その日以来、ジャンヌは獣を再び見ることがなかった。同じ場所を歩いても見ることはなかった。

十四日経ってジャンヌは心配になり始めた。彼女はあちらこちら歩いて獣を探したが見つからなかった。彼女がバラの木に近づいて身を屈めると、その下に獣が横たわっているのが見えた。ジャンヌは言った：

「あんた大丈夫、それとも病気？」

— ジャンヌ、僕が君に『僕のこと気に入ったかい？』と尋ねたから、君は僕を足で蹴ったのかい？ もう一度同じことを聞いてもいい？」。

ジャンヌは思った：

『もし私がいいえと答えたら、彼の身体がどうにかなってしまうかも知れない』。

そこで彼女は答えた：

「ええ、あなたのこと気に入ったわ」。

それを聞くと獣は立ち上がり、大きな甲羅を地面に捨てた。ジャンヌは獣が甲羅を脱ぎ捨てる様子を見て怖くなった。しかし甲羅がはずれ落ちた時にジャンヌが見たのは... 男前の王子だった。言うまでもないが、ジャンヌは喜びで

我を忘れた。王子の方も同じだった。ジャンヌは王子に見とれて言った：

「王子様、教えて下さい。どうしてあんな身体にされたのですか？ どうして長い間獣にされたことを私に言わなかったのですか？ 私があなたを足蹴にして痛めつけた時に。－ 僕たちが結婚した時に君に話すよ」。

王子はすぐさま結婚することを公にして、その日のうちに結婚した。

参列者がみんな去ったあと、ジャンヌは好奇の念を抑えられず新郎に尋ねた：

「あなた、どうして獣にされたの？」

－ 僕はずっと乳母と過ごしていた。彼女は僕のことをすごく気に入っていたんだ。しかし彼女は魔女だった。ある日、彼女が僕にこう言った『お前と結婚させるために、ひとりの娘を連れて来るよ』。僕は承諾した。でも彼女がその娘を連れて来た時、僕にはとても受け入れられなかった。乳母は僕を叩いた。彼女はその娘を自分が気に入ったので、僕のために選んだのに、と言った。僕はもう彼女のお気に入りではなくなり、僕を不幸にした。彼女はこう言った『呪われよ、お前は陸亀のように、甲羅に閉じ込められて尻尾を生やすのだ。お前を気に入る娘が現れて、お前を甲羅から解き放つ日まで』。

さらに王子は妻に言った：

「ジャンヌ、もし君が地獄色のバラを欲しがらなかったら僕は甲羅と尻尾から解放されなかった。ジャンヌが僕の命を救ってくれたんだ」。

王子はとても喜んで最後に言った：

「君のパパと二人のお姉さんのところに一緒に行こう」。

二人は一緒にジャンヌの実家まで降りて行った。ジャンヌは王子と共にパパの家に入った。みんなが驚いた。ジャンヌは起こったことをみんなに語った。

ジャンヌが帰ったあと姉たちが言った：

「私たちも地獄色のバラを頼んだらよかったのね。そうしたら、ひとは素敵な王子様に逢えたでしょう」。

彼女たちのパパが言った：

「子供たち、猫の幸せは犬の幸せとは違うのだよ」。

9. 三つの願い事

昔々、とても貧しい男がいた。彼は妻とひとりの子供と一緒にみずばらしい家に住んでいた。男は毎日森に行って木を切っていた。

ある日、男は森の中でひとりごとを言った：

「本当に哀れなほど貧しい。毎日働きに行かなくてはならない。妻はお腹を空かせているし、私もそうだ。何て惨めなんだ」。

彼がそんなことをつぶやいている時、美しい妖精が現れて彼に言った：

「貧しい人、あなたが言ったことをみんな聞きました。私は心が痛みました。あなたに同情します。そこで三つの願いを授けます。あなたが望めば、どんなことでも三つ叶うでしょう」。

そう言って妖精は姿を消した。男はひとりで森に残された。彼は今や大喜びで言った：

「家に戻って妻に話そう」。

男は自宅に戻り妻に言った：

「おいおい、森の中で妖精を見かけたら、そいつがこう言うんだ『貧しい人よ、あなたが哀れでならない。あなたに三つの願いを授けよう。どんなものでも、欲すれば得られます』と。俺がどんなに喜んだかわかるだろう。

－ ええ、わかるわ。私もとても嬉しい。家に入って食事の時にそれについて話しましょう。

－ もちろんだ」。

彼は家の中に入りテーブルに着いて妻に言った：
「おい、腹が減った。食事を急いでくれ。食べている間にあの妖精が授けてくれた三つの願いのことを話そう」。
妻がやって来て夫と共に座り、彼らは食事と話を始めた。

男が言った：

「おい、大金を願うことができるぞ。

- そうね。
- 素敵な家も願うことができる。帝国だって頼めるぞ。
- 真珠やダイヤモンドもたくさん。
- 大家族だって。五人の息子と五人の娘だ。
- あら、それはだめ。私はね、六人の息子と四人の娘がいいわ」。

男と妻はこんな風に話し続け、何を願おうかと思いを巡らした。ところが彼らにはそれが難しい問題であることがわかった。最初の願い事をどうすればいいのかわからなかったからだ。

突然男は話すのをやめ、口の中のものを黙ってもぐもぐ食べ、干からびたパンを見て言った：

「ああ、このひどいパンと一緒に食べるのに、大きなソーセージがあればいいな」。

その瞬間、大きなソーセージがテーブルに落ちて来た。男はソーセージを見てびっくりし、妻はぽかんと口を開けたときり言葉が出なかった。少ししてからしゃべれるようになって妻が言った：

「あんた、何て軽率なの。願い事はもう二つしかないわ。あんたがさっきソーセージなんかお願いしたから。」

— そうだ。俺は本当に軽率だった。でもわざとじゃないって信じてくれ。とにかく、あと二つは願い事が残っているんだし。大金と帝国を願うことができる。

— それもいいわ。大金と帝国ね。でも十人の子供はもう無理よ。あんたが軽率だったから、ソーセージなんか頼んでしまって。あんたは大家族よりも一本のソーセージの方がよかったのに違いないわ。

妻は文句を言い続けた。彼女は繰り返した：

「あんたったらひどく軽率でソーセージなんか頼んじゃったし。それにしても、あんな風に急にとんでもない愚か者になるなんてどうしたの？ まあ、あんたは時々お馬鹿になるけれど」。

哀れな男はとうとう耐えられずに言った：

「いいか、このソーセージのことでお前にぐだぐだ言われるのはもううんざりだ。このソーセージがお前の鼻にぶら下がったら、さぞすっきりするだろうよ」。

その途端、ソーセージが妻の鼻にぶら下がった。妻はびっくりしたが夫も同じだった。引きはがそうとしたがソーセージは鼻にぴったりくっついて取れなかった。妻は泣きわめき、夫と、彼女の口の前でぶらぶらしているソーセージに悪態をつき始めた：

「このとんま野郎。どうしてそんな馬鹿なことができるの？ ソーセージをお願いしたと思ったら、今度はそのソーセージを私の鼻に吊るすことを願うなんて。もう願い事を二つ失ってしまったわ。私たちにはもうひとつしか願い事が残っていないのよ。」

— それはわかっているよ、お前。もうこうなったら、残っている最後の願い事で大金を頼むしかないだろう。

— そうね、でもまずは私の鼻にぶら下がっているこの馬鹿げた大きなソーセージよ。私は美人よ、あんたも覚えているでしょ。それが今ではこんなに醜くなってしまった。それもこれも元はと言えば、あんたの愚かさのせいよ」。

妻はまた泣き始め、涙がソーセージに落ちてその上を伝って行った。男は妻を見て言った：

「俺はこのソーセージがここから消えると嬉しい。こいつが騒ぎの元で言い争いの種だから」。

その瞬間ソーセージは消えてしまい、男と妻は以前の貧しさに戻った。妻も夫も嘆き悲しんだ。しかし、三つの願い事は結局ちゃんと成就したのだった。そして彼らは干らびたパンをまた食べざるを得なかった。

男は毎日森に木を切りに行った。森の中で彼はまたこう言ってみた：

「本当に哀れだ。何て惨めなんだ」。

しかし妖精は二度と戻って来なかった。彼に三つの願い事をまた授けるために。彼が大金や帝国、真珠、ダイヤモンド、大家族を得られたかも知れない願い事を。彼が得たのは一本のソーセージだけだった。

10. 魔法の蛇

昔々、男とその妻がいた。彼らには息子がひとり、娘がひとりいた。それぞれ、ジャンとジャンヌトンという名前だった。

男は森で木を切る仕事をしていて、娘は美しく善良だったが、息子の方は野蛮で性悪で、両親の言うことをいつも聞かなかった。彼らは小さな村に住んでいた。

ある日、彼らの父親が病気になり死にそうになった。彼は二人の子供を呼んだ。彼は息子に尋ねた：

「お前は私の財産と祝福のどちらを望むか？

－ 財産を下さい」。

パパが同じ質問を娘にしたところ、娘は祝福を望んだ。彼女のパパは娘を祝福して死んだ。

数日後に彼らのママも悲しみの余り死んでしまい、二人の子供だけが残された。二、三日経って、息子はパパとママが彼に遺した全財産を取りに来た。回りのみんなは娘の兄が家の中の全財産を持っていくのを見て非難した。彼らは兄に、妹に何か残してやれと言った。そこで兄は妹に鍋だけを与え、それでも文句を言いながら立ち去った。近所の人みんなも貧しかったので娘を助けることはできなかった。しかし彼らは、娘から鍋を借りることで代わりに麦を少し与えた。

ある日、娘は余りにもひもじかったので、何か売れるものがないか、あちらこちらを掘り返した。彼女が見つけた

のは、二、三粒のカボチャの種だった。彼女はその種を家の裏に蒔いた。

翌朝早く、彼女はカボチャの木が長く伸びて、大きなカボチャがたくさん生っているのを見つけた。ところが娘の兄は、彼女が鍋を貸して糊口をしのいでいることを聞きつけて、鍋を奪いにやって来た。しかし娘はカボチャの木を気に入っていたので、鍋を取られても構わなかった。彼女はカボチャを売って生計を立てた。彼女のカボチャはとてもおいしくて、みんなが買いにやって来た。

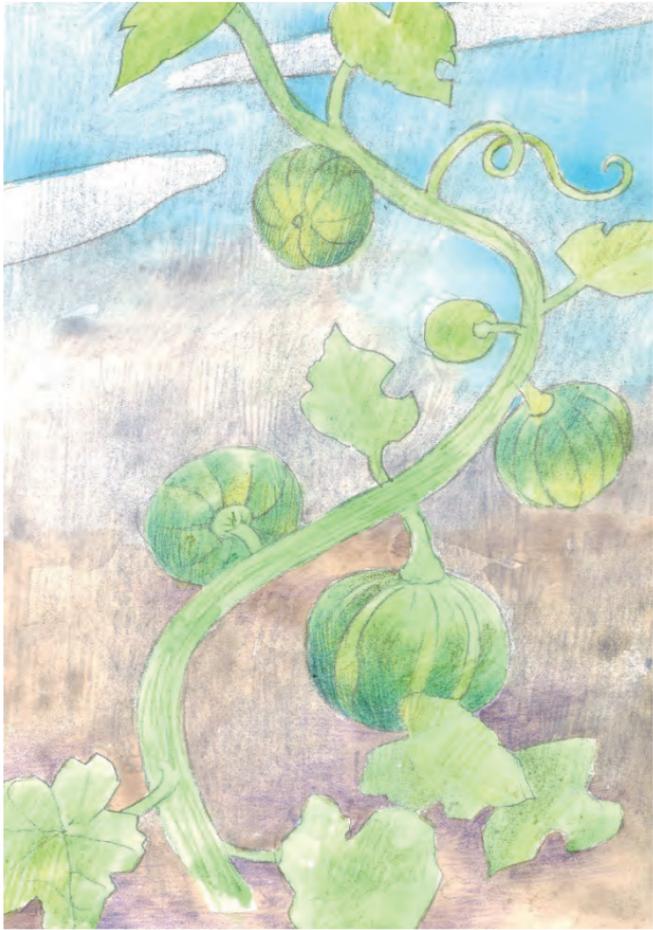
息子は妹のジャンヌトンがカボチャで金を稼いでいると聞いて、カボチャの木を切り倒しにやって来た。彼はジャンヌトンがカボチャの木の横にいるのを見つけた。彼はカボチャの木を切り倒すからそこをどけと言ったが、ジャンヌトンは動かなかった。そこで彼はカボチャの木と一緒に、ジャンヌトンの手を切り落とした。

ジャンヌトンは兄に見つからないように森の中に隠れた。彼女はそこで眠り、樹の実を食べた。彼女は手の傷が治ってから、その樹のてっぺんまでよじ登った。そこからは遠くの大きな町が見えた。

彼女は森の中に大きな音を聞きつけた。彼女が見ると大勢の男たちが王子と共に狩りをしていた。その王子は大層疲れていて男たちに言った：

「少し休もう」。

娘は樹の上で静かに座っていたが、ふと涙がこぼれて王子の上に落ちた。王子は飛び上がって雨だと思った。彼が驚いたのは雨季ではなかったからだ。そこで王子はどこか



ら水が落ちてきたのかを探るために従僕を行かせた。その従僕は樹を登り、ジャンヌトンが泣いているのを見つけた。従僕は降りてきて王子に言った：

「可愛い娘が泣いています」。

そこで王子も樹を登り、ジャンヌトンが泣いているのを見つけた。王子はジャンヌトンに言った：

「パパのうちにおいで」。

そして彼はジャンヌトンと結婚した。

随分と時が経ってジャンヌトンは男の子を産んだ。ある日、王子はパパが治めている土地を訪問するために他の地方に行くことになった。家族に別れを告げて彼は出発した。その頃、娘の兄は乞食のように貧しくなっていた。

ある日、彼は妹のジャンヌトンが住む町までやって来た。彼は通りがかりの人に尋ねた：

「何か報せはあるかね？」

— 特にないよ。王子が奥さんと赤ん坊を残して、パパが治めている地方に出かけたけどね」。

兄は思った：

『ああ、それは俺の妹だな。やっと運が向いて来たぞ』。

彼は王のところに赴いて言った：

「恐れながら国王陛下、ある報せを持ってまいりました。あなたの義理の娘は実は魔女で、六回結婚をしており、六人の夫をみんな殺しています。その罰として腕を一本切り落とされました」。

王はジャンヌトンが善良で美しいのでそのようなことはまったく信じたくなかった。しかしジャンヌトンの兄はさらに続けた：

「それは本当のことです、陛下。あなたのお子様を守るためにはその女を殺すしかありません」。

そこで王は妻を呼んだ。女王は義理の娘をその美しさゆえにずっと妬んでいた。そこで彼女は王に言った：

「その女を殺してしまいなさい。私たちの息子が死なないために」。

王は兵士を数人呼んで、ジャンヌトンと赤ん坊を捜すために森に遣わした。それから王宮の裏に、王は二つの墓を掘らせた。王はジャンヌトンの兄に莫大な金を与え、このろくでなしはその金を持って町に散財をしに行った。

ジャンヌトンは森の中で樹の根の中に留まっていた。ある朝早く、ジャンヌトンは大きな音を聞いた。彼女が見ると大きな蛇が彼女のいる方へ向かってきた。その蛇がジャンヌトンに言った：

「かくまってくれ、かくまってくれ」。

ジャンヌトンは蛇に言った：

「入りなさい、兵士がくれたこの鍋の中に隠れなさい」。

蛇はそこに入り、小さく小さく丸まって収まった。

そのすぐあとにジャンヌトンは他の大きな蛇が通るのを見た。その蛇がジャンヌトンに尋ねた：

「蛇がここを通るのを見なかったかい？」。

ジャンヌトンはその蛇に言った：

「それだったら、上の方に行ったのを見たわ」。

大きな蛇はジャンヌトンが示した方に追って行った。別の蛇は鍋から出てきて言った：

「有難う、ジャンヌトン」。

彼は命を救ってもらったお礼をすと言った：

「僕について来て。僕のパパのところに行けばお礼をしてくれるから」。

そこでジャンヌトンは赤ん坊を連れて蛇について行った。

川岸に着くとジャンヌトンは喉の渇きを覚えた。彼女が水を飲んでいる間に赤ん坊が川の中に滑り落ちてしまった。ジャンヌトンは蛇に助けを求めた。蛇は自分の尻尾をジャンヌトンの切り落とされた腕に触れ、二本の腕を水に浸して赤ん坊を探すよう言った。ジャンヌトンは言われた通り、二本の腕を水の中に浸けて赤ん坊の命を救った。ジャンヌトンはその時、切り落とされた腕が元に戻っていることに気づいた。

蛇のパパのところに着くまで何日もかかった。蛇はジャンヌトンに言った：

「パパのところに着いて、彼がお礼に何を望むか尋ねたら、彼の指輪とボンネット【緑のな
い帽子】が欲しいと言うんだよ」。

ジャンヌトンはようやく、命を救った蛇のパパのところに着いた。彼女は蛇のパパと他の家族に会った。ジャンヌトンは怖くなって震えだしたが、友だちの蛇が安心するように言った。可哀想なジャンヌトンは赤ん坊と一緒に、蛇の家族のもとに長い間留まった。

ある日、ジャンヌトンはそこを去ることに決めた。彼女は蛇の家族に別れを告げに行った。彼女が蛇のパパのとこ

ろに行くくと、彼は子供を救ったお礼に何が望みかを尋ねた。ジャンヌトンは蛇のパパに、彼の指輪とボンネットが欲しいと言った。蛇のパパはそれらを彼女に与え、ジャンヌトンは出発した。

その頃、王子が王のもとに戻って来た。王は王子に、彼の妻と赤ん坊が死んだと伝えて二つの墓を示した。王子は毎日泣き暮らし、何をする気にもならず死のうとさえした。

ある日、ジャンヌトンは赤ん坊と長い間歩いて、とても高い山に着いた。ジャンヌトンは蛇のパパからもらった指輪に触れて言った：

「お腹が空いたわ」。

その途端、たくさんのおいしい食べ物が現れた。ジャンヌトンはそれを赤ん坊と一緒に食べた。夜になると雪が降り始めたので、ジャンヌトンは蛇のパパにもらったボンネットを取り出して、それを赤ん坊の頭に被せて言った：

「これでお眠り、可哀想な子」。

すると突然、様々な色の灯りが煌めく大きな城が現れた。ジャンヌトンはその中に様々なものがあるのを見た。それらは言うまでもなく、宝石や家具、そして他の綺麗なものたちで、城の中はそれらで溢れていた。

王の城では悲しむ王子が窓から外を眺めていた。彼はうなだれていたが突然頭を上げた。彼がそこに見たのは、山の頂上で輝いている無数の光だった。王子は眠ることができず一晩中そこに座って、今まで見たことのない多くの光を眺めていた。

陽が昇ると彼はパパの王様のところに行って誘った：

「兵士たちと一緒にあの美しい城を見に行きましょう」。

王はすぐさま后と兵士たちを呼んで出発した。王子がその城に着くと娘が見えた。王子はみんなに言った：

「あの娘だ！」。

彼は城に入り、立っている娘のもとに駆け寄った。王子は娘のそばまで近寄ると彼女に抱きついた。王も同じことをした。

ジャンヌトンはすぐに盛大な宴を催すことを決めた。彼女が指輪に触れた途端にたくさんのテーブルが並び、たくさんの素晴らしい料理が現れた。給仕たちがあちらこちらで準備をしていた。ジャンヌトンはみんなに、彼女の兄が今まで自分にしたことを赦すと言った。そして王子は妻に、蛇を殺さないこと、そして彼女から離れないこと、決してひとりにしないことを約束した。

11. 愚かなジャンの物語

昔々、男と女がいた。男の方は亡くなった。彼らには二人の子供がいた。ふたりとも男の子だった。妻は夫が亡くなったあと、二人の息子と一緒に暮らした。息子たちの名前はカラバス（ヒョウタン）とお馬鹿のジャンだった。

ある日、彼らのママは市場に行った。彼女はそこでヒョウタンをひとつと色んなスパイスを買って家に戻った。そのあとで彼女は教会に行く用事があった。お馬鹿のジャンは長男だった。ママが彼に言った：

「お馬鹿のジャン、昼ごはんを作っておいて。教会に行くてくるから。このヒョウタンを半分に切っておいてちょうだい。その片方でカレーを作るよの。スパイスがあるからそれを入れて。色んなスパイスを入れるとおいしくなるわ」。

カラバスはお馬鹿のジャンの弟だった。彼は庭の塀で遊んでいた。お馬鹿のジャンが弟に言った：

「遠くへ行って遊ぶんじゃないよ。ママがお前を料理しなさいと言ったからね」。

カラバスは小さいので何のことかわからなかった。しばらくしてからお馬鹿のジャンが呼んだ：

「カラバス、カラバス、カラバス、おい。こっちに來い、早く來い」。

可哀想なカラバスがやって來た。その時お馬鹿のジャンは大きなナイフを研いでいた。カラバスがやって來るとお馬鹿のジャンは彼の両足を掴んで頭を下にして吊り下げた。お馬鹿のジャンはナイフを取って、弟のカラバスを二つに

切り分けた。彼は片方を小さく切って、それで脂身たっぷり
りでスパイスの利いたカレーを作った。

お馬鹿のジャンのママは、教会を出て戻って来るところ
だった。彼女がまだ塀のところにいる時にお馬鹿のジャン
が呼んだ：

「ママ、ヒョウタンはこってりしてるね」。

ママは笑いながら答えた：

「何ですって？ お馬鹿のジャン、からかわないで。ヒョ
ウタンがこってりしているなんて聞いたことがないわ」。
その時ママは彼が弟を料理したことをまだ知らなかった。
ママが台所に行ってヒョウタンを見たら、自分が買ったヒ
ョウタンはそのままだった。ある考えが頭に浮かんでママ
は言った：

「ところでお馬鹿のジャン、お前の弟はどこにいるの？

ー 弟はね、ママが料理しなさいって言ったから、二つに
切ってひとつはカレーにしたよ。もうひとつは納屋の下に
吊るしてある」。

ママは両手を頭に置いて泣き叫んだ。余りにも大声で叫
んだので近くにいたみんなが彼女のところに集まり、お馬
鹿のジャンがしたことを見た。彼は弟のカラバスを二つに
切ってカレーを作ったのだ。彼のママは涙が涸れるまで泣
き続けた。

数日経ってママが言った：

「お馬鹿のジャン、私たちにはお金がないの。お菓子を作
ってお前に渡すから、それを売りに行きなさい」。

お馬鹿のジャンはママに「はい」と言った。ママはお菓子を作り、それを籠に入れて彼に渡した。お馬鹿のジャンはお菓子が入った籠を背負って出発した。

彼は出会う人みんなにお菓子を買ってくれるか尋ねた。ある人は買ってくれたが他の人は買ってくれなかった。彼は籠の中を覗いて、どれくらい売れ残っているかを見たが、まだたくさんあった。

彼は泉の近くに着いた。お馬鹿のジャンは喉が渴いていたので小さな池の端で身を屈めた。彼は池に映った自分の影に話しかけた：

「旦那さん、お菓子を買ってくれませんか？ 買うなら残っているのを全部お願い」。

話している間、彼は頭を振っていた。お馬鹿のジャンは、他の人が彼と話をしていると思ったが、それは自分の影だった。するとその影が言った：

「じゃ売ってくれ、ほらお金だ」。

話している間も彼はずっと頭を振っていた。しばらくするとその人はいなくなっていた。籠の中を確かめると空っぽで、お菓子は水の中で膨れ上がって池を埋め尽くしていた。お馬鹿のジャン、途方もないお馬鹿はママのところに戻りながら泣きながら戻った。ママは何があったのか彼に尋ねた。

彼は、男の人がお菓子を全部取ってお金をくれなかったと言った。そこでママが彼に言った：

「それじゃ見つけに行きましょう。その人を見つけに行くのよ」。

ママは彼と一緒にいき、彼はお菓子を売った場所をママに示した。ママはそこでお菓子が水の中で膨れ上がっているのを見つけた。ママはお菓子を手で手繰り寄せた。その時ジャンは水の中に自分とママの影を一緒に見て言った：

「そこにいるよ、ママ。奥さんと一緒にやって来た」。

ママは言った：

「本当にお前はお馬鹿だよ、さあ帰りましょう」。

お馬鹿のジャンはママと一緒に帰った。

そのあとしばらく経ってからママが彼に言った：

「一緒に畑を耕すのよ。それで何か植えて何とか生活しましょう」。

彼らは一緒に畑を耕した。耕し終わったあと、そこにママは火を点けるために藁を積んだ。彼女はお馬鹿のジャンに言った：

「お前は余りもお馬鹿だから、ここじゃなくて遠くで遊んでいなさい。今から藁に火を点けるから、そこで遊んでいたらお前は焼けてしまうからね」。

お馬鹿のジャンは遊びに行くふりをして、ママが背中を向けた時に藁の山の下にもぐりこんで隠れた。ママはそれを知らずに藁の四方に火を点けた。彼女にはジャンが藁の山の中にいることなど思いもよらなかった。

お馬鹿のジャンは藁の山の下でこんがり焼かれてしまった。彼を知っていたみんなは、お馬鹿のジャンは本当にとんでもないお馬鹿だったと語り合った。

12. 未亡人と二人の娘

昔々、ひとりの未亡人がいて彼女には二人の娘がいた。彼女は長女だけを気に入っていた。彼女はその娘を客間に座らせてピアノを弾かせていた。次女はまるで小間使いのように扱われた。彼女は森に薪を集めに行き、二マイルも離れたところまで水を汲みに行かされた。毎日朝と夜に。

ある日、その可哀想な娘が壺を持って泉に行くと、ひとりの老婆に遇った。その老婆は妖精だったが娘にはわからなかった。老婆は娘に言った：

「私は喉が渴いているのだけど、水を少しくれるかい？」。

娘は壺を満たして老婆に飲ませてあげた。すると老婆が言った：

「有難う、わが子よ。お前に贈り物をしてあげよう。お前の親切と善良さで、お前は話す度に口から金とダイヤモンドと真珠が出てくる」。

娘は壺を持って家に戻った。家に着くとママが言った：「どこまで行ったんだい？ 今まで何をしていたんだい？ - ママ、おばあさんに遇ったの。その人が水を少しおくれと頼んだので飲ませてあげたわ」。

娘がそう話していると、口から金、真珠、ダイヤモンドが出て来た。ママが娘に言った：

「お前、口から出て来たそれ、どこで手に入れたんだい？」。

哀れな娘はママにすべてを話した。

ママは気に入っている方の娘に言った：

「お前、妹の口から出て来たものを見たでしょう。お前も行って手に入れて来るのよ。

－ 私行かないわよ」。

しかし何度もしつこく言われたので、長女は怒りながら瓶を持って出かけた。

彼女が泉の近くに着くと老婆に遇った。老婆は言った：「こんにちは、娘さん」。

娘は老婆を見たが背中を向けた。老婆が言った：

「喉が渴いているのだけど、水を少しくれないかい？

－ ばあさん、いい気にならないで。放っておいてよ。私に頼んだって水なんか飲ませてあげないわ。

－ そうかい、この小娘。何て生意気なんだ。お前はこのあと話す度に、口からヒキガエルと蛇とゴキブリと蠅が出てくるよ」。

娘は何も言わずに去った。

娘のママは両目を凝らして可愛い娘が戻って来るのを待っていた。彼女の可愛い娘が戻って来たのを見ると言った：「娘よ、例のばあさんを見つけたかい？

－ ええ、見つけたけど水はあげなかったわ」。

そう話している間に、彼女の口から蛇やゴキブリが出て来た。母親が言った：

「お前の口から出て来たの一体何？ これはお前の妹のせいだわ」。

母親は大きな棒で次女を叩いた。彼女は走って逃げた。母親が言った：

「二度と戻って来ないで、お前は姉の不幸の元なのよ」。

次女は森の中に隠れて大きな樹の下に座った。

ひとりの王子がいて森で狩りをして過ごしていた。ある日、王子がその大きな樹の近くに行くと娘を見つけた。王子は彼女に近づいて言った

「こんにちはお嬢さん」。

娘は答えなかった。王子は続けた：

「お嬢さん、そこで何をしていますのですか？ この森にたったひとりで。夜はどこで休むのですか？ 何故泣いているのですか？」。

娘は答えなかった。王子はさらに続けた：

「お嬢さん、答えて下さい。あなたは話せないのですか？ 君は話さなければいけない。答えてくれ。力になってあげよう。僕のパパのところに連れて行ってあげよう」。

娘が口を開くと真珠、ダイヤモンド、金が出て来た。王子は娘を見て彼女の手を取り言った：

「パパのところに行こう」。

王宮に着くと王子はパパに言った：

「僕は美しいお嬢さんを見つけたよ」。

王は自分も会うので連れてくるよう王子に言った。王は美しい娘を見て挨拶をした。娘が答えた時、その口から金、ダイヤモンド、真珠がこぼれ落ちた。王は言った：

「息子よ、その娘と結婚するがよい」。

彼は后を呼んだ。王は息子とその娘のために盛大な結婚式を催した。みんなが十五日の間、食べ、飲み、踊った。

一方、娘のママは彼女のお気に入りの長女と共に家を去るしかなかった。家には蛇や蛙、虫が溢れていたからだ。

13. 母の愛

昔々、フランスのある町に、ブドウ栽培をしているジャン・ブルドンという男がいた。彼は働き者だったが暴力的な性格だった。彼は自分の貧しさに我慢がならなかった。

ある日、ブドウ畑に働きに出る時に彼は思った：

『もし叔父貴が死んだら俺は金持ち、それも大層な金持ちになれるし、もう働かなくてすむだろうな』。

その数分後、彼は叔父が断崖の脇にいるのを見つけた。悪魔がジャン・ブルドンに囁いた：

「叔父を押してしまえ。そうしたら落ちて死んでしまうだろう。みんなは事故だと信じる。そうしたらお前は大金持ちだ。唯一の相続人だからな」。

ブドウ作りはすぐさまその悪い考えを実行した。しかし犯行の直後にわかったのは、自分が牢獄にいられるか、死刑になる殺人者だということだった。彼はしでかしたことをひどく後悔し、誰かに見られて警察に通報されやしないかと辺りを窺いつつ、びくびくしながら歩いた。

震えがさらにひどくなってきた時、彼は肩に手が置かれるのを感じ、嘲るような声が耳に囁くのを聞いた：

「さて、お前の叔父さんは死んだ。財産を相続するためにお前が殺した。私は一部始終を見ていた。お前が私の望むものをくれれば見逃してやろう」。

ジャン・ブルドンは答えた：

「ああ、わかった。君が望むものは何でもあげよう。約束するよ」。

彼が恐怖に怯えながらそう言うと、その声が答えた：

「宜しい、お前の息子をもらおう。私の名前を思いつかなければ三日後に連れて来い」。

そして悪魔は消え去り、哀れなブドウ作りは家に帰った。

彼は息子を失うことを思うと悲嘆にくれ、自分が犯した罪への悔悟もあって食べることも眠ることもできなかった。彼の妻は夫が青ざめているのを見て心配になり、何があったのかを尋ねると哀れな夫はすべてを語った。

妻は彼の行いを咎めなかったが、身を震わせながら教会に行った。そこで彼女は神父にすべてを話した。その神父は立派な男で、学者としても聖者としても知られていた。神父は妻と長い時間話をした。妻は家に戻ると夫に言った：「さあ、あなたが罪を犯してから悪魔に遇った場所に行きましょう。そこで神のご加護を祈りながら、悪魔の名前を思いつけるように精神を集中できるでしょう」。

男は罪を犯した場所に行ったが、悔悟の思いが邪魔をして考えることに集中できなかった。彼は何度となく繰り返した：

「ああ、悪魔の名前を知ることさえできれば」。

しかし自分が犯した罪のことばかり考えてしまって、悪魔の名前はまったく出てこなかった。

二日目は男の代わりに彼の妻がその場所に行った。彼女は子供を救おうと心に固く決め、すべての気持ちを集中した。すると小さな声が地中から聞こえて来た。それは優しく歌っていた：

♪ お前はいい子だ、ねんねしな

お前のパパ、ラパックス〔Rapax：ローマ帝国初代皇帝アウグストゥス以前に存在したとされる第二十一ローマ軍団の名前で「略奪者」、「捕食者」の意〕

はお前を探しに行ったから

お前はいい子だ、ねんねしな ♪

妻は喜んで家に戻った。

翌日、悪魔が子供を引き取るために姿を現した時、彼女は満足げに呼んだ：

「こんにちは、ラパックスさん、ご機嫌いかが？」。

悪魔はとても驚いて子供を連れずに姿を消した。

その数分後、ブドウ作りの男は死んだとばかり思っていた叔父が目の前に現れたので死ぬほど喜んだ。さらに叔父は彼を夕食に誘ってくれた。

悪魔はブドウ作りが乱暴で強欲だと知っていたので、息子を奪うために彼を騙したのだったが、勇敢な妻のおかげで悪魔の試みは失敗した。

ひとつ確かなことがあった。ブルドンはすんでのところ
で暴力を振るわなかったということだった。彼は罪を犯す
のが怖く、悔悟が快いものではないことを知っていたのだ。

14. 隅っこの爺さん

昔々、ひとりの老人が息子と娘、そして娘の旦那である横柄な男と一緒に暮らしていた。その男は娘のパパにまったく敬意を払うことがなかった。

老人はとても歳を取っていたので、目はあまりよく見えず、ちょっと歩こうとする時にも膝は震え、耳も遠かった。彼は食卓についている時に手が震えるので、よくコップをテーブルや自分の上にひっくり返してしまった。彼の息子と娘はそれが気に障って、彼を家の隅の椅子に座らせ、お椀を与えてそれで食事をさせた。老人は時々涙を浮かべてテーブルの方を見たが何も言わなかった。

ある日、老人が昔の思い出に悲しく浸っていたところ、お椀をうまく掴めなくて、それが彼の手をすり抜けて下に落ちてしまった。もちろんお椀は割れた。娘がすぐにそれを咎めたが老人は溜息をつくばかりだった。娘はパパの側を離れてどこかに行った

彼女は家に戻ると、買って来た安物の木のお椀をパパに渡した。老人が娘にそれで何をするのか尋ねると、娘は「落としても割れないからそれで食事をしなさい」と言った。

ほどなくして、娘の四歳ぐらいになる子供が門の前で焚き木と一緒に座っていた。子供のパパが子供に聞いた：

「それで何をするんだい？」

— パパ、僕はこれで木のお椀を作るんだよ。それでパパとママにスープを食べさせるんだ。僕が大人になったらね。」

彼のパパとママは顔を見合わせ、しばらくの間、何も言わなかった。彼らの目に涙が流れた。

その後、二人は老人のところに行って、今日からみんなと一緒にテーブルで食事をしようと言った。

15. 聖処女^[一般には聖母 マリアの呼称]

昔々、マリーという名の娘がいてある町に住んでいた。彼女は美しい娘でとにかく美しかった。

ある日、聖処女が地上に降りて来てマリーに会った。聖処女は彼女がとても美しいので気に入り、自分と共に天上に行くようにと命じた。天国に着くと聖処女はマリーに言った：

「パレスチナの友人たちのところに行かなくてはならないので、七つの部屋の鍵をあなたに預けておきます。六つの部屋は開けてもいいですが、七つ目の部屋は開けてはいけません。

－ わかりました。七番目の部屋は開けません。

聖処女は出立した。

マリーは六つの部屋を順に開け、六つ目の部屋を開けてから聖処女が七つ目の部屋を開けてはいけないと言ったことを思い出したが、七つ目の部屋を開けてしまった。部屋を開けた時にマリーがそこで見たのは、見てはならないものや、ありとあらゆる秘密だった。

二十二日後に聖処女は戻った。彼女はマリーに挨拶をして、変わったことはなかったかと聞いた。マリーは何もなかったと答えた。聖処女が尋ねた：

「あなたは部屋を幾つ開けましたか？

- － 六つの部屋を開けました。
- － 七つ目の部屋は開けていませんね？
- － はい、開けていません」。

聖処女はそれを三回尋ね、マリーは三回否定した【ペテロがイエスのことを三回知らないことを三回知らないと否認したこと（『マタイによる福音書』二六章七五節）への引喩か】。聖処女は怒ってマリーを掴まえて地上目掛けて投げ落とし、彼女は森の中の大きな樹の近くに落ちた。

その町には王がいて息子の名前はジョゼフだった。彼は森で狩りをするのが好きだった。彼が森の中を歩いていると大きな樹の近くでマリーを見つけた。ジョゼフは彼女にそこで何をしているのかと尋ねたが、マリーは何も答えなかった。ジョゼフはマリーが話せないのだと思った。しかしマリーが美しい娘だったので、ジョゼフはマリーを父のところに連れて行った。王とその妻はマリーが話さないのにも拘らず彼女をいたく気に入った。王はマリーをジョゼフと結婚させ、彼らは王宮で暮らした。

その後マリーは子供を授かった。その夜、聖処女が地上に降りてマリーに言った：

「私にお言いなさい、七つ目の部屋を開けたかどうかを。
— いいえ」。

聖処女はそれを聞いてマリーの話す力を取り上げ、赤ん坊も連れて去った。

朝早く王妃がマリーの部屋に来ると赤ん坊がいなかった。王妃は王を呼び、王はマリーに子供がどこにいるかを尋ねたが、マリーは知らないという仕草をただけだった。王はマリーの赤ん坊がどこにいるかを捜すために大勢の人間を遣わした。彼らはあちらこちらを捜したがどこにも見つからなかった。

しばらくしてマリーはもうひとり子供を授かり、王は大勢の兵士たちにマリーの部屋を監視させた。

ある夜、聖処女がまたマリーのところにやって来て、七番目の部屋を開けたかどうかを尋ね、マリーは否定した。聖処女はマリーの二人目の子供も連れ去り、彼女の話す力を取り上げた。

王は兵士たちに赤ん坊がどうして消えたのかを尋ねたが彼らは何も見えておらず、誰も来なかったと言った。聖処女は聖霊なので彼らには見るができなかったのだ。王はマリーが赤ん坊を食べたのではないかと疑い、彼女を裁くために法廷に連れてくるよう命じた。

マリーが法廷にやって来ると裁判官は証拠がないにも拘らず有罪と断定した。マリーは死刑を宣告され、銃殺刑に処せられるために草原に連れて行かれた。

王も義理の娘の死刑に立ち会うためにやって来た。銃殺隊が狙いをつけて死刑執行の一分前になった時、聖処女が降りて来て手を上げ、マリーに七番目の部屋を開けたかどうか尋ねた。マリーは言った：

「はい開けました」。

聖処女は銃殺隊の手から銃を落とし、マリーに話す力と二人の子供を返した。子供たちは大きくなって丸々としていた。王は盛大な結婚式を催し、王子は妻が話せるようになったことを聞いてとても喜び、彼らは死ぬまで幸せに暮らした。

16. 不思議な髪の毛

昔々、とても貧しくて子沢山の男がいた。彼の家族はとても大人数だったので、みんなを十分に食べさせるのは無理だった。彼は毎日妻に言っていた：

「おいおい、子供たちがお腹を空かしている。みんなに十分食べさせるのはもう無理だ。いっそのこと、みんなで豚のうじゃないか。

－ あんた、我慢して。何も今日死ぬことはないわ」。

ある夜、哀れな男は眠っている時に夢を見た。夢の中に子供が現れて彼に言った：

「可哀想なおじさん、あなたはとても不幸だね。でも僕のことを聞いたら幸せになるよ。明日の朝、枕の下に鏡とサンゴとハンカチがあるので、それを取っておいて。誰にも言っちゃだめだよ。そのあとで山に行くんだ。そこに小さな川があるからそれを源まで辿って行ったら可愛い娘が見つかる。その子が話しかけても答えちゃだめだ。もしその子と話したら、おじさんは魚か他の獣に変えられちゃうから。その子の側に座っていて。その子がおじさんの膝に頭を置いたら、注意して一本の赤い髪の毛を捜して。見つけたらそれを引っっこ抜いてすぐに逃げるんだ。女の子はおじさんを追っかけて来るから、ハンカチとサンゴと鏡をひとつずつ順番に投げて。その子は投げたものを見るのに立ち止まるから。それで町までずっと道を逃げてきて。その髪の毛を金持ちに売ったら、おじさんは金持ちになって、子供たちみんなの世話をできるよ」。

翌朝、貧しい男が起きてから枕の下を探るとハンカチとサンゴと鏡を見つけた。男はそれらを持って山の方に向かった。彼は川に着いてから水源まで遡った。彼がそこで可愛い娘を見つけると、その子が言った：

「おじさんどこから来たの？」

男は答えなかった。娘はもう一度尋ねたが男は何も言わずに娘の横に座った。

その美しい娘が男の膝に頭を預けたので、彼は娘の頭の中を注意深く探して一本の赤い髪の毛を見つけた。男はそれを引き抜いて逃げ出した。娘は彼を追いかけて来た。娘は男よりも足が速く、男は娘に追いつかれそうになった時、ハンカチを地面に投げた。娘はそれまでハンカチを見たことがなかったので、それを見ようと立ち止まり、男はその隙に逃げ続けた。

娘はハンカチを見終わって男を追い続けた。娘がまた追いつきそうになったので、男がサンゴを取り出して投げ捨てると、娘はサンゴを初めて見たので調べるために立ち止まった。

すぐまた娘は男を追い続け、男はもう少しで追いつかれそうになった時に鏡を地面に投げた。娘はそれが何なのかを見るために立ち止まり、鏡の中の自分に見惚れ始めた。男は止まらずに走り続けてようやく町に着いた。彼は家に戻ってから妻に起こったことをすべて話した。

翌朝、男は町に向かった。彼はバザールに行って叫び始めた：

「赤い髪の毛いらんかね、赤い髪の毛いらんかね」。

二、三分後にひとりの男がやって来て言った：
「その赤い髪の毛を一スーで売ってくれないか」。

男は言った：

「安すぎるね」。

他の男がやって来て言った：

「俺は二倍の二スー出そう。

－ 安すぎるよ」。

そのうちに他の買い手もやって来て叫び始めた：

「俺は三スー出す。

－ 僕なら四スー払うよ。

－ わしは五スーで買うぞ。

－ それでも安すぎるね」。

こんな風買い手が上げていくとある男が言った：

「二十スー払うぞ」。〔フランスの貨幣単位であるスーは二十分の一リーヴルに相当する。一七九五
年にリーヴルがフランに等価で移行されたので二十スーは一フランに該当す
る。当時のフランの物価を表す指標として、公務員の平均年収が約千二百フランという資料が散見されるため、日
本の公務員平均年収（六百五十万）を当てはめると、この物語における一フランは大体五千五百円ぐらいであろう〕

競り値はどんどん上がり、群衆もたくさん集まってきた。
赤い髪の毛の値段は上がり続け、ついには王がやって来て
言った：

「一万フラン払おう」。

男はその価格で承諾して家に戻った。

その日以来、男は金持ちになり子供たちのすべてを養う
ことができるようになった。

王は赤い髪の毛を王宮に持ち帰った。彼が髪の毛を長さ
に沿って切ると、その中に文字が書かれていた。そこには
開闢以来の重要な事物が語られていた。王はその不思議な
髪の毛に一万フラン支払ったことを決して後悔しなかった。

17. 山賊のジャン

昔々、男とその妻がいた。彼らにはシルヴィヌという娘がいた。彼らはとても辺鄙なところに住んでいたの、必要なものを買うに行くのは半年に一度だった。その頃は今のようにはトラックなどなかったからだ。彼らは町に降りて行くのに二日かかり、その時はシルヴィヌを叔母の家に預けていた。

当時、山賊のジャンという、四人の泥棒仲間を従えた盗賊がいた。ある日、件の夫婦が町に降りて行く日になって妻が夫に言った：

「シルヴィヌを叔母さんの家に預ける訳にはいかないわ。もし家を留守にしたら、あの泥棒たちがやって来て、家に押し入って荒らすかも知れないから。私は彼女の従妹に、ここに来てもらってあの子と一緒にいるように頼むことにするわ」。

彼らは色々準備をして翌日町に降りて行った。あとに残されたシルヴィヌは家事を終え、食事の用意をしてから従妹を迎えに行った。山賊のジャンがその間に裏門から入ってベッドの下に隠れていた。シルヴィヌは従妹を連れて来て彼女らは食事をした。食事が終わると従妹が尋ねた：

「シルヴィヌ、バケツはどこにあるの？

－ バケツはベッドの下にあるわ」。

従妹はバケツを探しに行ったが男の脚にぶつかった。彼女は思った：

『シルヴィヌは誰かと一緒にいて私を怖がらせようとして
いるんだわ』。

そこで彼女はシルヴィヌに言った：

「私、部屋着を忘れてきちゃった。あんたの服を貸してく
れない？」

－ だめよ。

－ それじゃ家まで取りにいくわ』。

哀れなシルヴィヌは従妹と一緒に彼女の家まで行った。

すると従妹が彼女の母親に言った：

「ママ、シルヴィヌったら私を怖がらせようとするの。誰
かがベッドの下に隠れているみたい」。

シルヴィヌは従妹が母親に告げたことを聞いてはいなか
った。従妹の母親がシルヴィヌに言った：

「あんたの従妹は一緒に行かないって言ってるよ」。

哀れなシルヴィヌは泣き始めたが、結局はひとりで家に
戻るしかなかった。

その間に山賊のジャンはベッドの下から出ていた。彼は
家の外で隠れていた。シルヴィヌが戻って門を閉める時、
山賊のジャンは門に挟まれてしまった。シルヴィヌが大き
なナイフを出してきて彼の片手を切り落とした。山賊のジ
ャンは泣き叫びながら逃げた。シルヴィヌはママとパパが
帰ってきた時に起こったことをすべて話した。

十年後その場所に、片手が金でできている美しい青年が
やって来た。みんなはこう噂した：

「あの若者は金持ちで、結婚する娘を探しに来たんだろう」。

シルヴィヌのママが彼女に言った：

「みんな言ってるけど、あの若者はお前には結婚を申し込まないだろうって。

ー ママ、あの男は私が片手を切り落とした山賊のジャンに間違いないわ。あんな男と結婚なんかするもんですか」。

ところがある日、その若者がシルヴィヌに結婚を申し込んだ。しかし彼女は断った。そこでシルヴィヌのママは毎日彼女と言い争いをした：

「いいこと、あの若者と結婚しなさい。彼は金持ちなのよ。結婚しなさい。私が言ってるのよ」。

シルヴィヌは最後には受け入れた。

婚礼の日は大宴会が催された。宴が終わったあとみんなは田舎に向かった。その道中で山賊のジャンはシルヴィヌに言った：

「お前は俺の片手を切り落としたから、今度は俺がお前を殺してやる」。

哀れなシルヴィヌは泣き始めた。

目的地に着くとシルヴィヌは牢獄に入れられた。ジャンはその鍵を部下に渡して扉を開けないように命じた。山賊のジャンが出かけると、その部下は扉を開けてシルヴィヌに言った：

「行っていいぞ。彼に見つからないようにしろ」。

シルヴィヌは名付け親の家の階上に隠れ住んだ。しかしジャンが探し当ててやって来ると名付け親は言った：

「その娘はもういない。行ってしまった」。

そこでジャンは思案した。

ジャンは菓子売りの振りをすることにした。彼はヌガーを作って籠に入れた。シルヴィヌが姿を見せた時、彼は声を上げ始めた：

「おいしいヌガーはいらんかね、とても甘くて美味しいよ」。

シルヴィヌは彼を見たが名付け親が彼女にヌガーを買わないように身振りで教えた。シルヴィヌはジャンに言った：「お金を取りに行ってくるわ」。

そして彼女は戻って来なかった。

また別の時にジャンは聖アントニウス〔三世紀半ばにエジプトで生まれた聖人。修道生活の最初の実践者とされ多くの芸術作品の題材となった。記念日は一月十七日〕の像を買った。彼はそれを持って部下と共に名付け親のところに戻って来た。シルヴィヌを見かけると彼は声をかけた：

「お嬢さん、この聖アントニウスの像を買わないかい。安いアントニウス像だよ」。

シルヴィヌはそれを買った。

彼女はそれを部屋の高いところに置いた。そして祈り始めた。名付け親が帰って来てシルヴィヌに会うために階上に上ると、彼女は祈りながら泣いていた。その時、名付け親は像が動くのを見た。彼は何も言わずに階下に降り、弓矢と拳銃を持って来て山賊のジャンを射殺した。哀れなシルヴィヌはやっと解放されたのだった。

18. 長靴をはいた猫

昔々、男がいて彼には三人の息子がいた。彼が死んだ時、それぞれの息子はパパが遺したものを分けた。長男は水車を、次男は口バを、三男のジャンは猫をもらった。

二人の兄は自分たちがもらったものに満足したが、ジャンは悲しくなって思った：

『兄さんたちはもらったもので暮らしていけるけれど、僕はせいぜい猫の肉を食べてから、その皮で上着を作ることぐらいしかできないだろうな』。

ジャンがそう思っていると、猫がやって来て言った：

「ご主人様、心配することはありません。僕にできることがあります。袋と長靴一足を下さい。それであなたが一番の遺産をもらったと分かるでしょう」。

ジャンは猫がそれを使って何ができるのかを想像しようとした。ジャンは猫が色々と芸当をするのを今まで見てきたのでとにかく袋と長靴一足を与えた。すると猫が言った：「ご主人様、心配ありませんよ」。

猫の様子は見ものだった。長靴は彼の足の七倍も大きかったからだ。ジャンは死ぬほど笑って言った：

「まったくお前は漫画みたいだよ！」。

猫は去った。

猫は森の中に着くと、袋を出して首の回りにつけ、その中にニンジンの葉をどっさり入れた。それから地面に寝そべって死んだふりをして、袋の紐を手で掴んだ。しばらくしてから大きなウサギがやって来た。ウサギはニンジンの

葉を見て大喜びし、袋に走り寄って食べ始めた。猫は袋の紐を締めてウサギを捕まえ絞め殺した。猫は満足して王様に進上するために、それを王宮まで持って行った。

兵士が猫を王様のところまで連れて行くと、猫は頭を低く下げて言った：

「陛下、私の主人であるカラバス^[ヒョウタシンの意]侯爵が、このウサギを献上するよう私を遣わしました」。

猫はジャンのことをカラバス侯爵と呼ぶのが好きだった。王様は大層満足して猫に言った：

「主人のところに行って、わしが喜んでおると伝えよ」。

猫は思った：

『よしうまく行ったぞ』。

そこでもう一度、今度はウサギの代わりにウズラを二羽捕まえて同じようにそれを王様のところを持って行くと、王様はさらに満足した。その後も猫は何回か色々な動物を捕まえては王様のところに行き、カラバス侯爵からの献上品だと話した。ジャン自身はこれらのことを何も知らなかった。

ある日猫は、王様と世にも稀な美女と言われているその娘が川べりを散策しに行くことを知り、ジャンに言った：

「ご主人様、僕の言うことを聞いたらひと儲けできますよ。あなたは水浴びするために川に行って、そこにしばらく浸かっていて下さい」。

ジャンは猫がそのように言った理由を尋ねることなく了承した。ジャンが水を浴びている間に王様の一行が通りがけると、猫はありったけの大きな声で叫び始めた：

「助けて、助けて！ カラバス侯爵が溺れている！」。

王様が声を聞いてその方向を見ると、よく知っている猫がいた。王様はすぐに兵士たちを遣わして侯爵を川から引き上げさせた。猫はすぐさま王様のところに走り寄って言った：

「陛下、私の主人が水浴びをしている間に、泥棒たちが衣服を盗んで逃げてしまいました。彼にはもう、岩の下に隠した下着しかありません」。

そこで王様は侯爵に与えるために、自分の一番大きな替え着を取りに行かせた。

言うまでもなく、ジャンが王様の替え着をまとった時、王子よりも立派になり、王女は彼のことを好きになった。そこで王様はジャンを散策に誘った。猫は王様たちよりもかなり前を歩いていて、猫は大勢の人が麦を刈っている広い畑に着くと彼らに言った：

「王様を通った時、この麦畑は誰のものかと尋ねたら、カラバス侯爵のものだと言うんだよ。もしそうしなければ、あとで痛い目に遭うからな」。

そして猫はさらに道を進んだ。

ほどなく王様の一行が通りがかり、王様が男たちに、この麦畑は誰のものかを尋ねるとみんなが答えた：

「カラバス侯爵様のものでございます」。

その少し先では広い畑で大勢がトウモロコシを収穫していた。猫は彼らに言った：

「王様が通られて、このトウモロコシ畑は誰のものかを尋ねたら、カラバス侯爵のものだと言ってくれ」。

先ほどと同じく、王様が通りかると彼らはそのトウモロコシ畑がカラバス侯爵のものだと声を揃えて言った。王様はいたく満足して思った：

『このカラバス侯爵という男は何と多くの領地を持っているのだろう』。

王様は道をさらに進んだ。猫はいつもその先を行っており、最後にある城に着いた。猫が予め知り得ていた情報によると、その美しい城には鬼が住んでいた。猫が鬼に話があるとすると、鬼は猫に入って座るよう言い、猫が尋ねた：「妖精さん、ご主人様が言われるには、あなたはどんな動物にでも変身できるとか。ライオンとか象とか、あるいは他のどんな動物にでも」。

鬼は答えた：

「その通りだ」。

すぐさま猫の目の前に大きなライオンが現れた。猫は恐怖の余り天井まで駆け上がったが、床に落ちそうになった。彼の長靴が固すぎて天井を掴めなかったからだ。鬼が元の姿に戻ったので猫は降りてきて言った：

「みんなはあなたがどんな小さな動物にでも変身できると言ってるのだけど。トカゲとかネズミとか。でも僕にはそれは無理だと思うよ。

－ 無理だって？ それなら見せてやる」。

その瞬間、猫はネズミが自分の目の前を走り抜けるのを見た。言うまでもなく、猫は鬼がネズミに変身するのをずっと待っていて、彼は素早くネズミに飛びかかって食べてしまった。

ちょうどその時、王様の一行が城の前に着いて入ろうとするところだった。猫は外に走り出て王様に言った：

「ようこそいらっしゃいました。カラバス侯爵様の城へ。
— 何と！ このような城を持つとは、侯爵というよりもむしろ王子ではないか？」。

みんなが城に入って座り、テーブルには既に食事が用意されていた。みんながテーブルに着くと王様が侯爵に、王女が彼のことをとても気に入ったようなので彼女と結婚するよう頼んだ。そして結婚式はその日のうちに行われた。

ジャンは美しい城と莫大な領地を手に入れ、彼はそこに王女と共に死ぬまで暮らした。猫も重要な地位を与えられ、侯爵は彼のことをイギリス人のように「特別顧問」(Special Adviser)と呼んだ。

19. 《十八池》の人魚

アンヌ・シェネ

今から語る物語は島の南の方で生まれたものだ。私がそれを選んだのは、物語の舞台がこの私の家からそう遠くないところだからだ。

その物語はこの辺の多くの年寄りたちがそれぞれのやり方で語っていて、私には自分のバージョンがある。それをみんなに語る前に、年寄りの語り手たちが昔から使っている幾つかの名前について、みんなと一緒に復習したい。というか、それを知らない人には是非知ってほしい。

幾つかの名前は若い語り手にも知られているが、それほど知られていないものもある。だから、それらを思い起こして伝えることで、消えてしまわないようにしたいという訳だ。

みんながグラン・ボワ^[レユニオン島南部サン＝ピエール市の東にある海に面した地区]の村を知っているかどうか。でもすぐにわかるよ。ここからすぐ近くのところだし。車で五分だ。

実は私はグラン・ボワに長い間住んでいたんだ。私の大好きなところだよ。第一に綺麗だし、それにレユニオンの遺産として大事な場所なんだ。そこは歴史に彩られた場所で、その歴史とは特に製糖工場にまつわるものだ。今はもう工場はないけれど、それがあった頃は正にグラン・ボワの心臓だった。住人たちはその工場のことを尊敬の念を

込めて、それに、多分愛情も込めて《老婦人》と呼んでいた。[工場 usine が女性名詞のため]

《老婦人》が息を引き取ったのは一九九一年だった。そして代わりにメディアテーク[様々な媒体の資料を提供する公共の資料館]が建てられた。その場所の文化的使命や記憶を保存するためには優れた方法ではある。ただし今に至るまで、その不幸なメディアテークは五年もかけて造られたのだけれど、まだオープンしていない。余談だけどね。

《老婦人》だけがグラン・ボワの宝じゃない。その上の方には《カフリンの小屋》[製糖工場の労働者用住居跡]もあるし、それは契約労働者のことを思い起こさせる。それに私の家のすぐ近く、本当にすぐそこなんだけれど、車で二分のところに《十八池》と呼ばれる場所がある。そこは素敵なところで、植物が生い茂っているし、多くの鳥たち、特に断崖に巣を作るネッタイチョウ[熱帯の海域に生息する鳥類。Phaethon aethereus]がいる。それに、上から、つまり池を見下ろす橋から見ると、とても美しい。

この池の色は単彩の青色で、空の青から始まって、ターコイズブルー、海の青、深い青までである。おまけに底が無いような印象を与える。この池には底がないというのは、そもそも本当のようだ。海につながっているからだ。私はそんなに詳しくはないけどね。

いずれにしても《十八池》は本当にとても美しい場所だ。それに神秘的でもある。その名前だって最初から《十八池》と呼ばれている。ところでなぜ「十八」なんだ？ 長い間この数字は私にとって謎だった。最初私が信じていたのは、

それが何かの距離の標識かそんな感じだと。そして、とうとうこの呼び名の理由を知ることができた。

実は当時、この池にはムール貝と牡蠣、かなり小さかったけれどもとても美味しい牡蠣がたくさんいた。それがこの場所につけられた名前だった。「牡蠣の池」, 「小さな牡蠣の池」がクレオール語では「ティ・ズイットゥ池」となる。これが時の経つにつれて発音が変化して「十八池」になったということだ⁸。【牡蠣】des huîtres が似た音の「十」⁸ dix huit に変化したという説。ちょっとした歴史があるんだよ。

みんなに言ったように、私はグラン・ボワに長い間住んでいて、時々というか、よくその池を見にいった。ある晩、池を見下ろす橋の横にある石垣に座っていた。ほとんど真夜中だった。回りにはもう漁師も散歩する人も誰もいなかった。私はひとりきりだった。すると突然、歌声が聞こえてきた。とてもきれいで少し懐かしい声。それを再現できるかどうかわからないけど、こんな感じだった：

♪ 私の愛しい人魚、君を生涯愛するよ
君は真昼の僕の太陽、君は真夜中の僕の太陽 ♪

みんなに言ったように回りには誰もいなかった。じゃあ、その声はどこから来たのだろうか？ それにその声、その声は確かに人間のものじゃなかった。水底から上がってきたみたいだった。

♪ 君が光の中で踊るとき、目は緑で、髪は火山の火の色、僕は大洋に潜って君に言い続けたい、私の愛する人、美しい人魚の君 ♪

私は気が動転して家に戻った。しかし私は目を閉じることができなかった。一晩中、またその後も、毎日そのメロディーが私の頭の中で繰り返されていた。私はそれについて誰にも話せなかった。頭がおかしくなったと言われるのが関の山。でも私は夢ではなかったと確信している。確かにその歌を聞いたのだから。

とても長い間そのことが私から離れなかった。ところがその後、それほど経たないで、ちょうど二〇一二年にこの件についてとうとう真相を知った。それは友人のひとりが私に語ってくれた物語のおかげだ。彼女自身もその物語は祖母から受け継いだもので、その老婆はテール・サントウ^{レユニオン}南^部サン=ピエール市の南にある海に面した地区。「聖地」の意]の人で、名前はルイザ・ジョロンという。みんながそうしているように、私も彼女のことを「ザザ婆さん」と呼ぶことにする。というわけで、今日はザザ婆さんに敬意を表して『《十八池》の人魚』という話をみんなに語ろう。

クラケ！^{【クレオール民話の口演で用いられる語り手と聴衆の間の「応答」の一種。多くの場合、口演の最初と最後や場面転換の提示、聴き手への様々な喚起など幾つかの機能がある。最もよく使われるのがこの「kriké」と「kraké」の対で、マウスのclickと同種の擬音語である。双方の第一音節の母音〔i〕〔a〕は共に非円唇前舌音であり、開口の程度が「狭／広」で異なることから、明らかに音象徴と関わりがある。】}

（聴衆）クラケ！

そのグラン・ボワの近くに人魚のカップルが暮らしていた。男と女だ。彼らは《十八池》の岸にある洞窟に住んでいた。ところで物語を続ける前に、みんなが人魚のことをちゃんと知っているかどうか確かめておきたい。みんなは人魚ってどういうものか知ってるかい？ 身体は女で、魚の長い尻尾と、同じく女の頭がある。しかし知っておかなくてはいけないのが、多くの人には知らないのだけれど、人魚には二種類あるということだ。男と女だ。そしてそれらはまったく似ていない。女の方は髪があり、男の方は髪がない。逆に男の方は頑丈で小さな口髭を生やしている。みんなにこういう違いを教えたのは、ちゃんと区別ができるためだ。それに人魚にさらわれた時、どっちを相手にしているのかわかるためだ。

というわけで、《十八池》の近くの洞窟の中に人魚のカップルがいた。どうやってそこまで来たのか、私はまったく知らない。インド洋で生まれたのか？ フランスや日本からの船についてきたのか？ あるいは真夜中の太陽の国から？ 私は知らない。要は彼らがそこにいたということだ。

人魚の夫婦はとても大人しかった。誰のことも困らせなかった。彼らは余りにも静かだったので、村の人々は彼らが存在することなど思いもよらなかった。

ある満月の夜に、漁師たちが海上で踊っているリボンのような二つの形を見つけた。彼らはそれを月の影だと思っていた。時々彼らは波の底で歌も聞いた。彼らは『あれは風だ、海の上を流れる風だ』と思っていた。



そう、人魚の夫婦は本当に優しくかった。それに彼らは実に穏やかだった。それに彼らはとても愛し合っていた。言っておかなくてはいけないが、人魚の奥さんはとても綺麗な大きな緑の目をしていて、赤い髪は長く、波の中で踊る時にはその柔らかな尻尾を優雅に振るのだった。その様はとても素晴らしかった。

♪ 君が光の中で踊るとき、目は緑で、髪は火山の火の色、僕は大洋に潜って君に言い続けたい、私の愛する人、美しい人魚の君 ♪

ある日、大きなサイクロンがレユニオンを襲った。雨による大洪水、時速三百キロの突風、それに高波だ。大きな波がやって来て断崖にぶち当たり、あちらこちらに押し寄せた。それが一昼夜続いてから天気は回復した。

サイクロンのあと、レユニオンの住人はいつものように被害の大きさを確かめてから、気丈に仕事に戻るのだった。農園主は自分の土地に帰り、行商人は籠を取り、ションブリ【頭に物を載せる時に使うぼろ布
や藁で作った網敷様の被り物】を編む。漁師たちはまた小舟に乗り込む。そうするしかなかった。その頃は自然災害についての保険も補償もなかったからだ。

ちょっと余談になってしまったね。回り道したけれどお話に戻ろう。耳をよく澄ませてお話についてくるように。私のお話は方向を変えるから。舞台はグラン・ボワを離れてテール・サントゥに移ることになる。海に面したテール・サントゥだ。

朝の五時だった。灰色の夜明けが水平線をぼんやりと染め始めている。二人の漁師、ギュスタンとファノがボートを海岸に引き上げた。突然彼らは少し離れたところで、海岸に横たわる黒っぽい影を見つけた。それは動いていた。尻尾で砂を打っている大きな魚のようだった。漁師たちは近づいた。それは確かに打ち上げられた魚だった。あちこちに擦り傷があったがまだ生きていた。ファノが言った：

「ナメラピラメ^[ヒラメの一種・*Scophthalmus rhombus*]みたいだな、大きいやつだ。

— いや、そいつはナメラピラメじゃないぞ。頭をよく見てみろ。人間の頭みたいだ。こいつは間違いなく人魚だよ、男の。

— いずれにしてもこいつはタフだな。輪切りにしてメカジキと言って売っちゃおう。

— 待った、いい考えがある。お前の軽トラを持ってきて、俺たちの掘り出し物を国立公園の博物館に持って行こう。こんな珍しいものだったら結構な金になるぞ。それに俺たちのことが噂になって有名になるぞ」。

二人の漁師はその人魚を国立公園の博物館まで運んで、はした金をポケットに入れた。新聞記者たちが彼らを取材し、何週間かの間、島では彼らの話題で持ちきりだった。

ところで、誰も気づかなかっただが（どうやって知ることができたらう？）、《十八池》の近くの洞窟の中では、美しい人魚が昼も夜も涙にくれていた。彼女は時折穴から出てきて歌った。人魚は悲しい時でも歌うからだ。

♪ あなた、私の愛する人、私はあなたを生涯愛する、あなたはどこにいるの？ 毎日私はあなたが戻ってくるのを待っている ♪

ある日の午後、彼女がいつものように洞窟の前でじっと海を見ていると、断崖の上の方から人間たちが話しているのが聞こえた：

「あのテール・サントウの二人の漁師はラッキーだったな。あいつらが見つけた大きな雄の人魚で結構稼いだんだから。ファノは新しい軽トラを買ったようだぜ。

－ あいつらが見つけた時、その魚はまだ生きてたって話らしいぜ。

－ どうせ今は死んじゃってる。あそこの博物館で腹に藁を詰めて展示している。毎日それを見るのに何百人も列に並んでるとい話だ」。

想像してみて、みんな。女の人魚の絶望を想像してみて。彼女は泣き始め、泣いて泣いて、余りに泣いたので海面が上がってしまい、《十八池》が道や辺り全部にまで溢れたと言われている。

涙が涸れた時、彼女には怒りが湧いてきた。彼女は大洋の底まで潜って魚の女王マミアータに会った。マミアータはみんなが知っての通り魔女でもあった：

「あいつらは私の愛する人を殺しました。アミアータ、奴らは彼を売ったのです。藁を詰めて博物館に飾るために。何とかして、マミアータ。復讐しなかったら終わりのない悪夢を生きるだけ。助けて、マミアータ。

－ わかった、我が子よ。しかるべきことをしよう」。

マミアータはしばらく座を外し、魔法の薬を調合して戻って来た：

「ほら、この飲物はお前に男たちを支配する力を与えるだろう。ひと飲みする度にお前は人間の女に変身して、どんな男もお前に抗うことができなくなる。老いも若きも、婚約者も、誠実な愛人も、申し分のない夫も、すべての男がお前の魅力の前にひれ伏すだろう。彼らの目を見つめるだけで、お前が連れて行くところにつき従っていこう。

－ 有難う、マミアータ、有難う。

－ 最後にひとつ言っておく。この魔法の飲物は満月の時にしか効かず、効果は夜の八時から真夜中までの四時間だ。真夜中を過ぎるとお前は魚の姿に戻る。だから注意するように。

－ 心配ないわ、マミアータ。ちゃんと使えるから」。

人魚は去った。彼女の心には怒りと苦しみが満ちていた：『テール・サントウの奴ら、お前たちは私の夫を殺した。彼を売った、彼に薬を詰めた。ああ、呪われた者ども、その報いを受けるのよ』。

満月の夜、人魚は飲物をひと口飲んでテール・サントウまで泳いだ。彼女は水底で待ち、自分の身体が変身したことを感じると水面に浮かび上がった。そこでは大きなバンヤン【主に熱帯に分布するイチジク属の樹木。Ficus benghalensis】の下にある栈橋の近くに数人の村人が涼んでいた。女たちはおしゃべりをしながら編み物をしたり、フジ豆【熱帯に分布する食用のマメ科植物。Lablab purpureus】の莢を剥いたりしていた。男たちはカードやドミノで遊んでいた：

「ダブル・シックスだ〔二十八枚一組のカードを使うドミノでは最大の数を持つカード(6-6)〕。

ー 白でつなぐと〔最小値(0-0)のカードをつなげること〕... あれ誰だ？ あの女」。

そこの道をひとりの女が歩いていた。夜の波間のように輝く長いドレスを着た背の高い女性だった。彼女はとても華奢な体つきをして、美しい胸は形がよく、髪は長く燃えるようだった。

「どこから来たんだろう？

ー とにかくここら辺の者じゃないな」。

女は進み続け、ドミノをしていた男たちの近くで歩みを止め、マクシムという名の年取った八百屋の前に立った。彼は本当に爺さんだった。歯が全部抜け落ちて、杖をついて歩いていた。そして、みんな、多分信じられないだろうけど、女の緑の目が彼に注がれると、マクシムはドミノ牌を放り出し杖まで忘れて見知らぬ女のあとにつき従った。

彼女は軽い足取りで歩いた。老人はウサギのように小走りで彼女についていった。二人は揃ってアポール川〔サン=ビエールとテール・サントツの間を海に流れ込む川〕の方に向かった。この光景を目の当たりにした人々は驚いた。むしろ彼らは恐怖を抱いていた。ほとんどの人は慌てて持ち物をかき集めて急いで家に戻った。

しかし人々の中にエルヴェとかいう男がいた。彼は他の人より少しばかり好奇心が強く、大胆だただけの話だけれど。彼は二人をアポール川まで追って行った。そして、みんな、彼はそこでさらに超現実的な光景に出くわした。女は川の真ん中にある岩に乗り、品しなを作りながら歌い踊っていたのだ。マクシムは腰まで水に浸かり、流れに抗いながら彼女のところまで辿り着こうとしていた：

「あなたに触れさせて下さい！ あなたの足指にだけでも触らせて下さい。せめてあなたのドレスの裾に... 後生ですから」。

その夜がどのように終わったのか私は知らない。彼女について行った当のエルヴェでさえ語ることはできなかった。というのも、彼は夜の十一時半頃にとてつもない睡魔に襲われたからだ。彼が目を覚ましたのは翌日の朝だった。彼が目を開けた時には誰もいなかった。女も八百屋も。

人々はあちらこちらを探しまくり、警察も徹底的に捜索を行ったがマクスムは消えてしまった。彼の身体も魂も。そしてそれは続いた。満月のたびに見知らぬ女がやってきては男をさらっていった。

人々は不安の中で暮らした、特に満月の時には。みんなは、家に閉じこもって、特に男は外に出なければいいと言うだろう。ところが、ちょうど満月の日になると、熱病みたいなものが男たちの間に蔓延したのだった。外の空気を吸いたい、という抗うことのできない渴望が。彼らの妻や母親たちは男たちを何とかして引き止めようとしたが、彼らは外に出てしまうのだった。彼らはバンヤンの樹の下に危険を冒しに行ってしまうのだった。こんな風にして、既に十人が消えてしまい、誰も彼らがどこに行ってしまったのかわからなかった。

ある日のこと、見知らぬ女はラファエルという若者に視線を向けた。彼はテール・サントウで一番の男前で、優しい若者だった。すべての娘たちが夜になると彼のことを夢に見ていた。大きな緑の目が注がれると、彼は他の男たち

と同じく魔法にかけられ美しい女について行った。ところが魅了されたのはラファエルではなかった。人魚も男前の若者の魅力に囚われてしまった。彼女の心の中にあつた苦悩や痛みがすべて消え去つたのだ。彼女は再び愛せるようになっていた。

彼らは触れ合い、口づけを交わし、将来を誓い合い、腕を絡めて眠りに落ちた。彼らには真夜中の十二時を告げる教会の鐘さえ聞こえなかった。その後どうなったか、みんなにはわかるよね...

翌日、人々はアポール川の土手の上で奇妙な光景を眺めていた。美しい人魚のそばで草叢の中に横になり、燃えるような流れる髪を毛布代わりに、小柄なラファエルが天使のように眠っていたのだった。

ここでまた、みんなに物語の続きをはっきりとは言えないかも知れない。というのも、私の近所の老人たちはその点について、みんなが一致しているわけじゃないからだ。

ある者が言うには、人魚は彼女の夫と同じ運命を辿つたと言っている。つまり、博物館に連れて行かれてそこで夫と再び一緒になったと。他の者は、彼女が最後には焼き肉かカレーになったと言っている。結局は同じようなことだけれどね。

しかしザザ婆さんが語っていた内容は、－それにザザ婆さんは嘘をついたことが一度もない－、人魚は助かった。男たちが縄とナイフを持ってやって来た時に、ラファエルが道で彼らを阻んだのだ：

「だめだ、だめだ、私の愛する人を殺すな。まずは僕が相手になるぞ」。

若者は人魚を優しく腕に抱いた。彼は大洋まで彼女を運んだが、そこはタナンボ^{テール・サントウ}_{の南東にある地域}だった。彼は人魚を波の中に優しく置いた。人魚はもう遠くにいた。昇る朝日の中で揺れる輝くりボンのようだった：

「待って、待ってくれ、愛する人、僕を連れて行ってくれ」。

ラファエルは両腕を人魚の方に差し伸べて波の中に入ろうと身を屈めた。人魚は答えた：

「だめ、ラファエル。そんなことやめて。あなたを愛しすぎたわ。やめて。あなたは陸の子なの、あなたは人魚の国では生きていけないのよ。さようなら。愛する人」。

そして人魚は泡の大きな束の中に姿を消した。

ラファエルはひとり身で生涯を終えたと言われている。

20. 老いた魔法使い

アンヌ・シェネ

クリケ！

(聴衆) クラケ

パレ？ 【語り手が聴き手に「聴く準備ができていないか」と尋ねる問いかけ。クレオール語に
よく見られる語頭音節の母音消失である：「préparé」(準備できた) → 「paré」】

パレ、パ・パレ？ 【「準備ができたか」
「できていないか」】

(聴衆) パレ！ 【「準備がで
きている」】

今から話すのは私の息子に起こった出来事だ。息子は山のガイドだった。名前はルノード。

ある日、彼はひとりでいわゆる地質調査に出発したが、奇妙な、本当にとても奇妙な発見をした。その時、彼がどこにいたのかは知らない。そもそも彼自身もそれがどこだったのか言えた試しがなかった。とにかく彼は何日もの間歩いて、山の真ん中のとんでもなく辺鄙な場所に着いた。

そこは危険な場所で、道がまったくなかった。そこまで彼が辿って来た道は、ほとんど垂直の大きな崖の下で突然途切れていた。しかし彼は熟練したロッククライマーだったので、そこから岩を登り始めて、てっぺんまで達することができた。ところが彼にわかったのは、その反対側はさらにもっともっと危険なところだということだった。

道らしいものも取っ掛かりもまったくなくて、あるのは大きな泡を立てて水が流れている峡谷にせり出した大きな岩だけだった。彼は思った：

『この先はもう無理だ。道を引き返した方がいいだろう』。

ところがその瞬間、彼の両足の下で岩が消えた。彼はバランスを失って虚空に落下した。彼は落ちて、落ちて... すると突然、奇跡が起こった。落下がとまって、彼はヴェティヴェール^[英語ではペチパー。イネ科の多年生草本で根茎から精油を抽出する。特徴的な深い香りは様々な香料のベースとして利用されている。Chrysopogon zizanioides]の茂みの真ん中にふわりと仰向けになっていた。彼は起き上がって辺りを窺った。本当に奇跡だった。彼はどここも痛めなかった。

彼が回りを見渡してわかったのは、自分が大きな台地、植物に厚く蔽われた台地の上に落ちたということだった。シダ^{[レユニオンに生息するシダはいずれもヘゴ科]、ナンヨウキイチゴ^{[オーストラリア東部の熱帯雨林原産で東南アジアに分布する常緑性低木。Rubus moluccanus]、ツリウキソウ^{[南アメリカ原産のアカバナ科の多年草低木。Fuchsia magellanica]、サウギク^{[湿気の多い場所に生息するキク科の多年草。Nemoseneo nikoensis]、イワナズナ^[アブラナ科の小灌木。Aurinia saxatilis]}などレユニオンのすべての野生植物がその場所に集められたようだった。}}}

しかも、そこは静寂が支配していた。何も聞こえなかった。風の微かなそよぎすらなかった。鳥のさえずりもなかった。峡谷の唸りさえも聞こえなかった。ルノーが私に言ったことには、おとぎ話の中にでもいるような感じで、まるで『眠れる森の美女』の城の近くにいるような気分だったらしい。彼は思った：

『何とかしてここから出ないと...』。

彼は枝やもつれた蔓を苦労してかきわけながら進んだ。すると突然、ジャングルの草叢の真ん中に三つの像を見つけた。それは二人の男と一匹の犬で、三つの像は黒い石で

できていて、とても奇妙だった。それに、それらの像はまるで生きていけると言えるほど精巧に造られていた。

犬は大きな口を開けて、まるで嘔もうとしているかのように牙を剥いていた。二人の男は少し古いスタイルの服装をしていた。彼らは膝の高さまであるショートパンツを穿いて探検帽をかぶっていた。みんなは探検帽がどのようなのか知ってるかい？ 植民者のグロ・ブラン^[レユニオンの民族集団のひとつで欧州から植民者としてやって来た移民の子孫。白人の富裕層が多い]や探検家たちが暑さ避けに被っていたものだ。でも結局、グロ・ブランだけがそれを被っていたという訳じゃない。みんなが帽子を被ることができたんだ。奴隷にはその権利がなかったけど。私はグロ・ブランじゃなかったけれど、同類のしがないプティ・ブラン^[レユニオンの民族集団のひとつで元々の祖先は欧州からの移民であったが様々な理由から主に高地に居住してアフリカ系、インド系、中国系移民との混血化が進んだ]で、ちょっと想像してごらん、小さい頃は探検帽を被っていた。というのも、それは私が通っていた寄宿学校の制服だったんだ、真っ白のね。

二人の男は探検帽を被っていて、それぞれバッグと銃を持っていた。それらのすべても石でできていた。ルノーにはそれがとても奇妙だった。どうしてこの素晴らしい像が、こんな辺鄙な場所、クレオル語では「ガフルヌ^{ど 田 舎}」というようなところに作られたのだろうか？

彼は進み続け、少し行ったところで小さな家を見つけた。その小さな家は藁小屋に似ていて、私が子供の頃に住んでいたような切妻屋根の藁小屋だった。ただし、その藁小屋は藁作りではなくて石作りだったけど。好奇心と不安が相半ばしていたルノーは入った。そこで、おっと！ 彼は別の像に出くわした。また男だけれど、それは他の二人の

ようではなかった。彼はもっと上品な服装で、とにかく少しは現代風のスタイルだった。

彼は煙草色のズボンを穿いて、立襟のシャツを着て、尖った靴を履き、懐中時計をつけたチョッキを羽織り、帽子は被っていないかった。彼は挨拶をするかのように腕を伸ばしていた。言うまでもないが、ルノーには挨拶を返す気は毛頭なかった。

ルノーは家の中を調べ続けた。そこは本物の小屋だった。貧相な小屋ではあるが本物の小屋で、地面にはかまどがあった。その上には三脚鍋が置かれていた。かまどの前には小さな腰掛けがあった。その脇には如雨露と箒に似たものがあった。テーブル、二つの椅子、二つのカップに水差しもあった。食卓用具が置かれていて、さらには箕みがあってそこにありとあらゆる果物が入っていた。パイナップル、バナナ、ヴァヴァングマダガスカル原産のアカネ科の顕花植物。Vangueria madagascariensis等々。でもそれらを味わうのはかなり難しいだろう。だって全部石なんだから！

ルノーは観察を続けて、部屋の奥に大きなベッドを見つけた。もちろん石のベッドだ。もう詳しく説明する必要もないだろう。全部が石なんだから。ベッドの上には女性の像があった。太った女性で彼女は座っていた。頭に布を巻いて両目は大きく見開き口も開けていた。両の手のひらをこういう風に向いていた。

その後ろで壁に向かって、薄暗がりの中に光っている何か白いものが見えたが、女の太い像が、それが何かをはっきり見る邪魔になっていた。ルノーは近づき、よく見よう

とかがみ込んだ。ぎょっ！ 骸骨！ それは骸骨だった。おまけにそれは石でできていない本物の骸骨だった。大分前からそこにあるようで、骨が崩れかけて灰になるところだった。ルノーは本当に恐怖を感じ、慌ててどの道を通ったかもわからずに一気に突進し、日暮れ頃にオーレール村〔レユニオン西部の圓谷マファト北部に位置する隔離した村〕の近くに着いた。

彼は遇う人ごとに（と言ってもそこは人が多くないので数は少なかったが）、それに滅多に遇わない観光客や土地の住人に、自分の身に起こった出来事を語った。しかし人々は彼を嘲笑うだけだった：

「像だって、それに骸骨？ あんた完全にいかれてるよ！
— あんた、葉っぱのやり過ぎか、そうでなきゃ、お天道様に頭をやられたんだろう！」。

結局、誰も彼を信じなかった。

そこで窮余の一策として、彼はトニ爺さんに会いに行くことにした。トニ爺さんを知っているレユニオン人は多くない。私だって会ったことがないが、ルノーが語ったところによると、彼はピトン・カブリ〔レユニオン中央部の圓谷シラオスの南にある尖峰。カブリは「子山羊」の意〕の絶壁のどこかにある洞穴で生活していて絶対外に出ない。そのため人々が彼に会うことはない。おまけに彼はとても歳を取っている。間違いなくレユニオンの住人で最年長者だ。ちゃんと数えたら、彼は今じゃ百四十歳か百五十歳になっているに違いない。彼は隠遁生活を送っていて、トウモロコシと野生の蜜しか口にしない。みんなには一応これだけ話しておくよ。でも、いつかポセッション〔レユニオン西部の町。町の名前は一六四九年十一月十五日にフランスがルイ十四世の名において島を「所有」（ポセッション）することをこの地で宣言したことからつけられた〕の戸籍簿でトニ爺さんが

生きている証拠を探しに行つて、それを見つけれなくて
も私を恨まないように。だって物語が嘘でも...

(聴衆) あんたのせいじゃない。

[クレオル民話には「物語が嘘でも(それを語ったのは)
先人で)私のせいじゃない」という決まり文句がある]

そういう訳でルノーはトニ爺さんを見つけに行つた。運
よくご老体はまだ寝ていなかった。彼は洞窟の前で、星明
かりの下でお祈りをしているところだった。ルノーは彼に
像と骸骨の話をした。

「そうさな、お若いの。お前さんがおかしい訳じゃない。
お前が見たのはディアモの家じゃな。

ー ディアモって誰ですか、トニ爺さん? 話して下さい。

ー 話して進ぜよう、お若いの。にしても、まずは中に入
りなされ。外は寒くなってきたしう」。

彼らは家に入ってかまどの前に落ち着いた。

ところで素敵なみんなは寝てるのかな?

(聴衆) いや、寝てない。聴いてるよ!

トニ爺さんは椅子を引き出した:

「ここに座るがいい、お若いの。ゆっくりしてくれ」。

ルノーは小さな椅子に腰を下ろして待った。ところが彼
はひとりじゃなかった。穴の中には他にも多くの夜の住民
や山地の住民たちがいた。ヒキガエル、コオロギ、ミズナ

ギドリ〔原語テキストではレユニオン固有種
の fouké。Pseudobulweria aterrima〕, コウモリ, それに夜の蝶もいた。
みんなトニ爺さんの話を聴きに集まっていた。

老人は火を吹いて炎をかき立ててから話し始めた：

「この話はかなり前に遡るんじゃ、若い。だから大抵の人は忘れてしまとる。多分他の理由もあるだろうがな。だがわしは、この老いぼれた頭が時々悪さをしても、この話は決して忘れやしないし、どんなに些細な事だってお前に話せる」：

* * * * *

かの名高いディアモは奴隷だった。彼の主人は残酷だったので、彼はある日逃げ出した。逃亡奴隷になることに決めたのだ。それで彼は山地の方に走った。彼は速く走った。追っ手たちが既に追いかけてきたからだ。彼は走って、走って... 突然彼は道の真ん中に座っている老婆に出くわした。老婆が言った：

「お願いだ、足をくじいてしまったようだ。もう歩けやしない。家まで背負ってくれないかい？」。

ディアモは少し苛立ったが、彼は優しい男だった。彼は思った：

『仕方ない、少しだけ歩くのが遅くなっても仕方ない。この婆さんを夜中の山地にひとりで置いていけやしない』。

彼は老婆を肩に乗せ、彼女が指した方向に二人で出発した。道すがら彼は、自分が逃亡奴隷の身で、追っ手が多分既に迫っていることを彼女に説明した。老婆が言った：

「心配しなさんな、あんたが私、ママリアと一緒にいる限り、奴らはあんたに何もできないよ。何だったら私の小屋に住んでもいいよ」。

ディアモはそれを受け入れた。そして二人はママリアの家に着いた。老婆は火を起こして料理の支度を始めたが、その時突然外で音がした。ディアモは立ち上がってドアの穴から窺った：

「あいつらだ、追っ手の連中だ。ママリア、二人いる。犬も連れてくる」。

－ 動くんじゃないよ、ディアモ。私があいつらの相手をするから」。

追っ手が近づいて来て、銃を家の方向に向けた：

「穴から出てこい、猿め！ そこにいるのは分かっているんだぞ」。

－ ほら、ディアモ、休暇は終わりだ」。

ドアが開いたが、追っ手が待ち構えていた奴隷の代わりに、出てきたのは老婆だった：

「あんたらどうしたんだ？　なんでそんなに大きな声で叫んでいるんだい？

－ 俺たちは逃げた奴隷を探している。この辺にいることは分かっている」。

－ おやまあ、驚いた！　三十年間誰もここまで登ってきた試しがない。あんたらきっと疲れているだろう。入ったらどうだい？　何か一杯飲んで少し休んだらいい」。

歓迎する振りをしてママリアが二人の追っ手の肩に手を置くと、彼らはたちまち石像に変わった。そう、老婆はこんな力を持っていた。彼女は魔術師だった：

「出て来ていいよ、ディアモ。あいつらはもうお前に何もできやしない」。

しかし奴隷が姿を現すや否や、黒人に噛みつかせるために連れて来られた犬が彼に飛びかかった：

《ワン、ワン、ワン、ワン》。

そこでママリアが尻尾を掴んで《ボン》。今度は犬が石の塊になった。ディアモは驚いた：

「どうしてそんなことができるんだ、ママリア？

— あとで説明してあげるよ、坊や。とりあえず夕飯にしよう」。

そして何年も経った。ママリアとディアモは平和な生活を送った。彼らは母親と息子のようなものだったと言えるだろう。逃亡奴隷は多くの仕事で役に立った。薪を拾いに行き、水を荷車で運んだ。彼はサイクロンが通った時には小屋の修繕もした。結局のところ彼らは幸せだった。しかしながら永遠に生きる人間はおらず、年老いた魔術師も例外ではない。

ある日、ママリアは自分が疲れているを感じた。彼女はベッドに坐ってディアモを呼んだ：

「私はもうすぐ死ぬ、ディアモ。お前に私の力を伝えて、お前が自由に生き続けるようにする時が来た。来なさい。お前の両手を私の両手の上に置いて」。

ディアモは近づいて自分の両手をママリアの両手の上に置いた：

「今から私の力をお前に伝える。すぐにお前が触れるものはすべて石に変わる。しかし、それでお前に厄介なことが起こらないように、お前が石に変えたくないものが、元の姿を保ったり取り戻したりするためには、毎日夜明けに、この魔法の呪文を唱えなければならない。よくお聴き、ディアモ、これを覚えなさい...」。

何分か経ったが、彼の両手はママリアの両手の上に置かれたままだった。ディアモは待った、しかし年老いた魔術師は永遠に死んでしまい、彼女は石像になっていた。ディアモは大変困った。どうしたらいいのだろうか？ 彼はその力を持っているが、呪文は知らない。どうしよう？

彼は気が動転して家の中を走り回った。彼が触れたものすべて、机、椅子、腰掛、スプーン、皿、鍋、箸... すべてがあっという間に石に変わった。彼には唯一の解決方法があった。それは手を持たないようにするという事だった。それが彼のやったことだった。

彼は手を使わずに生きることを学んだ。彼は歯でもぎ取った果物や野生の植物を食べた。渴きを癒すために、川の水を動物のように直接飲んだ。肉が少しほしい時、哀れな男はヒキガエルやジャコウネズミに飛びかかって生のまま飲みこんだ。長い間彼はそうやって、孤独な動物のように誰にも遇わずに生きていた。

ところがサイクロンが襲来したある日、彼はドア口で呼ぶ声を聞いた。それはひとりの男で、明らかに町の間人だ

った。服はびしょびしょだったがとても上品に見えた。それに彼はきれいなフランス語を話した：

「私は迷ってしまいました。天気が回復するまでお世話になっていいですか？」

ディアモは彼を入らせた：

「あなたにあげる食べ物は何もありません、旦那さん。でもそのベッドですっと横になって休みたければどうぞ」。

男はベッドに近づいてママリアの像を眺めた：

「何という素晴らしい像だ！ ああ、本当に素晴らしい。庭にも他の像を見ましたよ。あなたが作ったのですか？ あなたは彫刻家なんですか？

－ ああ、旦那さん。それらの像を作ったのは私ですが、彫刻家ではありません。

－ 何ですと？ 最も偉大な芸術家と呼ぶにふさわしい傑作を作ったのに、あなたは彫刻家ではないとおっしゃる？

－ 旦那さん、私は彫刻家なんかではありません。

－ 彫刻家がどういうものかあなたはご存じで？

－ はい、何を意味するのか知っています。でも私は彫刻家ではありません。私は自分の意志とは裏腹に、これらの像を作ってしまったのです。

－ どういうことなのかまったくわからないのですが。

－ 私の話を聞けばおわかりになるでしょうが... 実際とても悲しい話です」。

そしてディアモは彼に起こった信じられない出来事を語り始めた。しかし彼が話し終えた時、その男はまったく悲しまなかった。むしろその正反対だった：

「いや、あなたが私に話したことは、とんでもなく素晴らしい。それはむしろ幸運だ！ 私はジェロームという名前でキャバレの経営者です。私と一緒に町まで来れば、あなたのその才能であつという間に大金を稼げるでしょう。受け合いますよ、ひと財産になります。その金で旅をして、旅行中にあなたをその呪いから自由にしてくれる偉大な魔法使いや賢人を見つけられるかも知れません。どう思いますか？」。

ディアモは言った：

「いいでしょう」。

天候が回復した時に二人は都に出立した。物事はジェロームが見込んだその通りに運んだ。二週間もしないうちに《魔法の老人》の評判は島を駆け巡った。キャバレは大入り満員だった。彼らはひと財産を儲けた。ところが、金の方は... 金はしばしば人々の心を腐らせる。今やジェロームは正気をなくすほど金を持ちすぎて、山分けにする気などさらさらなかった：

「聞いてくれ、ディアモ、あなたを取り敢えず山に戻すよ。私の方は財産を計算して、事業を整理してからあなたを連れに戻るから」。

しかし、彼らが小屋に着いた時、このろくでなしは自分で言ったことをご破算にした：

「旅行は諦めるべきだと思う、ディアモ。とにかくあなたは、私にとって厄介な重荷になるだろう。それに金は... こんな辺鄙な場所であなただが使えとは思えない。いずれにしても、何の役にも立たないだろうし。普通に飲んだり食

べたりもできないしね。だめだ、ぶっちゃけて言うと、一緒にやっていくのはもう無理だ。あなたが金を作れるとしても問題じゃない」。

彼の言葉はとてもひどかった。しかしながらディアモはまったく怒っていない様子だった：

「あなたの言うことはもっともだ、旦那さん。私は障碍のある老人に過ぎない。私には死ぬのを待つことしかない。金についてもその通りだ。私は何に使えるか。全部あなたにあげるよ」。

しかしもう片方はそれを信じられなかった：

「ディアモ、あなたは何と凛々しい男だろう。私はそんな出方を予想もしていなかった。正直言って、あなたはとんでもない人だ。私は今まであなたのような人に遇ったことがない」。

そして彼は熱狂のあまり注意すべきことを忘れていた：

「そう、あなたは本当に素敵な奴だ。どうか、握手をしてくれたまえ。恨みっこなしで」。

ディアモも彼が伸ばした手に触れながら言った：

「恨みっこなしで」。

こういう訳で盗人はあそこにまだ残っている。お前がドアの近くで見たのがその像だ。ディアモの方はとても長生きをした。しかし誰も不死じゃない。年老いた魔法使いでさえも。

ある夜ディアモはママリアの像の近くに横になり、そして二度と目覚めなかった。誰もディアモを煩わせに、彼の石の世界にまでは来なかった。草が至る所に生えてすべてを覆った。人々はこの場所のことを完全に忘れてしまった。ディアモのことも忘れた。彼の話は人々の記憶から消えてしまった。

彼について唯一残っている思い出が、若い、お前が見たこのひとつかみの骨と灰だ。しかし、お前はよくそれに触らなかった。そんなこと絶対分らないしな」。

これが「老いた魔法使い」という話で、私の息子のルノーが九歳の時に書いた短いお話が元になっている。彼はそれを書いた上に挿絵まで描いた。そのあとに私がこういう話にしたというわけだ。

21. キアセク

アンヌ・シェネ

この物語は大昔の出来事で、今ではもう消えてしまったあらゆる神秘的な存在がその頃はまだいた。あるいは、多分まだ存在しているけれども、人々がそれらを信じないので、彼らの方でも身を隠すことにしているのだろう。

その頃にはまだ、妖精、食人鬼、巨人、小悪魔などがいて、彼らはあちこちにいた。いつでも彼らに会うことができた、どこでも。そしてみんな知っているように、彼らの中には人間と同様、良い者と悪い者がいた。

ニュプシアはその頃に生きていた。彼女はとても可愛いお嬢さんだった。頑なに独身を通していた巨人のキアセクさえもが恋に落ちてしまうほど可愛かった。ところが娘は彼を受け入れようとはしなかった：

「あんたはタイプじゃないの、キアセク。自分のことを見た？ あんたにキスしようとしたらヤコブの梯子『旧約聖書』の創世記二八章一〇-一二節で族長ヤコブが見た夢に出てくる天国に登る梯子に登らなくちゃいけないし。ところで、いつもうちにやって来るのをやめてくれる？ 私のことは忘れてちょうだい」。

巨人は深く傷ついたが、門を乗り越える前に最後にニュプシアを見た：

「いいや、君のことは忘れない。それに君も僕のことを忘れることはない。君も、君の子孫も」。

そして彼はすぐに立ち去った。

しばらくしてニュプシアは、彼女の好みに合った、また自分に釣り合った、つまりは人間の大きさをした男と結婚した。彼らは男の子を儲けてレジノと名付けた。彼女はキアセクのことをすっかり忘れていた。

しかしある夜のこと、彼女が庭に坐って赤ん坊に乳を与えていると、大きな影が彼女の前に広がった。それは巨人だった。邪な目、もじゃもじゃの髭。彼は手に持った竹の棒で子供の頭を三回叩いた：

「アブラカダブラ、アブラカダブラ... 今日、誓ってお前にこれを為す、醜いちびネズミめ！」。

ニュプシアはまさに呆然とした。彼女の心臓は早鐘のように打った：

「なんてこと、キアセクは私の息子に何をしたの？ もし本当にネズミとかヒキガエルに変身したらどうしよう？」。

しかし、レジノは静かに乳を飲み続けていた。動物に変わるような兆しはまったくなかった：

「キアセクは面白いことをしたかっただけ、そうでしょ、いい子ちゃん？」。

そして彼女はあやすために優しく歌い始めた：

♪ 坊やねんねこしないなら
野良猫が市場に連れてくよ ♪

一時間が過ぎたが、レジノは相変わらず貪るように乳を飲んでいる：

「あら、今日は喉が渴いているのね！」。

♪ 坊やねんねこしないなら
野良猫が市場に連れてくよ ♪

さらに一時間過ぎたが、赤ん坊は乳を飲み続けている。
哀れな母親は疲れてしまった：

「もういいでしょ！ とにかく干上がっちゃったわ」。

彼女は赤ん坊を乳房から引き離すのにとんでもない苦勞をして、ようやくそれに成功した途端、赤ん坊は引き裂くような泣き声を上げ始めた：

「一体どうしたの、レジノ？ お腹でも痛いの？」。

彼女は乳首を息子の口に押し込んだが、彼は泣き続けた：
「待って、待って！ 砂糖水をあげるから」。

レジノは飲んだ。ところが飲み終えた途端に前よりひどく泣き出した。一晩中だよ、みんな。この子は一晩中泣いた。彼が泣き止むのは、飲物を与える時だけだった。渴き、渴き... ニュプシアに復讐するためにキアセクはレジノに永遠の渴きを与えたのだった。

レジノは成長したが、彼の苦しみを想像できるだろうか：
「喉が渴いたよ、パパ！ 喉が渴いたよ、ママ！」。

ところで私もちょっと水を飲みに行ってもいいかい？

何が原因か誰にも分からなかった。母親は彼を、医者という医者に診てもらった。あらゆる種類の薬を与えた：

「これを試しなさい、奥さん！ こっちも試して。涼味のあるハーブをあげてみて。下剤も...」。

何の効果もなかった：

「喉が渴いた！ 喉が渴いた！ 喉が渴いた！」。

彼の苦しみは一向に楽にならず両親は死ぬほど心配した。

レジノは二十五歳になったが、彼の苦難は続いていた。

彼は店から店へ、蛇口から蛇口へと走る生活を送っていた。だがシロップもレモネードも、樽ごと飲む水も、彼の渴きを癒すことはなかった。彼は思った：

『僕は呪われているに違いない。呪いをかけられたのだろうか？』。

そこで彼は占い師のところに行くことにした。

占い師はロウソクを燈してタバコを燃やし、次いで厚い魔法の書物を調べた：

「おお、まさにそうだ！ お前は魔法をかけられたのだ、息子よ。確かにかけられとる。お前にこの呪いをかけた者はとても強い。わしがお前を解放してやれるかどうか分からない。とにかくこれを試してみることはできるだろう」。

占い師はポケットから灰色の粉が一杯詰まった袋を取り出した：

「これはわしが持っている中で、この種の呪いに一番効くものだ。五千フランかかるがな」。

ところが、巡礼もノヴェナ^{【主にカトリック教会で行われている、神の恩寵または神への聖人の執り成しを願う九日間に亘る祈祷】}も護符も、あらゆる宗派の祈祷師も魔法使いも、誰も彼の助けにはならなかった。哀れな青年は万策尽きて島を離れ、別のどこかで自分の奇病の薬を探すことに決めた。

長旅は何年も続き、彼はサハラ砂漠からそう遠くないアラブ人の小さな町に辿り着いた。そこで彼は小さな屋台に

座っていた。ひどく暑かった。レジノは莫塵の上にぐったりと座り込み、すでに薄荷茶を四十杯とミネラルウォーターを五十本飲んでしたが、突然、声が彼を麻痺状態から呼び覚ました：

「この異国人はひどく喉が渇いとるらしいな」。

戸口でロバに乗った、年老いたアラブ人が笑いながら彼を見ていた。老人の目が善良さを湛えていたので、レジノは急に身の上を話したくなった。そこで彼は自分の不治の病について話し始め、幼い頃から耐えてきたことを語った。老人はそれを聴き、彼が話し終わると言った：

「あんたはとても苦しんだ、異国のの人よ。あんたは赤い砂丘に行かねばならぬ。それは砂漠の真ん中にある。噂ではその砂丘のふもとに魔法の樹があって、そのような苦しみを癒すとか。わしはその樹を見たことはないが、多くの旅人がそう話しておる。そこに着くには日が沈む方向を目指して、とんでもなく長い時間歩かねばならんだろう。とても辛い旅になるが、あんたが望むならばこのロバをやろう。こいつはあんたも水も運んでいける。

— 有難う、親切なお爺さん。旅の長さや僕が越えるべき困難なんて何でもありません。僕は治る方法を見つけるためならどんなことでもします」。

若者は出発し、小さなロバは革袋と瓶を両側に積んで進んだ。彼らは情け容赦のない太陽の下を三日間歩いた。水の蓄えはほとんど尽きかけていた。大地から蒸気のようなものが立ち上ってレジノの両目を曇らせた。彼は勇敢に進み続けた。しかし彼はあとどのぐらいもつだろうか。

すると突然、彼は目の前に大きな赤いものを見かけた。
それは確かにあの砂丘だった：

「着いたぞ、着いた、ちびロバ！」。

しかし小さなロバは彼の横にはもういなかった。レジノが道を戻ると、彼の道連れは砂の上で全身を震わせながら横たわっていた：

「何てことだ！ どうしたんだ、お前？ 待ってろ、いま水をやるからな」。

みんなには言わなかったけれどレジノはとても優しい奴だった。巨人のキアセクは彼の喉を渴かせることはできたが、心はそうではなかった。彼自身は不幸ではあったが、誰かが苦しむのを見るのには耐えられなかった。

彼は小さなロバの横にしゃがんで泣いていた：

「僕のせいだ、お前に運ばせた荷物が重すぎた。ほら、飲めよ」。

彼は残っていた最後の水の革袋を取って動物に飲ませた。
しかしもう動かなかった：

「死ぬんじゃない、ちびロバ。お願いだ、死なないでくれ」。

絶望の余り彼は革袋の中身を全部ロバの頭に注いだ。しかしそれは無駄な骨折りだった。ロバは既に死んでいた。小さな仲間もういない。もう一滴の水もない。悲嘆にくれてレジノは再び出発した。しかし、彼が進めば進むほど、目の前に見えていた砂丘は遠くなっていった。

突然、砂丘が消えた。しかしながら彼は正しい方角に向かっていった。地平線では大きな太陽が間もなく沈もうとしていた。レジノは溜息をついた：

「もう何が何だかわからない。それにしても、あの老人が僕に嘘をついたはずはない」。

彼の喉は干上がり、唇は乾ききっていた。身体全体が燃えているようだった。おまけに風が吹き始めた。その土地でシロツコ^{初夏にサハラ砂漠から地中海を越えて南東ヨーロッパに到達する南風}と呼ばれている熱い風が嵐のように吹き始め、砂を巻き上げ、彼の目の中や鼻の中に入り込み、身体中を突き刺した。

レジノは進み続け、でたらめな歩みが彼をどこに導くか知らないまま、気がふれたように走った。すると突然、彼は何か固いものにぶつかった。岩？ 樹？ 井戸？ とにかく時すでに遅し。へとへとになってレジノは倒れ込んだ：「死んでしまう！ でもそう悪くはないんじゃないか、結局は。死ぬことも」。

みんな、もしよければ、ここでちょっとレジノは脇においておこう。キアセクのことはもちろん覚えているよね？ 彼についてはしばらく音沙汰なしだったけれど。彼がニュプシアのもとを去ってからどうなったのか、多分私に聞きたいだろう？

巨人は復讐を果たしたが怒りは収まらなかった。彼は巨人の大きな歩幅で山から山へ、国から国へ、惑星から惑星へと渡り歩いた。巨人の大きな声で彼は喚きたて、回りのすべての人々を怯えさせた。彼が通った至るところで彼は争いを探し求め、混乱と不和の種を蒔いた。そして彼が立ち去った時、彼のあとには悲しみと荒廃しか残らなかった。

ある日、彼は大きな惑星に降り立った。そう、信じてほしいのだが、それはまったくまずい考えだった。その大きな惑星は妖精シリアヌの領地だった。彼女はとても力のあ
る妖精で、その任務は宇宙の平和を保つことであり、彼女はもちろんキアセクがレジノにしたことを知っていた：

「キアセク！ お前はあの哀れな小さい地球人にしたこと
のあとで、よくもまあ私の前に現れたな。すぐさまお前の
過ちを正しなさい。これは命令だ。

－ そんなことはどうでもいい。ここはお前の領地だ、シ
リアヌ。だが地球上で起きたことについてお前の指図を受け
るいわれなどない。

－ 私を怒らせるな、キアセク。後悔することになるぞ。
もう一度言う。レジノにかけた呪いを解くように。

－ 断じてだめだ。あいつの母親が俺を侮辱したのだから。
彼女は俺の人生をぶち壊した。あいつは彼女の代わりに報
いを受けねばならない。

－ くそ巨人め、三つ数えるうちに、いち、に、さん...」。
とてつもない足蹴りが巨人を宙に押し出した。

「ああああああ...」。

キアセクは目がくらむほどの速さで落ちて行った。彼の
大きな影が雲の間で渦を巻いていた。彼は巨人の重さで落
ちて行った。巨大な塊のまま彼は地上にぶつかった：

《ビシャッ、グシャッ！》。

そして彼はそこ、サハラ砂漠の真ん中に植えられた。そ
う、まさに植えられてしまったのだ。この場合はぴったり
な言い方だ。キアセクは樹になったのだから。

彼は上の方で雲の中にシリアヌの声を聞いた：

「お前はそこに留まるのだ、キアセク。今度はお前が渴きで苦しむことになる。お前が渴きの苦しみを理解できない限り、お前はずっとそこに留まるのだ。お前の心から愛が少しでも湧き起こらない限り」。

キアセクはあらん限りの力で大地から身を引き抜こうとした：

「えいっ、えいっ」。

しかし、彼がどれほど自分の根を引き抜こうとしても無駄だった。なす術がなかった：

「どうしてもだめだ。俺は鳥もちにかかった鳥のようにくつついてしまった」。

とんでもない暑さだった。彼はひどく喉が渴いた。雨が少しでも降ってくれたら... しかし雨は降らなかった：

「喉が渴いた、喉が渴いた。喉が渴いた。何か飲むものを、お願いだ」。

突然、彼は何か冷たいものが自分の根をくすぐるのを感じた：

「水ようだ。足元に水があるぞ！」。

キアセクは飲み始めた。根、幹、葉が飽きるほど水を飲んだ。彼は飲み込んだ。しかし飲めば飲むほど彼は渴いた。彼は自分が破裂しそうに感じたがやめられなかった。

彼は飲んで、飲んで、飲んで... 何という苦しさだろう：「助けてくれ、破裂しそうだ！ 水をちょっと吐き出さないと破裂してしまう、お願いだ！」。



まさにその時、彼は小さな蛇が砂の中で身をよじっているのを見つけた：

「蛇よ、蛇よ、俺を少し刺してくれないかい？

ー お望みとあればね。とにかくそれは僕の仕事だし。神様は刺すために僕を創られたんだ」。

そして蛇は彼を刺した。

何という救いだろうか。水が流れ出た時の何という安堵。キアセクは相変わらず渴いていたが、望むだけ飲むことができた。水は外に出てほとぼしった。巨人は樹のままだったが、それは樹の泉だった。遊牧民たちや、そこを通るすべての者たちは泉を見つけて大喜びした。キアセクも満足した。最初は単にそれが彼の苦しみを緩和してくれたからだった。しかしそのうちに彼は今まで知ることのなかった気持ちを感じていた。というのも、古い諺にはこうあるからだ：

《砂漠の中で人は自らが何者であるのかを真に知る》。

キアセクは徐々に幸福を見出していった。シリア又は彼を罰したが、それと同時にこの上ない贈り物を与えたのだ。彼は他の者たちを助け、彼らの渴きを癒し、命を救うことができた。そう、キアセクは変わった。完全に。

嵐が収まってレジノは目を開けた。葉むらの大きな手が彼の頬を撫でた。それと同時に彼は音楽を聞いた。心地よい音楽を：

『水だ、水が流れている』。

彼は振りむいた：

「おや、あれだ！ あれだ！」。

魔法の泉でレジノは飲み始めた。飲んで、飲んで、渇きがなくなるまで飲んだ。そう、奇跡が起こった。彼はもう渴いていない：

「治った、治った、僕は治ったんだ！」。

彼は踊り、歌い、美しい樹を抱いた。砂漠が歌い、そよ風が歌った。空では星々が笑った。

すると突然、一番輝いている星から声が聞こえた：

「お前はもう去ってもよい、キアセク。お前は自由の身だ。— ありがとう、シリアヌ。でも俺はここで幸せだ。ひとつだけお願いがあるんだ、俺のことをもうキアセクと呼ばないでくれ」。

私はシリアヌが彼にどういう名前を与えたかは知らない。確かなのは、彼が砂漠に留まったということだ。彼には風が世界の隅々まで運んだ多くの子孫がいる。レユニオンにも似た樹がある。それはラヴェナラ^{〔マダガスカル原産のゴクラクチョウカ科の樹木。葉に溜められた雨水を旅行者が利用した。 *Ravenala madagascariensis*〕}と呼ばれる。「旅人の樹」という意味だ。

22. ババ・レガ

アンヌ・シェネ

昔のお話を語ってあげよう。この話は短い歌、童謡から始まる。誰が作ったのかはもう覚えていないけど、知っている人がいたら私に教えてくれないとだめだよ。さあて、みんなと一緒に歌ってくれるかい？

♪ 月曜，火曜，水曜，木曜，金曜，土曜，日曜
月曜，火曜，水曜，木曜，金曜，土曜，日曜 ♪

みんなも分かっているに違いないけど、一週間には好きな曜日とそうでもない曜日がある。とにかく私が小さい時は水曜が好きだった。水曜の夜。どうして水曜の夜だって？ほら次の日が木曜だから。学校がない。その頃は「木曜が四日ある一週間」を夢見ていたもんだよ。

木曜は学校がないので水曜の夜に私はサン＝フランソワ
[レユニオン北部の島郡サン
＝ドゥニ市の南にある高地]まで登って行った。私がサン＝フランソワに住んでいたことを知っている人はここにもたくさんいるよ。水曜の夜にサン＝フランソワの、二つの峡谷のあいだに隠れている藁ぶきの家に登って行ったんだ。

ラジオもテレビもなかった。電気だってなかった。でも、うちには「映画」があった。小さな台所で父さんがお話を語ってくれた。だから私は水曜の夜が好きだった。翌日はクラスがなかった。ミサもなかったし。遅く寝てもよかつ

た。といっても夜の九時だけだね。遅くまで起きてお話を聴けた。

私が語ろうとしているのは、そういう夜に父さんが語ってくれた話だ。私は七歳か七歳半だったと思う。彼はそれを水曜の夜に語ってくれた。父さんが語ったそのままじゃない。何しろ大昔のことだから。それにお話というのは、糸の上、時間の糸の上を走るようなもので時間の糸は長い。だからぷっつり切れたら... 両端をつなぐしかない。父さんはそれを水曜の夜に語ってくれた。ベルタとサラの話を。

♪ 月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜、日曜
月曜、火曜、水曜... ♪

ベルタとサラは双子の姉妹で孤児だった。彼女たちはとても貧しかった。彼女たちは山地のプレヌ＝デ＝カフル^{レユニオン中部のピトン・デ・ネージュを中心とする山塊と、南東部のピトン・ドゥ・ラ・フルネーズを中心とする山塊の間にある高原。カフル（アフリカ系）の逃亡奴隷が隠れ住んだことからこの名がついた。}にあるノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ペ（平和の聖母）^{レユニオン南部の町ル・タンポンの北東にある典型的な高地の村}の近くに住んでいた。ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ペは知ってるかい？ 今じゃ小綺麗で洒落たヴィラがあるけれど、昔は草と牛糞を足した藁ぶき小屋しかなかった。

二人の姉妹はそこに住んでいた。そして私が言ったようにみじめな生活を送っていた。彼女たちは毎日森に行って、薪や少しの食べ物、ブレッド^{レユニオンに広く分布するナス科の植物で主に葉を食用とする *Acmella oleracea*}とか根っこかを探し、たまにタング^{マダガスカル原産の食虫小型哺乳類で肉が佳味。 *Ericaneus setosus*}に出くわすチャンスがあった。二人の孤児はそうやって生活していた。

その日彼女たちは、ザリガニを捕まえに峡谷まで降りて行った。その頃はまだ峡谷でザリガニを見つけられた。今じゃ滅多に見られないけどね。そのうち峡谷さえなくなるかも。そうなったら残念だ。だってザリガニを獲るのは本当に面白いんだから。面白いけれど難しい。今までザリガニを捕まえた人いる？ とにかく自分の経験からいうと、そういう小さな生き物を捕まえるのは面白いけれど難しい。手を水の中に入れて石の下を探さないといけないし、捕まえた時に指の間からすり抜けるし、時には挟まれたりする、いたた！ こんな風にして水の中に脚をつけて半日も経つと、そういうのをひとつかみほど捕まえることができ満足する。おっと、こんな風に話しているうちに娘っ子たちを見失っちゃいけない... よし、見つけた。

サラとベルタは川に戻った。岩から岩へと彼女たちはザリガニのあとを追いかける。捕まえてはスカートの裾に入れた。それは本当のことで、娘っ子たちはスカートをこんな感じでつまんで、獲ったものをそこに入れていた。サラとベルタのスカートの裾にはもうかなりたくさんザリガニが入っていた。ベルタが言った：

「もう帰りましょう。ルーガイユ【玉葱、生姜、トマトなどを使ったレユニオンの煮込み料理。ソーセージのルーガイユが一般的】を作れるほどあるから」。

二人の姉妹は水から出て坂を登り始めた。

♪ 月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜、日曜、月曜、火曜... ♪

彼女たちは長い間歩き続けた。突然、栗色をしたダイオウナスビ^[南米原産の低木。繁殖力の強い侵略種とされている。Solanum mauritianum]の草むらの下に奇妙なものを見つけた。それは乳母車、鉄製の乳母車だった。一体どういうことなんだろう？ 乳母車の中は空っぽだったが、横に石があった。大きな赤味がかかった石。その石はまったくおかしかった。赤ん坊だと言えるだろう。もちろんそれは偶然だし、自然の気まぐれだろうけど、細かく見ると、鼻、口、閉じた二つの小さな目、しかるべきところには小さな《おちんちん》。

ベルタは言った：

「何て可愛いの！ 本当に男の子みたい。ほら！ 《おちんちん》まである。家まで連れて帰ろうかな？」

ところがサラの方は姉のはしゃぎようを共有してはいなかった：

「ちょっと、本当に子供だったらどうするの？」

- 石でできた子供が？
- あんた分かってるの？ それ化け物かも知れないわよ。
- あんた頭おかしいの。これっておもちゃだってわからない？ 赤ん坊！ 乳母車だってあるんだし。いいこと、あんたはザリガニにかまっていればいいわ、私は《弟》の世話をするから」。

ベルタは自分が獲ったひとつかみのザリガニを妹のスカートの中に放り込んでから乳母車を掴んだ。そして彼女たちはまた歩き始めた。

♪ 月曜，火曜，水曜，木曜，金曜，土曜，日曜 ♪

乳母車はとても重かった。大きな石を積んでるからね！
双子の姉妹は頑張って進んだ。ところがかかなり歩いて、
彼女たちは家までの道を見つけられなかった。夜になっても
相変わらず下草の中をうろうろしていた。彼女たちは疲れ
切って心配になってきた。もう歌う元気もなかった。それ
じゃ、よければみんなで歌って彼女たちを励ますかい？

♪ 月曜，火曜，水曜，木曜，金曜，土曜，日曜，月曜，火
曜... ♪

突然、彼女たちは家の灯を見つけた。彼女たちは泊めて
もらうために近づいた。隅っこでひと晩を過ごせれば。彼
女たちはそれほど疲れていた。ところが誰もいなかった。
しかしながら、その家は空き家の感じはしなかった。灯は
明々と点いているし、心地よさそうだし、ベッドも食器も
あった。それに暖炉には切り揃えた薪まであった。

ベルタは心を決めた：

「よしっ。持ち主がないのだから、私たちはお邪魔じゃ
ないよね。食事をしてからちょっとひと休みして、また道
を進めばいいわ」。

彼女たちがザリガニを焼き始めようとした時、突然泣き
声が聞こえた。門の横に置いた乳母車が動いていた。サラ
は青くなった：

「あんたに言ったでしょ。こんなもの持ってきちゃだめだ
って言ったでしょ。これ《化け物》だわ。見つけた所に戻
しましょう。とにかく家に帰らないと」。

娘っ子は泣き出した：

「おうちに帰りたいよお、おうちに帰りたいよお」。

すると今度は赤ん坊の声がした：

「置いてかないでよお、置いてかないでよお！」。

ベルタが言った：

「可哀想な子。悪い運命の犠牲になって石に変えられたのね。私たちだってみなしごだわ。この子を見捨てて森でひとりにするなんてできないわ。面倒をみなくちゃ。

－ ベルタ、そうは言っても、育てるのにどこでミルクを見つければいいの？」

小さな声があった：

「僕はミルクなんか飲まないよ。霞を食べていけば十分なんだ。あなたたちをお願いしたいのは、僕のそばでここにいて欲しい、ということだけ。僕は自分の家から離れられないから。

－ でもあんたの家は私たちの家じゃないし、私たちは...

－ お願い、姉さんたち、僕を置いてかないで。頼むのは大したことじゃないし。毎朝乳母車を外に出して僕を地面に置いて、夜になったら僕をまた戻す、それだけだよ」。

こう言い終わると、赤ん坊は一瞬だけ石から出てきて、彼の本当の顔を覗かせた。可愛い赤ちゃんだった、本当に。かなりがっちりして（小さな^{SUMO}力士といった感じ）、赤土の色をした肌。でも可愛かった。この子を見捨てるなんてできなかった。それで二人の姉妹は、彼の世話をするために森に留まることにした。

毎日毎日同じことが繰り返された。彼女たちは朝になると彼を乳母車から出して地面に置いた。それから彼女たちは食べるものを探しに出かけた。草や根っこだ。そして夜になると彼女たちは戻って来て、石を持ち上げて乳母車に戻した。赤ん坊は大抵は眠っていたが、時折その小さな存在を示した。彼は石から出てきて微笑んだ。彼女たちに礼を言うように。

葉が沈んで石が浮く！^{レユニオン民話でよく用いられる決まり文句で不思議な事に添えられる}

神様が創り給うた地上には、本当に奇妙なものがある。そして悪魔はこれに関してはどうするか？ 悪魔は踊るんだよ、みんな。それには対処しなくてはいけない。悪魔は真ん中で踊る。それは制止しなければいけないだろう？

ある夜、双子が戻ると食事が用意されているのを見つけた。素敵な豚足カレーと銀シャリの鍋がテーブルの上で湯気を立てていた。ベルタが尋ねた：

「これ全部君が作ったの、《弟》くん？」。

しかし《弟》は答えなかった。いずれにしてもそいつは本当に嬉しい驚きだ。想像しただけでもよだれが出てくる。

ところが妹のサラは姉のはしゃぎようを共有してはいなかった：

「とにかく私はこの食べ物には手をつけないからね。どこから出て来たのかも、誰が作ったのかもわからないし。毒でも入っているんじゃない？」。

— そう、あんたが食べたくないのなら食べなくていいわ。でもね、私はまったく構わない。毎日食べるのはキャッサバとかブレッド。肉があったりなんかしても私にはきっと邪魔にはならないし」。

そしてペルタはテーブルについて二人分を貪り食べた。

クリケ！ みんなは？

（聴衆）クラケ！

藁はどうする？

（聴衆）沈む！

じゃ石は？

（聴衆）浮く！

それ以来、彼女たちが夜に戻ると双子はいつも新しい料理ができているのを見つけた。蒸し魚、ウサギのシチュー、ヤギの煮込み。彼女たちはビシック^{ハゼ類の稚魚でレユニオンでは高級食材 *Cotylopus acutipinnis*}まで味わった。今やサラもご馳走を楽しんでいる。それはそれは美味しかった。でもそれらは一体どこから来たのだろうか。不思議だ。

ある日、サラは事情をはっきりさせようと心に決めた。姉が森で薪を集めるのに忙しい間、彼女は家に戻った。彼女は家には入らなかった。彼女は見つからないように外にいて、小さな穴から見張っていた。

午後の五時頃に石が震え、彼女は赤ん坊の声を聞いた：

「ティンバリバ、ティウンバラウ、石よ、石よ、開け。ティンバリバ、ティウンバラウ、ティンバリバ、ティウンバラウ」。

その声は段々大きくなった：

「ティンバリバ、ティウンバラウ、ティンバリバ、ティウンバラウ」。

すると突然：

《バン！》。

石が飛んで、耳をつんざくような音と共に、真っ二つに割れた：

「ラオオオオオオ！」。

ひとりの巨人が立ち上がった。彼は途方もなく大きく、両手で家の屋根を持ち上げてまた唱えた：

「ティンバリバ、ティウンバラウ、ティンバリバ、ティウンバラウ。火よ、火よ、燃えろ」。

すぐに大きな炎がかまどに立ち上った：

「ティンバリバ、ティウンバラウ、ティンバリバ、ティウンバラウ。ソーセージよ、ソーセージよ、上から落ちてこい！ ソーセージは滑れ、ソーセージは滑れ」。

ソーセージの房が天井を突き抜け、鍋の中に着地した：

「米よ、米よ、スパイスよ、スパイスよ」。

瞬きする間に料理ができ上がりテーブルに置かれた。水差しに入った新鮮な水、グラス、皿、すべてが揃っていた：

「これで姉さんたちはたくさん食べるだろう。そうして彼女たちが十分太ったら、その時は彼女たちの番、彼女たちの番、彼女たちの番、彼女たちの番、彼女たちの番...」。

声が段々小さくなった。巨人は赤ん坊の姿に戻り、石の中に帰った。

サラは怖くて死にそうだった。彼女は音を立てずに姉を見つけに行った。ベルタは頭に薪の包みを載せてちょうど道に着いたところだった：

「あら、サラよかったわ。私をたったひとりで働かせておいて。やっと今頃来たの？

－ 大きな声を出さないで、ベルタ！ あいつに聞かれちゃう... あいつ人食い鬼よ！ あんたが言ってる《弟》は鬼なのよ！ 毎日私たちに美味しい食事を作って太らせて、私たちが十分肥えたら食べるつもりなんだわ。

－ あんた何を言ってるの？ 彼には何も無いところから物を出すという賜物があるのよ。カナの婚宴の時のイエス・キリストみたいに！【水を葡萄酒に変えたイエスの最初の奇跡。ヨハネ福音書二章一～一節】 それって私たちにも彼にもいいことよ。私たちを食べるなんて！ そんなのでたらめよ！ とにかくあんたは、あの子のことを愛したことなんかないしね。だからあんたのこと信じないわ。

－ あんたが私のこと信じないのなら、私と同じことをやるべきよ。あの子をこっそりと見張るの。そうしたら自分の目で見てわかるわ！」。

翌日になり、今度はベルタの方が妹を森に残して家にこっそり戻った。彼女はベッドの下に隠れて待った。午後五時になると石が動き始め、赤ん坊が変な言葉で話し始めた。石が開いて巨人が出てきた。そして前日とまったく同じことが起こった。ソーセージの代わりに蛸だったことを別として：

「これで姉さんたちはたくさん食べるだろう。そうして彼女たちが十分太ったら、その時は彼女たちの番、彼女たちの番、彼女たちの番...」。

化け物が石の中にまた収まるや否や、ベルタはそっと出て来て妹のところに戻った：

「あんたが正しかった、サラ。あいつ本当に悪魔だわ。あいつから離れないと。でも出て行くのは無理ね。七時になって戻っていなかったら私たちを探し始めるわ。

－ じゃあ解決方法はひとつしかないわね、あいつを殺すのよ！

－ でもどうやって？ あんたも私もあんな大きな怪物に立ち向かえやしないのに。

－ 考えがあるの、ベルタ。ブリキ鍋一杯のお湯を沸かして、不意をついてあいつを煮ちゃうのよ」。

二人の孤児は家に帰り、いつものように石を荷台の枠に戻した。うーん、この蛸のカレーはいい匂い！ 彼女たちほもりもり食べた。それから彼女たちは大きな鍋にお湯を沸かした。彼女たちはその中に干した唐辛子を一杯掴んで入れた。

石が甘えた声で小さく尋ねた：

「何やってるの？

－ お湯を沸かしているのよ。

－ 何でお湯を沸かしているの？

－ お風呂に入るためよ。川の水もいいけれど、たまには熱いお風呂も悪くないわ。心配しないで《弟》くん、しっかり寝なさい。

— どうしてお風呂に唐辛子を入れたの？

— ああ、それはね、血の巡りをよくするため。《弟》くん、しゃべれるような赤ちゃんがそんなことも知らないの？

さあ、心配しないで寝なさい」。

石は何も言わなかった。

お湯が沸いた時、姉妹は鍋の取っ手をそれぞれ掴んで持ち上げた。すると石が尋ねた

「その鍋を持って一体どこに行くの？

— 外に行くのよ、とにかくあんたの前で私たちはお風呂に入れないでしょ？」。

彼女たちはゆっくりとドアの方に進んだ。乳母車の高さまで持ち上げると、彼女たちははずみをつけた：

《ジャー！》。

そしてあとも振り返らずに逃げ出した。しかし、みんなが思っているように、鍋のお湯だけではこういう化け物を殺すには足りない。何と言っても、石の中でしっかりと殻で守られていたのだから。

《ヴォオオオオオオ》

大きな石が爆発して巨人が立ち現れた：

「魔女どもめ、卑劣な奴らだ。俺を煮殺そうとしたな！ 見てろよ、目に物見せてやるぞ。ちっぽけなウジ虫どもめ！」。

そして彼は姉妹目掛けて突進し、二秒後には姉妹に追いついた：

「捕まえてやるぞ、捕まえてやる」。

ところが彼は大きすぎて、彼女たちは小さすぎたので、彼女たちは逃げる方法を何度も見つけた。彼が大きな脚を

振り上げると、彼女たちはその下をくぐった。ひとりが藪の中に隠れ、もうひとりはバナナの房の中に隠れる。ひとりが岩の窪みに隠れ、もうひとりは運河の中に隠れる...
「捕まえてやるぞ、どこだ、どこにいる？」

どうやったか知らないけれど、双子は彼よりも先に《カル婆^{[レユニオン^{レユニオンの民話に}の民話に}よく登場する魔女]の穴》がある有名な山頂^[レユニオン南東部の活火山]に着いた。みんなは《カル婆の穴》のことを聞いたことがあるかい？ それは《火山》の中にある。というか、あった。というのも今はもうそこにはないからだ。

二人の姉妹はそういうわけで《カル婆の穴》の近くに着いた。しかしそこからさらに遠くへ行くことはできなかった。というのも、カル婆自身にそこを通してもらわなければならなかったからだ。彼女が傘を開いて、その下を架け橋のように通るというわけだ：

「カル婆さん、カル婆さん！ 助けて！ 大きな鬼が追いかけてくるの。」

－ わかってるよ。あいつはババ・レガ。でかい火の魔術師だ。ほれ、早く通るんだ、子供たち」。

カル婆は傘を開いた。彼女は火口の上に橋を作り、双子を反対側に通してやった。ほんの数秒後にババ・レガがやって来た：

「カル、俺は二人の小娘を探しているんだ。急いで通らせてくれ。でないとあいつらに逃げられてしまう。」

－ 待ってくれババ、コーヒーを濾しているところだ」。

ババ・レガは火口の端で待った。双子はそこを走り続けていた：

「カル、コーヒーは濾し終わったか？

－ はいよ、ババ。でも次に温め直さないかね。」

巨人は我慢せざるを得なかったが段々苛立ってきた：

「で、コーヒーは熱くなったのかい？

－ なったよ、でも砂糖を入れないかね。

－ どうだい？ コーヒーをしっかりと甘くしたかい？

－ まだだよ、ババ。スプーンを探しているところだ。」

娘っ子たちは既に遠くにいた。彼女たちのシルエットは霧の中でようやく見分けられるぐらいだった。

「スプーンは見つけたのか？

－ …

－ カル、コーヒーをかき混ぜたかい？

－ ああ、でも味見させてくれよ。」

ババ・レガは本当にいらいらしてきた：

「カル、お前の仕事は傘を開いて人を通すことだろうか？

－ 待ってくれ、ババ。いま傘を探しているところだ。

－ このクソ魔女婆め、その傘を開かなかったら穴に小便してやるぞ！」。

ごめん、きたない言葉だね。でも私が悪いんじゃない。ババ・レガのような化け物はいつも丁寧というわけじゃないし、いつも練りに練った言葉を話すわけでもない。さて、みんなが思っているように、彼の下品さにはカル婆も辟易した：

「待つんだよ、この畜生め。私に馴れ馴れしくしたらどうなるか教えてやるからね。生意気な野郎だね。用意はいいかい？」。

カル婆は傘を開いた。しかし、ババ・レガがそこに足を踏み出した時、彼女はそれを閉じた。そこで何が起こったのか想像できるかな？ 巨人は穴の底に落ちて両足を折ってしまった。彼はもう歩けなかった。

カル婆は穴の底で彼と永久に留まることなんか嫌だったので彼に傘を渡した：

「ほれ、これをやるよ。今後はお前がこの番をするんだ。お前が隠遁するためのいい暇つぶしになるだろうよ。私は引き揚げるから」。

そう言って彼女は鳥に変身し大きく鳴いて飛び去った：

「トゥトゥ」。[レユニオンでは、カル婆が夜になると人の死を告げる不吉な黒い鳥に変身して飛び回るといふ言い伝えがあり、しばしばトゥトゥ鳥と呼ばれる]

時々彼女は火口の上にやって来るが、それは巨人がまだ生きていのかどうか確かめるためだ。でも巨人は彼女が自由に飛んでいるのを見て怒りの余り岩を壊し、砕き、カル婆目掛けて燃えている石の山を投げつけた。しかしカル婆は優雅に身をかわして飛び続けた：

「トゥトゥ、トゥトゥ」。

私のお話はこれで終わりで、すべてがめでたしめでたしで終わる。みんな確信しているように少女たちは逃げおさせた。彼女たちはノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ペの家に戻って平和に暮らした。彼女たちはこの出来事からひとつ学んだ。それは、道端で見つけた変な石は何であれ拾ってはいけないということだ。

それからみんな、みんなも今日多くのことを覚えた。我々の《火山》がどうやって生まれたのか、カル婆がどうやってトゥトゥ鳥になったのか。それにまた、巷間伝えられて

いるのとは違って、カル婆が悪人ではないということも知った。彼女は罰せられるに相応しい連中しか罰しない。

もちろん、それらのすべてについて、信じていいことと放っておくべきことがある。ただ、お話が嘘でもそれは私のせいじゃない。

いずれにしても、ある日、私はその巨人の様子を知ろうとピトン・ドウ・ラ・フルネーズに登った。私が彼の名を呼ぶや否や、彼は大きなおならをした。それが余りに大きなおならなので、私は空中に吹き飛ばされてしまった。

私は空を飛んだよ。ブール＝ミュラ^[ブレヌ＝デ＝カフル近くの村]の上、ブレヌ＝デ＝カフルの上、アントル＝ドゥー^[レユニオン南西部にあるサン＝テチエンヌ川の二つの支流に挟まれた村]の教会の上を過ぎてここに着地した。ジャン＝ピエール・アカパンディエ氏宅の庭にね。みんなにこのお話を語るために。父が水曜日の夜に私に語ってくれたお話。もう大層昔のことだけど。

23. 秘密のコーヒー

ジャン＝ピエール・アカパンディエ

クリケ！

（聴衆）クラケ！

イエ ミツイグリ！【アカパンディエ氏によると不思議譚にはこの「応答」がよく用いられる。「mistigri」はフランス語「mystérieux（不思議な）」からの派生語】

（聴衆）イエ ミツイグラ！

アイー！

（聴衆）ウォー！

イエー！

（聴衆）ワー！

これはきれいなものを見たときの感じで。

これから語るのは、ここからそれほど遠くじゃなくて、そんなに離れていない町で起こったことだ。その町はサン＝ジョゼフ【レユニオンのほぼ最南端の町】と呼ばれている。そこに、ある奇妙な出来事の起こった場所があって、年寄りたちはその出来事を「秘密のコーヒーの話」と呼んでいる。

みんなコーヒー飲んでるかい？ 僕もコーヒーは好きさ。

♪ 幸せな時、僕は赤い

不幸な時、僕は黒い

僕のことをブルボン・コーヒーと呼んでくれ

僕はレユニオンで生まれたんだ ♪

僕がさっき話したサン＝ジョゼフの高地では昔、トタン屋根で木造りの小さな家がたくさんあって、住人たちはそこで暮らし、色んなものを作っていた。例えばゼラニウム、ヴェティヴェール、サトウキビ、キャッサバ、トウモロコシ、ジャガイモなどといった、精油や食べるものだ。

その反対側の峡谷の近くに少年が住んでいた。もちろん、彼はひとりで住んでいたわけじゃない。彼はそこでママとパパと一緒に暮らしていた。彼らは田舎風の小さな家に住んでいて、そこで幸せに暮らしていた。その少年はチグイという名前だった。

ある日、ひとりの男がサン＝ポール^[レユニオン北西部にある町でかつての島都]からやって来た。彼はサン＝ジョゼフを大層気に入って、住民たちにコーヒーを見つけたら金を払うので、それで米が買えると伝えた。ええっ！ コーヒーで米が買えるって？

そこでみんなは高地の森まで登り始めた。ある者は籠を持ち、ある者は両手にバケツを持って行った。彼らは高地の森の中に着いて毎日コーヒーを探した。ところがそのコーヒーはとても希少なもので、見つけるのがとても難しかった。もし運がよくて実がついている樹を一本でも見つけたら、それが熟していなくても取るしかなかった。そうしないと仲間たちに遅れをとることになるからだ。

クリケ！

（聴衆）クラケ！

イエ クリ！

（聴衆）イエ クラ！

さてみんな、コーヒーを見つけたらとにかく籠一杯に集めなくちゃいけない。それも最低一回や二回は。かなりの量を採ったら、屋外に置いて強い太陽の下で乾かす。十分に乾燥したらサン=ピエールまで運ぶ。最後にはコーヒーは全部売って、船で日本やフランスやアメリカなど色んなところに運ばれるというわけさ。

アイー！

(聴衆) ウォー！

毎朝チグイはパパとママと一緒にとても早い時間に起きた。陽もまだ昇らないうちに彼らはトウモロコシを水車で挽き、ジャガイモやキャッサバを幾つか火にかけ、コーヒーを探す時間になると炭火を全部灰に埋める。それからパパとママは高地に行って森の中で半日を過ごすのだった。

クリケ！

(聴衆) クラケ！

こうやって両親が森に行ってしまうと、チグイは長男だったので、彼が弟たちの面倒を見ることになる。ところが彼は毎日毎日弟たちの世話をするのにうんざりしていた。ちょっとどころではなかった。

ある日、彼はほとんど疲れ果てた。弟たちが彼の耳元で叫ぶのをやめなかったからだ。彼は弟たちに言った：

「おい、僕を疲れさせるのをやめてくれ。耳元で四六時中叫んでいやがる。僕は今日やることがあるんだ。僕はパパとママを追いかけて高地の森に行くぞ。森でコーヒーを探すんだ。多分、誰も見つけたことのないような最高のコーヒーを見つけてやる」。

イエ クリ！

（聴衆）イエ クラ！

アイー！

（聴衆）ウォー！

チグイは小さいリュックを取って、籠の中にトウモロコシとジャガイモを入れて背中に背負い、ヒョウタンを取って水を満たし、森に向かって登った。彼は嬉しかった。高地の小道で彼の心は浮きたった。ほら、たくさんの緑色をした小鳥たちが蘭の花の中で食べ物を探していた。それに多くの蜜蜂たちの羽音が彼の耳に聞こえた。いろいろな色の蝶が彼の前を飛んでいた。チグイは嬉しくて笑った。

イエ クリ！

（聴衆）イエ クラ！

イエ ミツィグリ！

（聴衆）イエ ミツィグラ！

彼は歩いて、歩いて、歩いて行くうちに森に着いた。森に着くとチグイは、コーヒーの樹がないかあちらこちらを

探し回った。そこにはあらゆる種類の樹や花があったが、コーヒーの樹は見つからなかった。それでも彼は挫けなかった。彼は歩き続け、そのうちにどこを通過して来たのかわからずに迷ってしまった。森の中はあちらこちらに蔓がはびこり、道を覆っていた。彼は困り果てて思った：

『どうすればいいだろう？ 道を見つけないと』。

そこで彼は道を探し回った。すると彼は大きな穴を見つけた。それはタングたちが掘った穴だった。チグイはその中に入って進み、彼が穴の反対側に着いた時、そこにはさらに大きな森があった。彼はそこでもまたコーヒーを探し続けた。

彼は歩いて歩いて、探して探した。しかしコーヒーの樹は見つからなかった。太陽は既にサン＝ルイ<sup>レユニオンの
南西部の町</sup>の方に傾いていた。そこで彼はふと思った：

『おっと、太陽はもうサン＝ルイの方まで落ちたぞ。もうすぐ森の中は暗くなって僕はここに取り残されてしまう。暗くなったら、カル婆さんが僕を探しに来るかも知れない。もう手遅れかも知れないからすぐに家に戻らないと』。

チグイは道を見つけようと走りに走ったが、いくら進んでも回り回って戻るだけだった。いつも同じ樹の前に戻るのだった。彼は言った：

「ああ、完全に迷ったみたいだ。どっちへ行けばいいのか全然分からない。そのうちにカル婆さんが森に僕を探しに来るだろう。どうしよう。パパとママの言うことを聞くんだった」。

そして闇が森を覆った。チグイは森の中で独りきりだ。すると突然、彼に大きな音が聞こえた。樹の枝が打ちつけ合う音、風が唸る音：

《ヴー、ヴー、ヴー、ヴー...》。

チグイは怖くなった：

『何てこった。多分大悪魔^{【レユニオンの民話に登場する、カル婆さんと並ぶ悪役】}かカル婆さんがやって来たのかも知れない。どうしたらいいだろう』。

そこで彼は樹の大きな根の後ろに隠れた。色んな音が聞こえて、目の前にコウモリまで飛んで来た。彼は恐ろしさの余り眠くなってしまった。彼は眠って奇妙な夢を見た。

夢の中で彼は滝を見た。そして滝の後ろに洞窟があるのを見た。その洞窟の中には、底の方に光り輝く場所があった。チグイが光に向かって近づくと一羽の鳥が、彼の目の前に羽ばたきながらやって来た。そこでチグイは目を覚まし、それと同時に太陽が明るくなり始めた。チグイは起き上がって道を進みコーヒーを探し続けた。

イエ クリ！

（聴衆）イエ クラ！

イエ ミツィグリ！

（聴衆）イエ ミツィグラ！

彼は歩きに歩き、小さな峡谷に着いた。彼は惨めな有様だった。その時チグイは何も持っていなかった。キャッサバとトウモロコシは昨夜のうちに全部食べてしまった。彼は山葡萄の樹を見つけて思った：

『山葡萄は苦いし、お腹の足しにはならないな』。

それでも彼は幾つか実を取って食べた。それから彼はもう少し大きな別の峡谷に着いた。そこでもコーヒーをあちこち探し回ったがまったく見つからなかった。

アイー！

(聴衆) ウォー！

彼はさらに他の大きな峡谷に着いた。そこは水が滔々と流れる大きな川だった。その川をチグイは渡らなければならなかった。そこで彼は川を遡ることにした。彼は歩いて歩いて、そのうち太陽はサン＝ルイにかかっていた。

突然チグイは大きな滝の前に着いた。すると彼は昨夜見た夢のことを思い出した：

『そうだ、昨夜僕が見た夢は嘘じゃなかった。多分滝の裏にはきっと洞窟があるはずだ。そして夢に出てきた小さな光が見つかるだろう』。

チグイはひと飛びして滝に掴まり、上に登り始めた。彼はしっかりと掴まって登って行ったが、バラをつかもうとして手が滑り、落ちてしまった。

イエ クリ！

(聴衆) イェ クラ！

イエ ミツィグリ！

(聴衆) イェ ミツィグラ！

彼は滝の裏側に落ちた。すると、みんなは信じないだろうが、何とそこに本当に洞窟があったんだ。チグイはその洞窟の中に入った。洞窟を進んで行くと奥の方で小さな光が輝いていた。彼はさらに進み、奥に突き当たると古いコーヒーポットを見つけた。それはとても古くて錆ついていた。彼は言った：

「あれ、このコーヒーポットは何でこんなに輝いているんだろう？ 信じられない」。

そしてコーヒーポットを取り上げた時、彼は思わず目を閉じた。光が急に強くなったからだ。その時突然、声が聞こえた：

「俺の眠りを邪魔するのは誰だ！」。

チグイは怖くなってコーヒーポットを下に置いた：

「何だこりゃ？ コーヒーポットがしゃべったのか？」

－ もちろんだ、俺がしゃべっているんだ。小僧、どうやってここまで来たんだ？

－ いや、道に迷っただけです。

－ 道に迷っただけだと？ どうしてお前のような子供が森のこんな所まで来たんだ？ 何をしに来た？ まだ死んでないならな。

－ えっと、嘘じゃありません。昨日からコーヒーを探していたんです。

－ 昨日からコーヒーを探していたと？ ハハハハ、お前はコーヒーが欲しいのだな。お前にあげることができるぞ。俺は長い間コーヒーを育てているから、どれが今までで最高のコーヒーかを教えてやれるぞ、小僧！

－ ところであなたは どうやってここまで来たのですか？

－ ああ、それを話すとすると、とても長い話になってしまうぞ。それよりもチグイ、もう遅いからお前は家に帰らなければ行けない。ママとパパもお前を探しているに違いない。

－ えっ！ どうしてあなたは僕の名前を知っているんですか？

－ ハハハ、お前の名前は知っているし、他のことも知っている。でも遅くなったから、お前は今すぐに家に帰った方がいい。

－ はい、でもどうすればいいのですか？ 僕は道に迷ったので。

－ ああ、それは考えなくていい。簡単なことだ。まず俺を手にとってしっかりと抱えろ。それから目を閉じるんだ。そうしたらあっという間にお前は家に戻っている」。

イエ クリ！

(聴衆) イエ クラ！

イエ ミツィグリ！

(聴衆) イエ ミツィグラ！

信じたければ信じればいい、信じたくなければ信じなくてもいい。チグイが目を閉じた瞬間、彼は家に戻っていた。ママとパパが彼を見たのは二日ぶりで、哀れな少年はとても疲れていた。そこでママとパパは彼に言った：

「ほら、部屋に行って寝なさい。それから話をしましょう」。

チグイはコーヒーポットを抱えて部屋に入った。部屋に入ると彼は古いコーヒーポットをベッドの下に置いた。チグイは眠りにつき、夜になって両親も寝た。

翌朝チグイが起きるとパパとママも起きた。みんなは中庭に立派なコーヒーの樹があるのを見つけた。たくさんの赤く美しい実が生って、早朝の風に揺らいでいた。

イエ クリ！

（聴衆）イエ クラ！

イエ ミツィグリ！

（聴衆）イエ ミツィグラ！

村中の住人が興味を持って噂をした：

「おいおい、どうやってこんなコーヒーの樹を手に入れたのだろう？」。

チグイは彼らを見て笑っていた。

ある日、彼はあの古いコーヒーポットのことを思い出して、ベッドの下に見に行った。ところがコーヒーポットはそこにはなかった。コーヒーポットは消えてしまったんだ、みんな。チグイは彼に起こったことを誰にも話さなかった。だって、誰が信じるだろう？ チグイの親族の七人だけが知っていて、彼らはあらゆる種類のコーヒーを中庭に植えて裕福になった。

イエ クリ！

（聴衆）イエ クラ！



その時以来、その高地の村は《コーヒーポットの平原》と呼ばれた。もしサン＝ジョゼフに行くことがあれば、その《コーヒーポットの平原》を見られるし、村に通じる道も見られる。それは今じゃ《チグイの道》と呼ばれている。

♪ 幸せな時、僕は赤い
不幸な時、僕は黒い
僕のことを秘密のコーヒーと呼んでくれ
僕はレユニオンで生まれたんだ
幸せな時、僕は赤い
不幸な時、僕は黒い ♪

イエ クリ！
（聴衆）イエ クラ！

♪ 僕のことをブルボン・コーヒーと呼んでくれ
僕はレユニオンで生まれたんだ ♪

インド洋のクレオール民話 ―セーシェルとレユニオン―

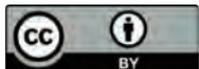
編者 小田淳一（訳），小田賢（絵）

発行 東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

印刷 日本ルート印刷出版株式会社

2023年12月31日発行
ISBN 978-4-86337-431-7

© 2023 Jun'ichi Oda, Masaru Oda



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

